

良書百選

日本圖書館協會編

第三輯

6 7 8 9 10m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10m

始



良
書
百
選

第三輯

法社人團 日本圖書館協會編

露光量違いの為重複撮影

金助一田京著人ノ北

隨筆集

著者が言語學者として、また民俗學者として、アイヌ語學・アイヌ民俗の研究に、殆ど一生を捧げて前人未踏の獨創的研究を完成したる世界的權威であることは既に周知の事實である。

本書、収錄するところは、主としてその頃筆、感想なりといへども、著者が多年、雲煙縹渺たる北島の幽谷山野を踏査跋涉して得たる尊き實感と爲らざる體験とは、溢るばかりの人間愛を満へ、流麗・典雅なる文辭に託せられて、その全貌をあらはし、懶々として讀者の胸臆に訴へるものがあらう。豊かなる著者の詩想と鋭き感受性と人道主義的人生觀とは隨處に閃きを見せて、繙く者をして、今更の如くその崇高なる人生觀と抱撫的なる人間愛とに讚歎し、驚異し、涕涙滂沱たらしめずには置かないであらう。

我等はかかる良著を廣く江湖に紹介するの機會を得たるを祝福し、誇賞するのに堪へない。偏に大方の清要を要望する。

下旬刊

スブルア本日 検探と山登

閑校治重部田 謙一精村岡
跋恒有 横跋水島小 跋治重部田

著ントスエウ
四六判三百餘頁寫真五葉裝釘典雅 定價二圓 送料二十一錢
四六判三百餘頁寫真五葉裝釘典雅 定價二圓五十錢
送料二十錢

新村 出著	南 國 巡 禮	濱田耕作序
柳田國男著	秋 風 帖	京都帝國大學 教授文學博士
竹友漢風著	文 學 遍 路	帝室博物館 學藝委員
新村 出著	南 國 巡 禮	京都帝國大學 教室
柳田國男著	秋 風 帖	京都帝國大學 考古室
竹友漢風著	文 學 遍 路	京都帝國大學 教室

關保之助序 五月上旬刊
五百部
豫約期間 四月三十日
内容見本
三月下旬出來

岡書院
東京市神田區駿河臺一ノ八
電話神田二七七五番
振替東京六七六一九番

武田久吉著 尾瀬と鬼怒沼
五百部
定價二圓五十錢
送料二十錢

小島島水著 水河と萬年雪の山
五百部
豫約期間 四月三十日
内容見本
三月下旬出來

岡書院
東京市神田區駿河臺一ノ八
電話神田二七七五番
振替東京六七六一九番

房書梓
東京市神田區八番町四四七番
電話神田二七八六番
振替東京六七六一九番

我が日本圖書館協會は昭和六年七月以來文部省援助の下に社會教育會と協力して、社會教育上裨益するところある優良圖書の推薦を行つて來た。本協會はそれがために特に調査部を設け、調査委員十一名をあげて新刊圖書に就き調査に當らしめ、毎月一回定期に調査委員會を開いて慎重審議の上推薦したる良書を、「圖書館雜誌」並に「社會教育」に發表して、一般社會人の圖書選擇の利便に供して來たのである。かくて昭和七年五月推薦圖書百種を選んで「良書百選」と名づけ其第一輯を、翌昭和八年三月其第二輯を刊行して全國公私立圖書館並に各關係方面に頒布したが、更に今は昭和八年四月より翌九年三月に至る推薦圖書百種を收録して、茲に其第三輯を刊行することとなつたのである。幸にこれがまた舊く讀書人の圖書選擇上の指針となることを得ば本協會の沟に本懷とするところである。

なほ特に推薦文を執筆せられた各方面の權威者に對して深く謝意を表する次第である。

昭和九年三月

社團法人日本圖書館協會理事長

松 木 喜 一

哲學·倫理·宗教

目次

1

哲學の話 武士道の復活 國民思想の淵源
思想史本奈良朝國民の精神生活 日本精神に關する一考察
日本精神の闡明 日本精神の闡明
論理學概論 私感語 生を語る
神ながらの道 現代人の佛教概論
佛敎概論 現代人の佛教概論
禪に生くる 訂讀美歌物語
改讀美歌物語 現代の世界史

國史學入門　趣味の史話　少年國史物語　滿洲國歴史　拔群の人々
アダム・スミス傳　機械ワット正傳　世界英口　機械の父　スキー・ツー・アフターフォード正傳　世界英口
近畿景観　とふるさと　山と　印度の眞相　歐洲の憶ひ出　遊歐雜記（ドイツの巻）　南米繪の旅　日本政治動向論　議會政治論　政治・法

歷史·傳記·地誌·紀行

现代汉语词典

卷之三

治論 馬場 恒

改恩 給法精解
經濟の變革
非常時日本の財政及經濟
新女性經濟講話
マルクス死後五十年
日本教育的心理學
教育行政撮要
個性調査と職業指導の原理
子供の遊ばせ方
子女公民讀本
青年團の經營
ナチス
わが海軍
兵營の異聞と秘話

上原正秀、三三郎、松幸三、孝三、島田中、津村中、小泉中、冲田中、大津田、上原秋、稻崎淺太郎、高橋恒信、三木三郎、下村壽一、坂内寛壽、吉村千鶴子、谷辰次郎、熊谷守一郎、長谷川善郎、陸軍省新聞班、軍研究社、四三四、四二四、四〇三、三九三、三七三、三五三、三三三、三一三、三〇三、二八三、二六三、二四三、二二三、二〇三、一八三、一六三、一四三、一二三、一〇三、八三、六三、四三、二三、一三、一〇、八、六、四、二、一

電學氣物語
人化學物語
地測候瑣談
生物學十講
千種色昆蟲圖譜
蟲之社會生活
動植物語
生測候瑣談
產能率百話
交水生活二十年
通物語
美術・諸業

松	津	大	動	三	三	上	松	平	大	中	岡	坪	龜	益	石
山	田	塚		井	浦	野	村	山	島	島	田	井	高	田	原
思	青	保		高	定	陽	松	正	穀	武	忠	德	苦		
水	楓	治		陽	助	一	次	郎	滿	一	松	二	平	良	純
堯	兵	毛		毛	兵	登	登	西	至	至	堯	堯	哭	哭	

自然科學

科 學 隨 想

西村真琴四四
久重巖四五

書道と畫道

津田青楓兵

III

良書百選
第三輯

哲學の話

第一哲學·倫理·宗教

第三輯

本書は著者が、放送局の、「家庭大學講座」で放送した講演を、のちに口述筆記させたものである。はしがきに「やゝもすると、平凡の意味も言葉だけでむつかしくなりそうですから、言葉に苦勞のないよう、従つて、どなたにも近づきやすいように、哲學を話してみたのです」「哲學上の考えはたれの心にもあることですから平易に御話したら、皆さんの心にはいつて、一所に考えてみることも出来ようと思つたのです」

とあるやうに、できるだけ難解なことばを避け、なるべく多くの人に讀ませるやうに努めて、書かれた哲學入門書である。

取扱はれた内容からいへば本書は普通の哲學概論であつて、先づ「哲學の意味」を明かにすることから始めて、以下「實在の問題」「認識の問題」「人生の問題」に分けて叙述したものである。

哲學は、著者のいふやうに誰の心にもあり、また誰のものでもなければならぬ。然し現在では哲學は、極めて常識とかけはなれた難解なものとされてゐるのが普通である。勿論學問の研究は、進めば進むほど、専門的素養なくして直ちに理解し難くなるのは當然であらう。これを直ちに誰にでもわからせようとすることは、單なる哲學の通俗化を意味するにすぎず、それが哲學の進歩には、勿論のこと、人間精神の向上にも役立たないことはいふまでもない。哲學を分りやすく説明するといふことは、あくまで、哲學的に考へることへの

文學と感情　日本文學史概說　自然禮讀讀本　思想遠近　武藏野にをりて
わが子を歌へる　日本和歌讀本　歌話と隨筆　八代集選釋本　芭蕉集
芭蕉の研究　歌集　青牛　集歌　芭歌　集

文
學

新日本合戦譚文
姉邊闇話ふ
詩爐は夜
英米文學の背景
文學散策
えゲーテの生涯
・びやん
日本發見
日本新聞紙の研究
日雲莊隨筆
開闢談の開
弘師堂講話
百人のんびりした話
鬼園隨筆
・世間・自然
・友・書籍集
・自然

内相森小林吉入上柳
田馬田泉野澤西半澤
百御草信作達三
間風平三陸造吉健
吉允公公金公金公

手引を與へるといふことでなければならぬ。そしてこのことは、本書のやうに、あらゆる世間の人々を對象とするとき、決して容易なわざではないであらう。著書も

「哲學は學問の内で最も難しいものだとわれています。……これを易しう御話しようとついては、豫め十分この難物をかみくだいていなければならぬので、眞に恐しい野心とも申されませう。従つて、もし易しく御話出来たとしても、それは一部分のことであつて、少しばかりかみくだいてみたまでも、もちろん私の話が解つたとしたところで、哲學そのものがすつかり解つたことはなりますまい。」

といつてゐる。

哲學を通俗に墮せしめずして、しかも平易に紹介することは著者の如き人にしてはじめて可能であると思はれる。始めて哲學を知らうとする人々に恰好の入門書として奨めたい。

尙、本書は臨時國語調査會の趣旨に従つて漢字を制限し發音通りの假名づかひをしてある。

(昭和八、六、二八 寶文館 四六判三〇〇頁 一・二〇)

武士道の復活

平 泉 澄 著

先に本會の推薦した「國史學の骨髓」と同様著者得意の壇場日本精神に關する論文集である。

内容は「武士道の復活」「橋本景岳」「橋本左内」「先生とその周囲」「ドイツの歴史教育」「月沈原の思出」「革命とバーグ」「神皇正統記の成立」「神皇正統記の内容」「サボナロラと日蓮」「皇室と國民道德」「維新の原理」の十一項より成つて居る。

著者は武士道を以て日本精神の精華となし、これによつて亞細亞の覺醒、日本の自覺の基調となすべきことを高調して居る。

橋本景岳は非常時局に處したる非常人物の典型として、これを拉し來り其の面目を傳へて第二の橋本景岳の出現を待望したものである。

ドイツの歴史教育は歐洲戰後のそれを叙述したものであるが此處に引用されたドイツ高等學校歴史教科書の章節は斐ヒテの「獨逸國民に告ぐ」の抄錄と共に非常時日本國民の再讀三讀すべきもの。

「神皇正統記」に於ては北畠親房の精忠を説くと共に大義名分の存する所を示し、「皇室と國民道德」に於てはルソーの民約論、孟子の所説の我國體に反する所以を説きて日本國民の向ふ所を示して居る。

バークはフランス革命の深刻なる害毒を指摘して英國民の向ふ所を示した眞の愛國者、サボナロラは十五世紀末伊太利の宗教界の腐敗を難じ身を以て救濟せんとし遂にローマ法王のために焚殺された愛國者にして且つ殉教者である。

著者はこれを説くに最も正確なる資料に基づいて居ることは言ふまでもないが、その愛國的情熱は書中到る所に現はれ讀者をして感奮興起せしむる所頗る大なるものがある。敢えて江湖に推す所以である。

(昭和八、一二、一五 至文堂 菊判三八七頁 二・八〇)

思想史 奈良朝國民の精神生活

清 原 貞 雄 著

我が國の文化が支那印度の所謂大陸文化を探り入れて發達したことは、更めて言ふまでもない所である。然し大陸文化の諸要素が如何なる形に於いて我が國民生活に採り入れられて來たかを明かにすることは、極めて興味ある問題であるにもかゝらず、困難な問題である。

本書は奈良朝時代を取扱つて、漢學及び佛教思想の影響の

國民思想の淵源

村岡典嗣著

本書は著者が日本思想の歴史的研究といふ立場から主として古事記の神代傳記を中心國民思想の淵源を學問的に述べたものである。緒言中にある如く特に學問的と言つた意味は斯ういふ問題には兎角宗教的その他いろいろの見方がある

(昭和八、一二、一五 至文堂 菊判三八七頁 二・八〇)

(昭和八、四、一二 青年教育普及會 四六判五八頁 一・三〇)

跡を辿り、これらに對抗しつゝ發展した固有思想が如何にしてこれらを受け入れ、獨特の文化を形成し得たかを明かにして、この問題に答へようとしたものと見ることができる。

先づ大化改新以後の思想的傾向の概観から始め、支那思想の影響が、思想、政治、儀式、日常生活の各方面に如何に現れたかを、文獻的に明かにし、佛教思想の影響を同じく諸種の事例に徴して述べ、當時の佛教思想をいはゆる奈良六宗の教義を通して説明し更にこれらを通じて、佛教が奈良朝時代に日本化された顛末、即ちそれが如何に現世化され、祈禱教化され、護國教化されたかを明かにしてゐる。而してこの護國教化の顯著な例として、國分寺建立、大佛鑄造の目的及び精神を特に一章を設けて論じてゐる。

次にかくの如く佛教、殊に佛教の影響の甚大なる時代にもかゝはらず、我が國固有の信仰、思想である神道が失はれず、存續し、神佛習合の如き特異なる現象を呈して、かへつて思想的に發達した事を述べ、これに應じて國民的自覺が著しくなり、國家統一の理想が明かになつたことを、奈良の京の經營、國史編纂等の事蹟を通して論述し、終りに主として萬葉集にあらはれた奈良朝時代の人間の感情生活を考察してゐる。

全篇七章、三百頁にも達せぬもので、奈良朝時代の思想的

生活を必ずしも十分に論述してあるとはいへず、一々の斷定に關しても、専門家にはそれ／＼異論のある點もあらうと思はれるが、特に困難なる奈良朝時代の思想上の動きを全般的に、多くの資料に依りつゝ、しかも比較的平明に纏めたものとして奨めたい。

(昭和八、五、一〇 中文館書店 葉判二七六頁 三・〇〇)

日本精神に關する一考案

紀 平 正 美 著

近來左傾思想の跋扈に對して思想善導の意味で眞の日本人たるもの自覺を促し日本精神の闡明に努めつゝある著者が、本書に於て最も端的に而して平易に日本精神の何たるかを説き明してゐる。即ち之は著者獨特の紀平哲學なる體系を提示するのではなく、一日本人たる著者が滿腔の誠意を以て日本精神の體驗觀を世に示したものと云へるであらう。

著者はこゝに日本は漸く西洋思想から離れて眞個の位置に覺醒し始めたことを説き、「それは日本の爲し遂げた一昨年來の業績を見れば、自ら判然するであらう。從つて單にこれを危険なりとして憂ふる必要はないけれども、猶ほ整理には

るために特に平易に說かれ日本人としての感動を與へる幾多の實例が含まれてゐる。本書は紀平博士が日本精神研究會で講演されたものを「吾等の感激を限られたる同志のみが私すべきでなく、廣く天下の心あるものに頌ちたい」といふ主旨によつて再述を乞うて上梓したもので、目下我國の思想界の動搖に鑑みてもまた思想善導に資せんとする意味からも社會教育上裨益するところが多いと考へ、江湖に薦むる所以である。

(昭和八、七、一六 章華社 葉判七三頁 六〇)

日本精神の闡明

池 岡 直 孝 著

近時内外の情勢に促されて復興して來た日本精神が如何なる意義のものであるかを明かにし、更に日本の國體日本の文化の價値を論述せるものが本書である。

明治維新以來七十年間に於ける日本の急速なる興隆は一面西洋文化の模倣によることが多大であるが、他面又其のため失ふ所も甚だ多い。物質的方面主として衣食住、交通、通信、醫術、衛生、工業、軍事等に於て、明治維新前と今日のそれを比較すれば隔世の感があるが、又失ふ可からざる我國精神

細心な注意が入る。下手をやれば再び危險な状態ともなり、余病の併發ともなる。故に今からそれをよく研究して、其の病に打ち勝つた本性即ち自己を省みて其の自然的な發育進歩を計らなくてはならぬのである。即ち日本精神なるものの眞髓をよく理解しなくてはならぬ。」と云つてゐる。

現代思想の最も切實なる問題として實例を共産黨にとり共産黨員となつた青年を轉向せしめた女性の例をあげて、日本精神の眞髓が家族制度の中に存することを述べ、母親に対する西洋流と日本流の觀念の相違を論じてゐる。もつとも卑近なる例を「私の體験せる母の印象」にとつて生れてから成長するまで赤裸々の母を知る日本人の幸福を具體的に述べて、

「女性への新鮮な印象が人間を作る」ものであるとする。

日本精神は定義を以て其れを定めるこの出來ないもので、抽象的概念で定めることは誤りになると考へ、それは抽象されたものではなく、三千年來仁義を重んじ、和平を愛する我が國が國民の心の中に宿つてゐるもので、藝術の上にも衆合的な表象をもつて現はされ、これを合同調和の精神とみる事が出來、西洋流の「とりやり」の態度と其の實行の中にそれをみると出るとしてその説明に努めてゐる。

本書は一般社會人に日本精神の如何なるものかを知らしめ

文化がやゝもすれば失はれんとして、所謂今日の思想困難を招來したのである。こゝに現れたのが日本精神復興の氣運である。殊に満洲國獨立を契機として國際聯盟の脱退となり愈々日本精神復興は促進せらるゝに至つた。著者は先づ日本精神復興の情勢よりと起して國體と日本精神、文化と日本精神、學問、道德、藝術、宗教、風習と其の關係、政治、經濟、教育と日本精神、最後に世界と日本精神の關係に説き及んでゐる。

日本精神は日本の國體を發揚し、日本の文化を創造する主體である。日本精神は日本人、日本國家にとつて唯一の魂であり生命である。本書は教育家、宗教家、政治家、軍人、實業家等あらゆる階級の人々が讀むで参考となる所少からざるものとしてこゝに推薦するものである。

(昭和八、五、一五 章華社 菊判 一六七頁 一・二〇)

論語私感

武者小路實篤著

(昭和八、一〇、五 岩波書店 四六判三四頁 一・三〇)

孔子の言行に人類の正しい生長への撓まざる努力を感じた著者が、論語から適當な言葉を選び出して、これに簡単な著者一流の解釋、感想を附したものである。

倫理學概論

長屋喜一著

從來の概論の多くが何々説の解説であるのに對し本書に於ける問題の取扱ひは多少其れと趣を異にして一面倫理學上の著名なる人々の説が忠實に祖述されて居ると同時に他面倫理學上の主要問題を殆んど論究しつくしてあります所がない。

人生を語る

下村虎六郎著

著者は本書に序して「本稿は中等程度の教養ある人々に、一通り系統立つた人生論を提供して、人生に關する考察の手がかりを與へ、且つそれ等の人々の實踐上の参考にも資したいと思つて、筆を執つたものであります」と述べて居る。著者の述べられて居るやうに人生の問題は複雑多端である。これを遺漏なく説述することは容易ではない。それ故に著者は人生に最も本質的、基礎的、永久的な問題たる生命論を中心として人生の理解に資せんとせられて居る。内容は「宇宙力を語る」、「自我を語る」、「人間感情を語る」、「生活態度を語る」の七項に分ち、これを七夜に亘り、青年と主人との對話に擬して述べられて居る。

この對話體の形式について著者は多少の危惧を生じて居ら

「自己流な處もあると思ふが自分では出来るだけ本當のことをかくつもだ。今迄讀んで受けなかつた論語、孔子の言葉のよさが、いく分でもわかつてもらへば嬉しい。」

「孔子は人類の意志に實にすなほな人だつたと考へられる。」

「孔子の言葉を聞くことは同時に人類の言葉、最も偉れた人間の言葉を聞くことで、教はつたり反省したりすることが多いと思ふ」といふやうな言葉が序に見えてゐる。

從つて本書は論語の字句、思想の解説をしようとしたものでなく、孔子の言行そのものを直接に著者自身に反省して、その思想を述べたもので、普通の道學者が孔子を我々の近づき難い聖人としてしまふのと異つて、孔子の偉まざる努力、ものを見る眼の深さ、時に應じて弟子を導く温さ、はげしさ、如何なる言の端にも含まれてゐる人を激励奮奮させる力などを如實に遺憾なく身近に感じさせる。論語に含まれてゐる眞理を現代人に味はせる手引を與へるものとして、適當なものと思ふ。

れる様であるが、内容的にぐんぐん押し進んで行く哲學講話や道徳論は兎角抽象的になり勝ちで思考になれない人々に取つては難解な感を懷かしめる場合が多いから、時に斯うした形式を取られることは本書の對象とする讀者に限つては適切である。

又斯うした題目は教訓的となり、叙述も極めてぎごちないものとなりがちであるが、本書はこの點についてもかなり成功して居ると思ふ。

各項の末尾には「摘要」欄があつて一篇の大綱を要約されて居る。故に讀者はこの「摘要」を推究することによつて著者の人生觀を知り、併せて各自の人生觀を樹立するも一法であり、本書の假定する青年となり主人の人生論を傾聽し人間的自覺を豊富にして行くことも一法である。何れにしても本書は眞面目に人生を觀、生活態度を真剣にして行かうとする人にとっては好伴侶となるを信じこれを推薦したいと思ふ。

因に著者は前臺北高等學校長、現大日本聯合青年團講習所長である。

(昭和八、九、一〇 泰文館 四六列二四五頁 一・〇〇)

メーリン著 「神ながらの道」に就いて

文學博士 井上哲次郎

今回、かの神道學者として有名な米人メーリン氏が「神ながらの道」といふ英文の著書を完成されたに就いては、それを文學士今岡信一良氏が日本語に翻譯され、富山房より出版されたのである。就いては一言自分の思想を述べて紹介の言葉としたのである。

メーリン氏は日本に來る前に「創造的自由」及び「創造的東洋」の二書を發行された。自分は此の書を通讀してメーリン氏の東洋觀及び神道觀を了解することが出來たのである。それからメーリン氏が昨年の春日本に來遊し、東京に來られた時は、真先に自分を訪問され、一見舊識の如く四時間も談話されたやうな次第である。それから以後一年七、八ヶ月の間親しく交際をして、氏の見解の在る所は自分は能く之を了解してゐると信じて居るのである。是れ迄外國人で神道を研究し、神道に關する著書を發行した人はさう多勢も無いけれども、然しさう少くもない。先づラフカディオ・ハーンを筆頭とし、其の他英國のアストンだとか、サトーだとかいふ人

人は孰れも相當に神道を研究した人々である。チャンバレーも亦其一人である。佛蘭西ではレオン・ドロニーのミセルルボンだのマタンだのといふ人々が神道を研究し、伊太利ではカルロ・ブイニードのマリヤーノだのといふ人々が神道を研究し、米人ではホルトムなどが最も能く古典に就いて神道を研究したものである。獨逸ではフローレンツだの、ランゲだのレュールハムマーだの、シルレルだの何れも神道に関する著書を發行して居る。然しながら何うも哲學的方面から神道を研究した人は是れ迄無かつたのであるが、メーリン氏はベルグソンの崇拜者で、主としてベルグソンの哲學を基礎根柢として神道を説き出して來たのである。而して純粹精神を以て根本原理として神道の何たるかを論述し、神道の解釋上獨特の見解を發表したところに多大の興味がある次第である。而して日本文化を説くのに、精神主義、審美主義、實用主義の三者を能く調和したものとして説明を試みたのは氏に偏し、歐米は實用主義に偏し、いづれも其の一方に偏してゐるのに、日本は能く此の三者を調和して創造的發展を爲しつゝあると見たのはなかなか氏の巧妙なところである。

それから又、氏は崇神天皇の宗教史上に於ける偉大なる地位を占めて在らせられることを力説して居る。是れも亦一種

の見解で、優に識者の一顧を價するに足るものである。氏はラフカディオ・ハーンと同様に日本の文獻を涉獵することは出來ない。日本語を話すことも出來ない。然しながら、なかなか才氣の有る人で、餘程よく日本人の人情を理解し、ハーンと同じやうな到底普通外人の及ばざるやうな微妙精緻なる、日本に對する認識を有して居る人である。ハーンは神道を哲學的に説いたのではないけれども、メーリン氏は哲學的原理を基礎として精神的方面から神道を説いたところに、其の特色が多大にある次第である。世には宗教學の立場から神道を見て、外國の宗教學者の學説に當て嵌めようとするやうな人も無いことはない。さういふ見方もあつて宜しいけれども、何分それは客觀的の見方で、神道の内容精神に觸れないことが多い。神道は矢張り一種の精神であるから、精神的方面から神道そのものを捕捉して説き出さねばならぬ。斯ういふ點に於いてはメーリン氏は確かに一隻眼を具有してゐると云つてよろしい。自分は必ずしもメーリン氏の説に悉く同意してゐるわけではないけれども、然し共鳴する點も少くない。兎に角日本人として神道の研究を怠つて居る者が大數であるところにメーリン氏のやうな外人にして熱心に神道を研究し、自ら神道の信念を以て立つてゐることは實に珍らしい場合である。今回氏の新著「神ながらの道」が世に送

り出されたに當つて自分の氏に關する感想の一端を述べて之れを紹介の言葉とする次第である。

(昭和八、一二、一八 富山房 四六判三七三頁 一・八〇)

友松圓 諸著

現代人の佛教概論

—そのタツチと力點の新味—

宇野圓空

最近一方には西歐思想の飽和とゆきつまりから東洋的な觀念的傾向が種々の形で注意されて來たのと、他方最近の民族主義的乃至啓蒙期から脱せんとするやゝ復古的な我が國の思想風潮から、當然なことであるが、佛教の再吟味再検討といふことが屢々識者達によつて提唱されて來た。

が從來の佛教研究に對しては一般的教養者は一寸手がつかない。

經の文句に佛の悟りの内容を難解難入、不可説とあるが、異つた意味で、佛教の經論註釋がまたまことに難解難入で、素手で打つかつては到底理解し得ない程に深遠迂遠になつてゐる。しかも從來の佛教書といへば専門研究から紹介書に

いたるまで、主としてこの難解な教理教相を中心とした理論注疏が中心となつて來た。八宗綱要をはじめとして印度哲學、佛教學といった調子である。

第一に佛教二千五百年の歴史に織り出された佛教の眞髓の姿はこのやうな思想的なもののみであらうか。むしろこれ等はそれ／＼の社會的時代的環境がありはせぬであらうか。

否、更にいひ得るならばそれ等の環境からこそそれ／＼の教理教相が形成せられたのではなからうか。

第二に専門學には相應の専門術語が必要ではあらうが、佛教の如きはテンからキリまで専門的で、或はむしろ密語的で、言葉なり意味なり構想なり、現代人一般にとつては恐らく外國語の思想書をこなすよりも餘計な努力を必要とする。この佛教の諸構想を現代人の味得、タツチに容易にびつたりするやうに叙述するといふことは出來まい。

これ等のことは恐らく佛教に對して思慕と好奇をよせる一般人の切實な期待、要求であつたに違ひない。

その兩者の爲に友松教授の「現代人の佛教概論」が上梓されたのである。

とくに著者は第一の態度に研究の力點をおき從來の佛教研究に一つのエボックを劃さうとする。無論その態度は外國の

佛教概論

江部鶴村著

本書は著者が、信徒としての立場を離れ、「全佛教は個々の分派の綜括的組織化においてのみ把握されるべきものである」との見地から、「思想の一種」としての佛教を、自余の思想一般との密接な關聯において、思想一般の共通要素たる世界觀と實踐觀の兩方面から見直さうとしたものである。

序論に佛教研究上の注意及び佛教の分化發展の大體を述べ、本論に佛教の本質的な解脱、因縁、禪、念佛等の理論的、實踐的諸問題を、或ひはマルクシズムと對せしめ、或ひはヘーゲル等の辯證法の理論と對照し、或ひは平等と差別、必然と自由、自利と利他等の問題を通じて明かにし、結論として「佛教思想の組織的把握」をなして全體を纏めてゐる。

そのタツチと研究上の力點の新味に於て、一般者研究者を括めて現代人へのよき佛教概論である。

(昭和八、一一、八 第一書房 著者二四五頁 一・八〇)

想を現代に生かすことに心を用ひ、現代人の意識に沿ふやうに、解説しようと努めてゐるのは得がたい努力と言へるであらう。佛教に對するいはゞ素人としての一般人に、佛教入門書として怡好の書である。

(昭和八、五、二〇 大雄閣 四六判三五二頁 一・五〇)

禪に生くる

宮島蓬州著

著者はかつて左翼文學の作家として知られてゐた人であつたが、數年前、左翼運動から絶縁し、禪門に身を投じた。最近、左翼運動を主義とする者の多くが轉向して、自己のとり來れる道の誤れることを告白してゐるが、著者の如きはかかる時期到来以前早くも左翼運動が人を救はず、況や自己を救ふことなきを悟り禪門に甦生の道を求めたものである。本書は著者が社會運動から退き、家を捨てゝ、まづ京都郊外嵯峨の毘沙門堂の堂守として生活し、天龍寺に參禪すること五ヶ月、遂に出家得度して一雲水として天龍寺に入つてより、修業専の一の僧堂生活一ヶ年を描いたものである。文筆を業とした人であり、その行文もとより流麗にして、よく僧堂生活の微細を書きつくして残すことろない。

氏が左翼運動より轉向せる心境變化の顛末は本書に於ては所々に簡単に述べられたるを綜合するより外、知ることが出来ない。又本書は必ずしも禪とは何物かといふことを傳へんとして書かれたものでもない。著者は本書に於て禪僧の簡易質朴にして清純なる生活、その不退轉の修業をなほ修業中の自己の經過を以て書き傳へたにすぎない。又我々は本書から禪を學ぶ必要もない。又必ずしも禪僧の難行苦行とも云ふべきその生活を學ぶ必要もない。しかし我々は本書によつて人間がいかに簡素なる生活、忍耐強き生活を營み得るかを知ることが出来る。この一事は決して輕々に讀み捨てる可きことではない。我々の時代は物質萬能の時代として凡て心ある人々の嫌惡的となつてゐる。大多數の人々は物質生活に窮迫してゐる。渺くとも窮迫に近き生活をしてゐる。而してかかる生活は人間の心に濃き暗影をかもし出さずにおかぬ。世を擧げて人間の心は不安動搖してゐる。しかも我々は本書により我々が必ずしも物質的に窮乏してゐることを知ることが出来る。何故なら我々は粥を啜り、うどんを以て極上の味とする如き生活をしてはゐない。又禪僧が接心、臘八に於て試めさるゝ如き難行を經驗してはゐない。我々の生活は未だく浮薄であると云ふことが出来る。我々の不安動搖は一脈の贅澤心に發してゐると一應云つておきたい。我々はまづ他を屬する

前に自己の生活をがつしりとしめ直す必要を感じる。本書は味ふべき數々の良さを藏してゐる。

(昭和八、二、二〇 大雄閣 四六判三四四頁 一・三〇)

改訂讃美歌物語

マクネヤ著
別所梅之助著

我が國の讃美歌は明治三十六年に初めて編纂出版されたもので、その編纂委員には組合教會・日本基督教會・メソヂスト教會・浸禮教會・基督教會等我國の主なる教派を代表する人々が擧げられた。本書の著者マクネヤ、別所兩氏は共にこの委員の一人であつた。其の後マクネヤ氏は、云はゞ讃美歌の解説とともになる可き讃美歌に關する種々の物語や挿話を見集め研究して、讃美歌作者並に作歌の事情を世の人々に示さんとせられたが、不幸之が出版の運びに至らずして、氏は三十二年間の我國に於ける長い傳導生活を芝の自邸に終へられたのである。然しこの志は別所梅之助に依つて繼がれ、故人の遺稿の整理、文章の添削校正等、すべての仕上げが同氏の手によつてなされたのが舊版の讃美歌物語で大正五年の暮であつた。この讃美歌物語は作詞者の信仰生活を中心につ

讃美歌作詞の動機或は之に纏はる物語や挿話をつゞり、こと作曲家に迄及んでゐるものもある。即ち我々が何心なく口ずさんでゐる讃美歌につき、種々信仰上の解説を與ふるもので、一層深い敬虔の心と、信仰の糧とがこの解説によつて我々の心に植えつけられるのである。その後昭和六年に讃美歌の大改訂が行はれ、あるものは省かれ、あるものは新に加へられて改訂讃美歌が世に行はるゝに至つたのであるが、之に附隨して讃美歌物語の方にも全卷にわたる改訂が加へられ、この勞は主として喜多村進氏によつてなされた。本書は即ちそれで巻末に百五十餘の讃美歌小史(別所梅之助著)が合綴されている。

この種の圖書は我國に於ては殆ど類書を見ず、然も讃美歌は相當一般化されて居る現在にかんがみ、本書の相當苦心の作であることを思ふて世に之を推す次第である。

(昭和八、七、三〇 警醒社 讃美歌物語 四六判四〇八頁 讃美歌小史 一四九頁 二・二〇)

第二 歴史・傳記・地誌・紀行

現代の世界史

時野谷 常三郎 著

本書は序文によれば著者が大阪及び京都に於いて、「史眼に映する現代歐洲」、「現代歐洲の史的考察」の題下に講演したものに、増補訂正を加へて發行したものである。従つて取扱はれた範囲は主として歐洲に限られており、「政治思想を中心として一般政治史の概観を敍述しよう」といふ著者の意圖から見て現代歐洲政治史ともいふべきものである。著者は現代の政治理想及び歴史的事實を民族主義、民主主義、世界主義の三傾向に分けて、敍述してゐる。

第一章「民族主義と世界主義」に於いて互に對立するこれら兩主義及びその間に介在する種々の傾向の特質を説明してゐるが、特に著者の所謂「現代の指導的政治思想たる民族主義」を定義して次のやうに言つてゐる。

「凡そ民族主義なるものは要するに過去の傳説、現在の利益、將來の希望之を共有する同一民族を以て同一國家を作らんとする一

種の民族的精神の傾向であつて、他民族に對し自らを峻別せんとする主義が即ち是である。」

第二章「民族主義と世界大戰」第三章「世界大戰後に於ける民族主義」のうち、前章は世界大戰に導いた總ゲルマン主義と總スラブ主義との對立衝突の事情を述べ、後章は、大戰後の諸小國の民族運動をはじめ、ファシスト、ナチスの運動等を取扱つてゐる。

第四章「大戰後に於ける民主思想の推移」に新興諸小國の社會政策、イスパニアの革命、ロシヤ革命を取扱つてゐる。何れも歴史的事實の叙述である。第五章「國際協調主義の發展」には世界平和思想、國際協調主義の發達を述べ、國際聯盟の事に及んでゐる。

全體として見て幾分事實の羅列の觀がないでもないが、複雑な現代史に對し、國民としての常識を養ふ上に一讀すべきものと思ふ。

（昭和八、九、二〇 共立社 菊判二八七頁 二〇〇）

國史學入門

藤崎俊茂著

史學の方法に關する著作は必ずしも珍くはない。本書の著者も引用されて居る様に坪井博士の史學研究法、大類博士の史學概論、野々村氏の史學概論、國史の方では黒板博士の國史の研究總説、古文書學では伊木氏、久米博士のもの等がある。

然しながらこれ等は純粹に専門の立場から論述されて居るので必ずしも読み易く解し易いとは言へない。

本書は高等學校を終へて國史科に進まんとする人々及び國史の研究に志す一般人の爲めに極めて平明親切に研究の方法、態度の一般を敍述したものである。

本書は短篇二十有三章に分説されて居るが、最も多くの頁を費されて居る處は第三章の古文書學一斑と第四章の史料の批判とである。理論より實際を重んずる著者は古文書學の「書風の研究」の項では古文書に屢々出で来る國字、異字、常用草字、難假名（片假名、平假名）、合字の表をあげ、「基礎學科は何が大切か」の章では二百餘の史語を表示し、又「是非讀むべき本」を指示されて居る。

「實驗研究の仕方」では研究題目を選んでから深くそれを掘りさげて行く方法を具體的の例をあげて説明されて居るし、「國史家と旅行」では分りきつたことの様であるが、携帶品から訪問に就いての心得を極めて親切に述べられて居る。

「國史教授と學校參觀」「國史と教授法」は著者の實際經驗から國史教授者の態度、批評者の心すべき點を述べられて居り、小學校中等學校等の國史の教授者の参考となると信する。

この外博物館、國史研究室、史料編纂所の利用方法、利用者に對する注意等懇切を極めて居る。

近時郷土教育の盛行と相待つて郷土誌の研究は隨所に據頭し地方史の編纂は頗る大規模に行はれて居る。然もその内容に至つては單なる舊記傳説の羅列に終るものがないではない。

本書はその性質上史學の方法を徹底的に論述したものではないが、國史の研究者、郷土誌の編纂者に對して極めて實際的多面的な有益な示唆を與へるものであると思ふ。

因に著者は東京高等學校教授で、十有餘年國史の教授に専念されてゐる篤學の士である。

（昭和八、七、二三 金星堂 四六判二四四頁 一五〇）

趣味の史話

名越 那珂次郎 著

(昭和八、九、一五 積文館 菊判三四八頁 三・二〇)

本書は國史を中心に、歴史上興味ある人物とその事蹟、及びその他の史蹟を拾ひ出し、逸話を交へて叙し、或ひは軽く論評を加へたものを集めてゐる。著者は京城帝國大學豫科教授で、特に朝鮮の史蹟、我が國と朝鮮の關係を説き、また朝鮮の史料によつて國史の事實を明にしてゐる所もあつて、これらの點が異色を成るものといふことができる。

人物では徳川三代及び八代將軍、松平信綱、板倉重矩、上杉鷹山、荷田蒼生子、本居宣長、水戸光圀、蓮月尼、小西行長、西郷南州等の興味ある一面を取扱ひ、その間に櫻、藤、牛、馬、虎に關する話、及び鐵砲傳來にまつはる若狹女の哀話などを收め、また二三簡単な考證的のものもある。

特に朝鮮に關するものでは、「朝鮮に傳はれる徳川光圀の貴重史料」「徳川光圀と朝鮮信使」「新羅王陵の考察」「南漢山城の築城と傳說」「日本切支丹に殉教せる朝鮮の人々」などがあり、朝鮮の役に就いては、碧蹄館役の史蹟をやゝ詳しく説くと共に、幸州山城に於ける日本軍敗戦の史蹟を紹介してゐる。その他紀行文が二つ收めてある。

全篇三十三章、何れも短かく、題材も比較的通俗向きのものが選ばれてゐる。しかも多くの據り所となる文献を引用し、適當に考證を加へ、史實に違はないやうに努めてゐる。歴史の讀物として一般に薦めたいものと思ふ。

少年國史物語

前田晃 著

「國史は國の鏡である。そこには建國以來の事蹟が悉く映し載せられてゐる。諸君はそこで、わが大日本帝國が三千年の大昔から経て來たものゝ事蹟を見るであらう。諸君の先祖がいかに國の爲に勞苦して働いて、今日の隆昌を持ち來したかを見るであらう。」

著者は序文の中に斯う云つて世の少年少女に國史の必要とその面白味を説いてゐる。又一方著者は從來行はれる小學校児童程度の國史課外讀物は、あまりに興味本位に過ぐるものや、又あまりに學習本位に過ぎるものが多いと云つて之を斥け、國史の中に盛られた重要な事件や思想に關する知識を、十分に咀嚼して我ものとなし得るやうな方法、即ち國史による日本精神の植えつけを本書に於て試みようとしてゐる。

今月迄の既刊は「神代・大和・奈良・平安時代」、「平安時代後期・鎌倉時代」の二冊であるが、「鎌倉時代後期・吉野時代」、「室町・安土・桃山時代」、「江戸時代」、「東京時代」等と續刊されることになつてゐる。叙述は平易で面白く、興味と知識を並べ備ふるものである。美しい挿繪と寫眞も相當兒童の興味に合ふものと思はれる。又兒童圖書に珍らしく、卷末には索引が附せられてゐる。

(神代・大和・奈良・平安時代 昭和八、四、二〇 平安時代後期・鎌倉時代 昭和八、九、二〇 早大出版部 各二・五〇)

滿洲國歴史

矢野仁一著

右の中、一及二を以て著者は本書の序論とし、三を以て本論とし、四、五及六を以て餘論としてゐる。

著者の本書に於て意圖する所は、歐米人は固より我國人間にも往々滿洲が支那の一部であつたと信ずる者があつて、例へば滿洲に對する認識極めて不足なりツトン報告に對する我が外務省の反駁の如きに於てすら、此の點に關しては矛盾且不徹底なる個所あるを歎じて、明確に滿洲の由來、支那とは別個に存在した事實を史實に依つて世の識者に知らせんとしてゐるものである。リットン報告に關する批判、支那の歴史家傅斯年の「古代之東北」及李濟君の「歴史上の滿洲(英文)」の二著に現れた滿洲觀に對しての反駁等は序論とされてゐる一及二の論文によく叙述られてゐる。主なる部分は勿論第三の「滿洲國史梗概」約百八十頁で戰國時代より清朝末迄である。餘論としての三つの論文は、嘗ての講演及雑誌に掲載されたものである。

- 一、滿洲を以て支那の一部なりとする國際聯盟の觀點と外務省の意見書
- 二、滿洲は支那の完全な一部分であるといふ支那の學者の主張を駁す
- 三、滿洲國史梗概
- 四、滿洲國の建國とその使命
- 五、滿洲事變の核心を論ず
- 六、日支兩國は滿洲國の獨立を協力扶翼すべし

拔群の人々

都倉瓊川著

從來よく見られる立志傳は多く所謂功成名遂げて社會的名聲或は莫大の富を獲ち得た人を扱ふことが多かつた。かゝる種類のものも人を感奮興起させる點で決して悪いものではないが、現代の如く複雑多岐な機構を有する社會に於て、空拳よく一代の聲名、巨富を致す程の物語は何人にも可成り繆遠いものであり、單なるお話にすぎない感がある。殊に時代は萬人を支配する英雄を望むより前に、境遇に善處し、信念と努力を以て邁進する人間に親しみを感じる。我々の目標は一身の榮達を圖る程のものであつてはならぬ。良き社會を、萬人の爲に良き社會を作ることであります。その社會の良き市民となることでなければならぬ。本書は十二人の衆に卓越した人の傳記を集めめたものである。しかも十二人の中には大銀行の重役もあり、大製造業者も扱はれてゐるが、一貫してその信念と努力に於て衆の龜鑑となり得る人々であり、その獲ち得たる地位も多く招かずして到つたものである。就中「一身を農業の發展に捧ぐる農村の父」の山崎延吉氏、「生きながら神に祀られた人」の松本源祐氏は全身これ社會に捧げ盡し

たものであつて何人の心をも縛うたすにはをかない。
山崎延吉氏は勵揚農大を卒業した一農學校の校長にすぎないが、農村自治の先覺者として、あらゆる社會的榮達を顧みず終始農民の味方として奮闘し、至誠は遂に天下に轟いて農村の父と仰がれ、畏くも御前講演に召されるに至つた。又松本源祐氏は石川縣能美郡尾口村尾添に於て生きながら神と祀られてゐる人である。氏が能美郡長たりし時疲弊困憊せる尾口村を更生せしめたによるものであるが、この一村に限らず、氏が郡長として歴任せる各地に於て郡民いづれも眞情溢るゝ敬慕の念を擣げてゐる。氏が人民の幸福の爲に盡した努力の結果である。しかも氏は小學校四年修了に過ぎず獨學して巡查となり、郡書記となり、郡長となつたものであり、經歷としては平凡な出世物語であるが、氏が人民の爲に傾倒せる親切心こそ、何人も學びとらねばならぬところであらう。

時代の要求する眞の偉人とはかかる自己を忘却して社會の爲に努力する人でなくてはならない。

(昭和八、八、一五 實業之日本社 四六判二八四頁 一・二〇)

無駄のないがつちりしたものに仕上げてをり、一般向の美事なアダム・スミス傳としてある。

(昭和七、一一・一九 改造社 四六判二八四頁・五〇)

アダム・スミス傳

小泉信三著

アダム・スミスが「國富論」によつて經濟學を創設し、近代自由主義の開祖と仰がれて來たことは、あまねく知れ亘つてゐるところである。資本主義の諸問題の端緒はすべてスミスによつて示され、彼の名は資本主義の發達と共にひろく、かつ大きくなつて來た。

本書は主としてアダム・スミス傳の「最高最大の作品」であるジョン・レエの「アダム・スミス傳」によつて著はされた偉人傳全集の一編である。スミスの傳記は他の傳記とちがひ、その生涯が極めて平穀無事であつたがためにいはゆる傳記的興味はない。それゆゑおのづから著作による思想の傳記といふやうなものになるのである。本書も、スミスの二大著作「道德情操論」と「國富論」とに最も多くの頁を費し、極めて要領よく正確を期して叙述してゐる。「國富論」が當時「興味ある本」としてひらく一般に讀まれたといふことなどはわれくに耳新しいことであり、日本現代の學界から見て考へさせられることである。

篤學な學者であつて文筆の暢達な著者の筆は流石に本書を

野口英世

奥村鶴吉編

野口英世とは現在の我々には一つの偉人化された名前になつてゐる。名譽あるロツクフエラー研究所員として、次々に新研究を發表して世界の學界を驚かし、黃熱病の研究に危險を冒して不幸同病に斃れ、世界の學者にその逝去を惜まれた博士の、優れた科學的點腦、不撓の獻身的な研鑽によつてなされた世界人類に對する貢獻は、たしかに我が國が世界に誇り得る最も大なるものの一つである。この偉大な科學者の全貌を知ることは、博士の事業を繼ぐべき我が國氏にとつて、決して意味の少ないことではないであらう。

本書の、從來刊行されてゐる野口英世傳に對して有つ特色は「博士の生涯を事實ありの儘に描寫したもの」といふところにある。先づ博士の生家の事情を、その祖先の時代から説き起し、博士を生んだ母堂の、經濟的にも、家庭的にも恵まれない境遇にありながらよく困難に耐へて、遂に後年の博士

を育て上げるに至つた人となりを、やゝ詳しく紹介して、以下博士の奮闘努力の生涯を、極貧の生家に於ける幼少の時代から、醫學界の王座を占めて遂にアフリカ出張中逝去するまで、忌憚なく示してくれる。

その負け嫌ひな性質、如何なる困苦にも耐へる強固な意志、何事も徹底しなければ止まぬ性情をもつて、逆境にありながら勉學を廢せず、青春時代邪路を踏んだ危機をも克服して、遂にその學才を大成させるに至つた、苦闘の人生記録が生き生きと描寫されてゐる。

しかも野口博士に於て弱點と見えるものも、實は博士の生一本の性情の然らしめたところであるといふことができる。博士はまことに天真流露の人であつた。親を思ひ、師を思ふ情の厚いこと、妻に對する思ひやり、友情に對する感激、はては祖國を思ふ情熱等は、本書に收められた書簡友人の話等を通じて、我々に傳へられる。

尙本書によつて知られることは、博士の天才を育成するに、母の愛、師の庇護が如何に大きかつたかといふことである。天才を養成することは必ずしも容易ではない。本書は人材の養成といふ點からも少からざる示唆を與へるものと言へるであらう。

編者のはしがきに「野口博士の傳記編纂を企てゝから、既

に四箇年を過ぎ」たとあり、また「根據の疑はしいと思はれた材料は、之を取り入れ」なかつたとある。野口英世傳としては現在最も完全なものであらう。のみならず、文章も面白く人物傳としても價値あるものである。

(昭和八、七、五 岩波書店 四六判六五七頁 一・八〇)

機械 ワット 正傳 の父 ワット正傳

伊サミュール・スマイルス著
河上壽雄譯

ワットが少年時代に湯沸しの蓋が湯氣の爲に動くのを見た、蒸氣機械發明の端緒を得た、と云ふのがワット傳に對する我々の常識で、この逸話は餘りにも有名で小學兒童にも行きわたつた話であるが、未だそれ以上に詳しい邦語のワット傳の單行されたことを聞かない。本書はこの當然あるべくしてなかつた、天才發明家の傳記の邦譯で、面白い事には原著者が「自助論」で有名なスマイルスであることである。著者は正確な資料の下に、ワットと湯沸しの蓋の逸話を否定し、彼が生れつきの大天才ではなく、刻苦精勤の結果の大發明を生み出したもので、大天才は人一倍苦しんでこそ生れ出づるものであると云ふ鐵則を、本書に依つて世に知らしめんとする。

内容は章を十に分ち、第一章ではワットの家柄とその少青年時代を、第二章ではワット以前の蒸氣機關の研究を概観してゐる。一般にはワットを目して蒸氣機關發明の鼻祖の如く云はれてゐるが、蒸氣機關の起りとしては既にバパン、セーヴァリー等の先輩が苦心して來てゐるのである。第三章では所謂「ワットの蒸氣機關」の發明に關して述べられ、第四、五、六、七章は企業家ボウルトンと合同して蒸氣機關製造に從事したエンジニアーワットの惡戰苦闘の様が述べられてゐる。

譯者の序によれば、原著はこの倍位の内容を有つものらしいが、この譯書では餘り詳細にわたる事、餘りくどいと思はるゝ事は適當に取捨安排したと断つてある。機械の説明に多少専門語が用ひられてゐるが、一貫して面白く讀まれ、自助奮闘の精神がよく現はれてゐる。特に青年諸君に薦め度い。

(昭和八、一〇、一五日本海事學會出版部 四六判二七三頁 一・五〇)

菅沼達太郎著
スキード・ツーア

河上壽雄

山友菅沼君の著スキード・ツーアを拜見する機會を得た。年年急激に發達する我國スキード界の現狀から見て、もう何時までも所謂練習場に止まつてクリスチニアがどうのステンボーゲンがどうだとスキードのテクニック計りにとらはれてゐる時ではない。スキード本來の目的である冬山又は小さな峠越しへと所謂スキード・ツーアやスキード登山が非常な勢で盛んになつて行く。この意味でこの著はスキード・ツーアに最もよき指針であり親切な案内書である。從來スキードの技術に關する著書は其數既に二十種に及んでゐるが、これら案内や、紀行を主とするものは甚だ稀である。非常に時機を得た出版であると思ふ。

その内容に至つてはしかも豊富で、廣汎な範圍に及び、餘り氣のつかぬ様な處まで掲げられてゐる。これはスキード・ツーアの實際の記録であり、紀行である。しかも親切にその要點にふれて、その間に著者の數々の山の思出が取り入れられてゐる。之を見ても著者は如何に多くのスキード・ツーアをさ

れて居るかに驚かされる。氏は東京のスキーヤーとしては可なり古く、私の知つたのは大正九年頃であつたから東京のスキーヤーが餘り發達しない時代からこの道へ精進してゐた。それ以前から山岳に就ては深い趣味を持つてゐた、その長い間の山やスキーの生活の實踐記録が生んだ賜物であつて見れば内容の豊富なのは當然である。先に「山岳服装近代色」等と云ふ面白い觀察からの著書があり、「東京近郊の山と溪」等を著してゐる。

スキー・ツアーや著に望むところは少し寫真を多く取り入れて貰ひたかつたこと、カットの略圖では物足らない。これに多くのコース圖が入つたら、その記述が一層ハッキリ分ることであらう。これから行つて見ようとする人々にとつてはどうしても地圖は重大なものであると思ふ。

(昭和八、一一、二 大村書店 四六判二一四頁 一〇〇)

山ごふるさこ

河田 楠 著

樹々のみどりも愈々濃くなつて、山の誘惑も亦一入といふ時期になつた。昨年「山に憩ふ」を著して、そのしみじみとやさしい山の紀行に讀者の魂を奪つた著者が今又第四番目

近畿景観

第四篇 紀伊・伊賀

北尾 鎌之助 著

「近畿景観の編著にとりかゝつてからすでに六年、漸くその第四篇を終つて前途尚遠」

右衛門と共に如何にも、軽快な筆致を以つて描き出されて居る。

尙挿入の寫真三十葉は例によつて著者の自作になるもので何れもよくその景観の描寫を反映して居る。

(昭和八、一一、一〇 創元社 四六判四六四頁 二〇〇)

印度の眞相

高岡 大輔 著

印度は我が國從來の文化を支配して來た佛教の發祥地といふ單に歴史的な意味で、重要なのではない。近頃所謂日印會商によつて印度の我が國に對する重要さもやゝ認められたやうであるが、印度の眞の重要さは、西歐強國の植民政策とその植民地に於ける民族獨立運動との衝突の激化といふ世界史的な意味にある。東洋人としての我が國民はかういふ點から見て、もつと印度の認識を深める必要があると思ふ。

印度は三億餘の人口を有し、然もそれが多數の種族に分かれ、又その間に多種の宗教が行はれ、その上に英國の巧妙な植民政策に災ひされて極めて複雑な國情にある。本書は著者が滿四ヶ年の印度滞在中各地を旅行して得た見聞を基礎として、各方面から複雑なその國情を紹介しようとしたものであ

とは著者卷頭の序中の一節である。本書の編述は著者のライフワークでないまでも其の重要な部分であることは「私の近畿に於ける旅の追憶記録は前途二十數年に亘つて居る」との記述から察せられる。

本篇には近畿地方中最も僻邊の地が取扱はれて居る。所謂名所舊蹟も紀伊・伊賀は最も少い部分であらうか。

伊賀は關西線と參宮電鐵の開通によつて次第に京阪人士の注意を牽き得る可能性があるが、紀州路はその點前途尚ほ遼遠である。然し交通機關の完備によつて高野山は已に昔日の幽邃さを失はんとしつゝあるかに聞く。九里峠、源峠、那智瀧の奇勝を昔ながらに味はんとするものは今の時機が最も適當であるかも知れぬ。南系は山岳重疊、海岸は一帯にリアス式で大和盆地や大阪平野に見る如き寛闊さはないが山と海との醸出す男性的な景觀は他の追随を許さぬものがある。殊に川湯、勝浦、白濱、龍神の諸温泉、南部の梅林、潮岬等は近畿の湘南及び伊豆半島として遠からず新らしき展開を示すであらう。著者の景觀の記述は過去の紀伊伊賀の結論であり、近き將來に於ける兩地の序曲でもある。伊賀盆地には俳聖芭蕉及び兼好が徒然草の後半を認めたと傳へられる草稿等の遺跡があり、齊藤拙堂の「月瀧紀勝」によつて天下に名を得た月ヶ瀧の梅溪がある。これ等の名勝舊蹟は伊賀越仇討の荒木又

る。

先づ「印度の現勢」に英國治下に於ける印度の民族運動を、ガンジーの活躍を中心として説明し、併せて日印會商の経過を述べ、「位置と地勢」「氣候風土」「人種問題」等を簡単に説明して、「宗教と葬儀」「印度の奇習」に印度に行はれる種々の奇異なる宗教儀式その他の風俗をやや詳しく紹介し、更に釋迦の一生、モガル王朝の歴史、東印度會社の發達のことなどをも語り、終りに「旅行の用意」「旅行日誌」がある。

題目によつては幾分難駁の感のあるものもあるが、印度の特異な事情、特殊の風俗習慣の、實見に基いた紹介として、興味もあり得る所が少くない。一讀を奨めたい。

(昭和八、一〇、一〇 丸善株式會社 四六判四三三頁 二・〇〇)

歐洲の憶ひ出

本位田 祥男 著

一度は西洋にも行つて彼地の風物にも接して見度いと願ふのは強ち西洋崇拜の輩ばかりでもあるまいが、しかし實際にその機會に恵まれる者はほんの少數の者に止まるであらう、そこでわれくの様に行き度くても行けないでゐる者にとつてはせめて他人の書いた紀行文や見聞記を讀ませて貰ふこと

は許された一つの楽しみだといつてよい。
西洋のことを書いた旅行記の類は必ずしも少くはないであらうが所謂紀行文の爲めの紀行文や見聞記の爲めの見聞記といふものは兎角文章に捉はれたり著者自身の個人的な興味に重點を置かないで一般讀者を目的に書かれたりすることが多い爲であらう、却つて印象記としては力が弱くてわれくを惹付けるものは存外少ない。

ところが本書は著者自身が最も書き度く且楽しみながら書いたといつてゐるだけに印象が生きくと出てゐて讀者にも強い感興を與へないでは置かない。

著者本位田教授は東京帝大で經濟史を擔當し殊に消費組合に關して多くの興味を有つて居られる。そしてその前後二回の歐洲の旅もそれくそその専門的研究調査の爲めであつたがしかも著者は出来るだけそれを一の旅として樂しまれたのであり、本書も學者としてゞなしに一人の旅人としての歐洲印象記なのである。

本書の叙述は先づロシアの部から初まつてフランスの部英國の部スキスの部ドイツの部イタリーの部と進んで行く。屢々經濟史や消費組合などに關して著者の専門的な興味の動くのは當然であるが、その場合でも勉めて廣く人文的な立場から眺めてゐるので讀者の肩を凝らせる事はない。此の著者

はまた藝術に對しても相當深い理解を有つらしく各國の建築物などに對する批評は傾聴に價する。總じてその觀察は流石に學者らしい正確さと銳さとを示してゐるが一面その叙述には可なり想像的なロマンティシズムもあつて婦人の讀者にさへも充分アツビールし得る軟らかさをも備へてゐる。

(昭和八、五、二四 日本評論社 四六判三八七頁 二・〇〇)

游歐雑記（獨逸之卷）

阿部 次郎 著

これは著者が今から十年前戰後の獨逸に遊んだ時の滯獨記録で、既に雑誌改造に連載されたものである。内容は普通一般の歐羅巴紀行とは事かはり、主として彼地に於ける著者の身邊雜記である。それだけに、著者の學識と人格の醸し出す雰圍氣は、讀む人の心の高ければ高い程、汲み取つて盡きせぬさゝやきを、本書の中に見出さしめるのである。最初の「柏林の夏」は著者が初めて獨逸に着いて暮した伯林の一ヶ月間の記録で次の「山腹の家」「或老夫婦の話」「誕生日の客」「老友の死」「亡きあと」「旅立を前に」は何れもハイデルベルグ半歳の旅のやどりとした一家族との親しい交り、「二度目の獨

逸」は南歐から歸つて再び獨逸に入りミュンヘンで暮した記録である。この間にミュンヘンでの、故リップス教授遣族及その高弟モーリツツ・ガイガー教授との會見、ハイデルベルクに於けるエミール・ルウドキヒとの交り、ワイマールのニイチエの妹フエルスター・ニイチエ訪問記等が織りなされ誠に興味深く讀ましめる。

右の様に、内容は萬人向のものと云ひ難いが、この著者に親しみを有する人々には甚だ美しく、見遁せない讀物の一つである。

(昭和八、二、一四 改造社 小型判五二九頁 一・九〇)

南米繪の旅

矢野 千代 二 著

著者はバステル畫家として著名であるが、獨立獨行、繪を賣つて二十年來の海外生活を送つて來た人で、本書中に於ても、狭い日本で、醜い商賣敵の黨派運動の不愉快な生活をするより畫家として海外へ發展するがよい、但し自分は酒、煙草を用ひず、汽車汽船もすべて三等で、生活程度は労働者以下であるが、變つたところや珍らしいものを見て好きな畫をかいて居れば結構と思つてゐると述べてゐるのは軒昂たる

氏の心意氣をみせたものである。

本書は「南米繪の旅」と題してあるが、ブラジルの移民事情を主として書いたものであつて、スケッチが豊富に收められてはゐる外は、繪に就ては餘り多く書いてない。又序文の中にも、「移民渡航船はどんなものか、海賑、商船その他の移民事業の仕事ぶりは、向ふの國との關係は、移民の素質は、衛生状態は、行先地の選び方は」等に就き、岡目八目と云ふ意味で、多少参考にもならうといふ譯で書いたと述べてゐる如くである。二年間ブラジルに滞在し、充分觀察が拂はれており、又藝術家らしい、歯に衣させぬ物の云ひ方はよく移民事情を詳細に紹介してゐる。ブラジル移民に關心する人は勿論、同胞發展地たるブラジルの真相につき一般讀者の一讀をお勧めしたい。

内容は「ブラジル繪行脚」「コーヒーの香を嗅ぐ」「アマゾンの大自然を往く」の三部よりなつてゐる。第一部に於ては氏のブラジルに於ける畫家としての生活が少し書かれてゐるが、同時にサンボーロ、リオ等に於ける在留日本人の精神生活に觸れ、一般にその水準の低くして、人物の妙いことを述べ、又在留日本人を毒する不良日本人悪徳日本字新聞を槍玉にあげてある。「日本人の能率」といふ一項があるが、よく働きよく遊ぶ伊太利移民と比較し、日本人が一日も早く金を貯めて

二六

歸りたい一心で餘り一生懸命になり、一方競争心強く、同郷人でも融和せず、ために心の休まる暇がなく、自然陰氣になり、能率があがらぬことを述べてゐるのは日本人共通の弱點であらう。その點では沖繩縣人が共同心強く要領がよいとのことである。

第二部は移民の事情を詳細に書いたもので、移民の過去現在、耕地、移民の文化、職業、生活等に就き手による如く述べられてゐる。本書中の巻であり、最も見るべきものであらう。
第三部は南米移民はサンボーロ州コーヒー耕地とアマゾン開拓の二種類ある譯であるが、サンボーロに於ける日伯新聞社長三浦なる人が大阪朝日に發表した「大アマゾン記」なるものが、アマゾンが移民に不適當なる由を發表し爲にアマゾンの開發が十年後れたと云はるゝが、この記事は我田引水のためにしたものであることを述べ、同地方の移民情況を詳細に述べてゐる。
(昭和八、七、二〇 實業之日本社 四六判三一九頁 一・五〇)

第三 政治・法制・經濟・教育・社會・軍事

馬場恒吾著

公民自治の機構であるところの議會制度は今世界至る所で不信認を叫ばれてゐる。

苟しくも政治問題に關心を有つ程の者は誰しも議會政治と政黨政治は何所へ行くかの問題に就て考へさせられない譯には行かない。

本書は議會政治論と題してゐるけれども理論めいたところは極く僅かであつて、主として事實的説明である。殊に政界に活躍する人物の評論を中心として議會政治發展の有様を説くところは正に本著者得意の壇上といふべきである。

惟ふに眞の政治の動きは政治理念の自からなる發展であつて假令その人々が如何に天才的で偉大な人物であるにもせよ限られた少數の個人的な政治家や社會運動家の策動によつて左右され得べきものではない筈である。政界人の策

動によつて或程度まで動かされる政界の動きの如きはそれ故に極めて表面的なものであり寧ろ皮相的なものに過ぎないと云はなくてはなるまい。

併しながらそれにも拘われが今日この社會に公民として生活する限り、われわれの生活はかかる政界の動きと全く没交渉なるを得ないのである。

またこの様な生活に對する直接的な關係は別問題としても一國の政界を自己の言行によつて指導する様な偉大な政治家の評傳を讀むことは確かに誰にとつても興味深いものに相違ない。

本書の著者は議會政治に同情しつゝ先づ議會政治の存在價值より筆を起して、西郷其他の維新の功臣の業績より松岡洋右論等に至るまで日本の政界を動かす人々の評論と共に議會政治の推移を敍し議會主義者の心境を述べて筆を擱いてゐる。

政治常識の養成に役立ち興味深く讀める政治家傳として一讀に價するものと思ふ。

(昭和八、三 中央公論社 四六判四四六頁 一・五〇)

二七

日本政治動向論

蠟山政道著

本誌前號に於て日本政界の表面的な動きを示すものとして馬場恒吉氏の「議會政治論」を紹介したのであつたが茲には更にその奥底を流れる政治理念の發展を示すものとして蠟山教授の「日本政治動向論」を推し度いと思ふ。本書は教授が過去十年間に於て發表せられた五十六箇の政治評論を集録したものであるがこれ等の諸論文を貫いてそこに日本政治の動向が明かに指示されてゐる。

著者は日本の今後の政治、經濟及び社會の諸問題を解くべき鍵をデモクラシー思想の發展の中に求め、この思想の過去十年間に於ける我國土での經驗と運命とに多大の意義を認め、こゝに集められた諸論文に於てもこの思想の發展を中心として各方面より政治學並に政治思想上の諸問題が考察せらるてゐる。いふまでもなくデモクラシーそのものは本來外來思想なのであるけれどもその精神は天地の公道に基づくもので我明治開國の指導原理もまたこれであつたのである。爾來議會制度が確立されたのも、普通選舉が施行される様になつたのもこ

の思想の發展の具體化に他ならない。

然るに今やそのデモクラシーの思想が重大危機に瀕してゐる。これは確に一面この思想の内在的な缺陷に基くところもある。あらうが他面その實踐に於て日本國土の特殊性並に時代の發展への適應が充分に考慮せられなかつたことにも因るのであつて、この點に就てデモクラシー自身の反省乃至はそれの批判的研究が今後益々必要なだと考へられるのである。著者は夙にこのことに想到し殊にデモクラシーの運命は現實的には議會政治の成績如何に懸るところが大きいとの見地からこの思想を批判し且その今日の行詰りを警戒し豫告してゐるのである。

本書は前述の如く多くの政治學上の問題に關する獨立の論文を集めたものであるから箇々の問題に就き折にふれてあちらこちらと拾ひ読みをしてもなかなか面白いし、またこれを一氣に通讀すればこれ等の諸論文を一貫してそこに自から日本政治の動きが看取されるのであつて本書が「日本政治動向論」と名乗つた所以もこゝにある。本書の縱讀横讀を政治思想及び政治問題に關心を有つ人々薦める。

(昭和八、二、九 高陽書院 菊判五五四頁 三・八〇)

日滿關係の研究

蠟山政道著

滿洲問題に對し多大なる關心を有する著者が「前後三回の渡瀨によつて得た印象を經とし、太平洋會議に於いて支那代表及び諸外國人との論議の經驗や學業の餘暇に讀書し思索して得た構想を緯として」日滿關係を凡ゆる觀點から解剖し、それが一種の特殊關係を構成するに至つた因由を述べ、滿洲問題の解決には日滿關係の本質を理解し世界の平和に寄與すべきであることを述べんとしたものである。

内容は—日滿地理歷史關係—日滿政治關係—日滿經濟關係—文化關係—日滿關係の國際的地位—滿洲事變と日滿關係—滿洲國の成立に関する考察—日滿關係の新動向とその將來
八章よりなつてゐる。

第一章に於ては「支那に國境なし」「滿洲は支那の領土にあらず」といふ我國政治學者の所見を批評し、次に日支の外交的關係及び最近に於ける兩國關係の硬化せる所以を繋述して居る。

第二章では日本の滿洲に於ける特殊權益及びその運用に關係して關東州租借地、滿鐵附屬地の性質を詳細に検討して居

る。

第三章は本書の中心で、「滿洲は日本の生命線である」とのスローガンを克明に分析し滿鐵の事業、内地產業と滿洲產業との關係の闡明に力めて居る。

第四章は滿洲の文化史、日滿文化の將來を論じ、第五章には日滿關係が他の國際關係とその性質を異にする事を論述して居る。讀者は是によつて列國殊に國際聯盟加入國が今回

の日支事變に際してとつた態度を知悉することが出來よう。

第六章は今回の滿洲事變の直接の動因を究明し、第七章では滿洲國の成立、承認に伴ふ日本の態度、今後の努力について述べ、第八章ではアジア・モンロー主義と日滿經濟プロツクを檢討して居る。

著者は日本の國際聯盟脫退に反対するものであり、隨所にその所見を發表して居るからこの點については輿論に反し國策と相容れないものがある。然しながら滿洲國の成立によつて過去の滿洲問題が解消したかの如く速断するものがあり、又主張的な國論が冷靜なる日滿關係の考察を阻止する虞のある現在に於て著者が毅然としてその所信を披瀝し、日滿關係を全般的に解剖し闡明されたことを我等は多とするものである。

我等はこの書によつて兩國の關係を十分に理解し、極東の

平和のために善處しなければならないと思ふ。

(昭和八、二、二〇 斯文書院 菊判三三三頁 二・八〇)

改恩給法精解 附舊法 令解説

上原秋三著

法律の内には親族法や刑法のやうに倫理的性格が強く、從つて常識にも比較的の理解され易いものと、商法や訴訟法のやうに技術的性格が著しくて、概して常識とは縁の遠いものとの二通りがある。

恩給法の如きもこの後の例に属するもので、これが解釋には特別の知識と経験とを要するのである。

本書の著者上原秋三氏は内閣恩給局審査課長であり同時に關係官廳たる貯金局事務官を兼ねて現に恩給事務の實際に與つてをり、且這般の恩給法改正にも親しく參割して其の間の事情にも精通せる人であるから、恩給法の解説者としては盡し最適任者といはなくてはなるまい。

一體法律知識は何等かの意味で實際問題の處理に役立つことが豫定されなくてはならぬと思はれるが、殊に恩給法のやうな技術的な法律に關する知識はこれを實際問題と切り離し

三〇

て考へることは意味をなさないであらう。本書が單なる改正恩給法の理論的解説を事としないで常に實際に重きを置き、各條項の説明にも「例説」の項下に豊富な例を擧げて具體的にこれを説き、或は判例を示して實際問題の解決に資し、また恩給法施行前の履歴を有する者の恩給關係處理に現在適用されつゝある所謂「從前の規定」をも併せ説き其他の關係法規をも可及的廣く抄錄して概説し、卷末には恩給關係の手續、書式等を示して飽くまでも實際問題に役立たんことを庶幾してゐるのは誠に當を得た態度といふべく、著者その人を得たことゝ相俟つて恩給關係者を裨益する所少くはあるまい。

(昭和八、一二、三〇 岩波書店 菊判八九三頁 五・〇〇)

經濟の變革

太田正孝著

「經濟封鎖の心配からアメリカ金融の動亂への、しづ心なき日のみ續いてゆく。恐慌は、自信をもつて鎮めるより外ない。しかも形勢の較や良くなつた位で康を貪るものは必ずや次の事ある日に頽く。著者は、國際視野に立つて醒め出された我が國を直視し國民に向つて、何を恐れ、何を恐るべからざるかを説く。」

に立つとの結論に達してゐるのである。

本書は日本の前途に對して洋々たる希望を展くものであつて、その點、別項「非常時日本の財政と經濟」における稍々悲觀的な調調に對して面白い對照をなしてゐる。讀者は、齊しく時局を憂ひ、日本の將來のために萬斛の熱情を吐露する兩者述を併せ讀むことによつて、世界經濟並に日本經濟の實相を容易に看取ることが出來、國民は今や日本永遠の發展のために遠大な計を立て、經濟の革新に努力すべき覺悟を迫られるのである。時局柄好個の讀物として一讀を奨めたい。

(昭和八、四 太陽社 四六判二七八頁 一・三〇)

非常時日本の財政及經濟

津村秀松著

非常時日本の實體は何であるか。それにはまづその財政經濟の實情を明かにしてみなければならぬ。その實情を見て、これではならない、これをどうにか展開して行かなければならないと發奮するところに、非常時日本の打開策は立つのである。

本書は、著者がさきに新聞紙上に發表した論説であり、日本現在の財政經濟の狀態を憂慮し、その難局を打開するため

右が本書序文の全文である。著者の達筆な記者的筆をもつて一氣に書いた風な、まことに勇しい、好機を捉へた時論であつて、誰しも一讀しておいてよい通俗的快著である。

主題は、世界經濟の混亂の渦中にあつて、日本は現にいかなる状態にあるか。その實力はどうであるか。國際聯盟脫退によつていかなる脅威を受けんとしてゐるか。世界の情勢より見て、その脅威は起り得るか。日本の將來はいかに進み得るか、日本經濟の可能力は果していかなるものであるか。新しき國滿洲はどうであるか。日滿の關係はいかに進展すべきであるか。日本が未曾有の難事に際會して、これを切り抜け進みゆくべき前途はいかなるものであるか等のことである。

この主題については誰しも知らんと欲するところである。

本書は敏捷にその形勢を察し巧な記者的手腕をもつて、縱横の才智を披瀝し、それゝの題目について國際的に觀察眼を働かし、過去及び現在の事實を示し、要所に數字を交へて、實際的にきばきと議論を開いてゆく。

本書の解答は明快であり、經濟封鎖は事實不可能であるが故に、何等恐るゝに足らない、日本經濟の實力は幾多自給自足し得るものがある。滿洲國の將來の開發、それとの提携經濟によつて、日本は優に自立し得る可能あり、要は經濟の統制に俟つべきであつて、それは一に國民の覺悟と自信の上

三一

の具體策を述べた大膽な論説であつて、その平明闊達な説き方はよくその現状を理解せしめ、こゝに根本的な國策の樹立によつてこの非常時を切開かねばならぬとの覺悟を國民に迫つてゐる。

第一章は「非常時財政の根本的建直し」であり、第二章は

「國際收局の大きな渦紋を描く」といふ標題のものである。

第三章は「聯盟脱退後の日本はどうなる乎」といふ題目で國民經濟全般に亘る根本的建直しを論じたものである。第一章の政策を論ずるところ最も具體的であり、こゝでは著者の建直し私案をあげて力説してゐる。著者の唱へる具體案はまた別個の問題であるが、財政の改善は根本的のものであつて、一時の彌縫策を許さないものであることは明かに看取される。第二章は極めて平明簡潔に、しかもかなり生々と國際政局を開闢して見せたものであつて、これによつて讀者は大戦後の世界が三つ巴になつて争ひ悩んでゐる情勢を感知することができるのである。第三章の聯盟脱退後の經濟壓迫については相當の覺悟を要することを力説し、經濟封鎖不可能であると高をくゝる態度を戒めてゐる。國民經濟の根本的建直しについては、第一章のやうに具體策を述べてゐない。抽象論に終つてゐるが、著者の憂國の熱情は經濟のみならず、政治、教育、文化の各方面に亘る缺陷を指摘して、その根本的改善

を要求し、論據を資本主義の統制においてこの難局を救ふべき大人物を待望してゐるのである。本書を時局柄好時論としてひろく一般の人々に推奨したい。

(昭和八、五 寶文館 四六判二〇四頁 一〇〇)

新女性經濟講話

沖 中 恒 幸 著

「女性が自らの獨立と價値とを社會に向つて主張するからには先づ社會を理解し社會の正しい進化に向つて協力するだけの力と熱とを持たねばならぬ。」
「以上の様な意味から特に新時代の女性によつて讀まる可く本書を書いた」

といふのが、本書執筆の意圖であり、從來の「お臺所經濟」を説く「女性經濟知識」の類とは、全く趣を異にしてゐる。所以である。

本書は經濟を社會的に理解せしめることに主力を注いだものである。それ故、消費經濟に關しても、社會經濟全體の一面として理解せしめることに努め、斷片的な實用知識を避けている。

第一講から第七講までを前編として、資本主義經濟機構の

全體に亘つて説明することから、「物價」「金融資本金」「金」

「インフレーション」等現在の重要な問題に關聯し我々の生活に大きな影響を及ぼす問題について、一般的ではあるが、

かなり具體的に説明し、第八講から第十三講までを後編として、消費經濟に關する説明を試みてゐる。その説き方も、「奢侈」「寄附」「消費組合」「貯蓄」「婦人職業問題」等の特殊な問題をとりあげ、消費經濟の分野を具體的に、社會的見地から説いてゐるのである。

著者の見解は社會科學的背景を有して進歩的であるが、矯激に走るやうなことはない。動的全體的に、社會經濟を婦人に理解せしめようとする態度は、現代の婦人にとって有意義なことである。それだけにまた、消費經濟に關する一般的知識を缺く恨みもあるのであるが、問題の一班を示すものとして、この試みは是認せられるし、それだけでも充分有益であるとおもふ。なほ本書は講話體で書かれており、読み易く解り易い。

(昭和八、五、一〇 森山書店 四六判二九八頁 一・五〇)

マルクス死後五十年

小 泉 信 三 著

本書は、カアル・マルクスの死後五十年に相當する本年の

三四兩月にわたつて、雑誌「改造」に寄稿した「マルクス死後五十年」と題する論文に加筆したものと、「更に其論旨を補ふべき他の數篇の文とを收めて編成したものである。」

卷頭の「マルクス死後五十年」は、「マルクシズムの全面に涉つて平生所見の大體を述べ」たものであつて、本書全體の四分の一ぐらゐをしめ卷末の四分の一ぐらゐは、「ソギエト計畫經濟」に關する論文であり、その他「唯物史觀と共產主義的歸結」、「價值論上の効用説と費用説」、「擰取理論の根據」、「過剰の労働者と過剰の商品」といふやうな特定の題目によつてマルクシズムを論評した諸論文が收められてゐる。「マルクス死後五十年」といふ論文は、通俗の理解を目的とした著者のマルクシズム觀の全般を述べたものであつて、

「一方マルクシズムに含まるゝ眞實の價値あるものを尊重すると共に他面に於て多分の獨斷、誇張またテマゴギイの其に含まれることを認め、此兩者をば共に忌憚なく指摘し、吟味したい」といふ著者の態度を、明瞭に、しかも平易にしめす便利かつ有益な論文である。

「社會主義社會の實現が必然であるならば、何の必要があつて此の必然の結果の爲めに努力しなければならぬか」
「共產主義の實現せられた其後の人間社會の唯物辯證法的發展といふものは果して如何にして行はれるか」

といふやうな疑問は、古くしてしかも一般的な疑問であるが、本書の著者も主力をそれに注いでゐる。この點われわれ一般人の胸に明確な答を與へてくれるもので、他の多くの通俗的批判書が概説的な皮相の説明にをはり、われわれの胸に觸れるところの少いものとはちがつてゐる。

「ソギエト計畫經濟」と題する論文は、その歴史的發展過程、現在の成績など全般にわたつて解説し、論評を試みたものであつて、まことに時代の興味と必要に訴へる好論である。はじめに「市場經濟と計畫經濟」との根本原理を説きあかし、をはりに五個年計畫の成績について、その長所短所を検討して、計畫經濟に対する著者の見解を明かにしてゐる。

手に入るかぎりの材料によつて、實證的に論述したものであり、一般讀者にとつても解りやすい、有益なものである。

その他の論文もすべてマルクシズムの重要な問題に關するものであり、著者の明快な筆は、通俗的効果をあげてをりマルクシズムの正當な理解を助けてゐる。

(昭和八、七、七 改造社 菊判三〇七頁 二・八〇)

日本 教育的心理學

檜崎淺太郎著

眞の日本國民は眞の家庭教育と眞の學校教育と眞の社會教育の三つの力を俟つて初めて造られるといふ見地より、日本の教育事業を総括して、眞の國民的教育、人間の教育、人格の養成に向つて、心理學者として著者の見解を通俗的に披露せらるものである。

從來の教育的心理學の多くはその課題の解決に當つて一般的な心理學的研究の結果から教育に關係ある知識を與へるにとどまつたのであるが、本書の著者は「余の日本教育的心理學」を樹立するに當り、その範圍をひろめ、これまで閉却された教育的環境の研究に新らしい領域を開拓し「教育的心理學はそれ自身の内に心理學的教育學の理念を藏して」ゐなければならぬとし、「多くの教育的心理學の從來試みたるが如くに、その出發點を心理學に求めずして、教育及び教育學に發足し、實際の教育と教育學とに教育的心理學の問題を求めてこれを心理學的に探明せんとする」ものであるとし、常に日本教育の理想に基づいて誘導することを力説してゐる。

然らば日本の教育の理想とは何かといふに、著者によれば

求め、小學校自體及び各教師の持すべき根本精神を究明し、學校經營法と學級經營法を社會生活並びに社會教育と照應せしめ、現代小學校教育改造の根本原理を説いて、各教科の教授目的と教授法に及んでゐる。

本書が健全なる國民の教養達成のために日本教育の目的觀をかくも明らかにし、その方法を充分に精密に討究したことは特色最も鮮やかなものであつて、斐イヒテが獨逸國民救濟のために「獨逸國民に告ぐ」を書きたる如く本書も亦非常時の日本に投ぜられたる人間愛、祖國愛、國民愛を力説せる熱意の書であるといふことが出来る。また二百枚にのぼる挿繪圖表の類も廣汎なる材料によつて集められ、得るところ大である。

(昭和八、四、一八 藤井書店 菊判六六〇頁 五・五〇)

教育行政撮要

下村壽一著

今日の教育の行づまりを打開する爲めに考へなくてはならない重要問題は甚だ多い。教育の精神に就いて世の父兄乃至は社會一般の理解を高めることも大いに必要であらう。教育者側の自覺を促すことも無論大切なことに違ひない。また教授

祖先傳來の至情と精神とを若き青年子女に覺醒し、我が國體の眞義を體得せしめ、忠君愛國の熱情を喚起して、天壤無窮の皇運を扶翼し、全國民の福祉を増進せしむることを以て、我が國教育の大眼目とし、教育勅語の聖旨に則るものである。而してこのためには、教育的心理學は自覺した人間の意識、人間性を明らかにし、更に未だ自覺に達せざる被教育者としての幼兒、兒童、青年の性情を明らかにし、教育によつて自然の人間が眞の自覺的人間に至るまでの發達の真相をつきとめる事にありとする。この自覺せる人間性に基づいて人間の使命を定め更に之に基づいて國家の使命を確立し、この人間の使命や國家の使命を實現せしむることを教育の目的としてその具體的方法を決定する。即ち眞の教育的心理學は、自然の人間から眞の人間即ち自律的人格を造り上ぐる方法を暗示するが如き知識を示すことである。

此處に於て人間精神の發達の段階として、胎兒、哺乳兒、幼兒、兒童の發達とその教育に關して心理學的考察を詳述しゐる。胎兒に於ける母の養護、哺乳兒の特色と教育法、満一二歳兒に對する家庭教育の重要性、満三、四、五歳兒の心的特徵と家庭及び幼稚園教育、兒童に對する小學校教育等、理論と實際とに亘つて詳しく述べられてゐる。更に偏智教育に陥ち入つてゐる小學校教育を難じ、該教育の基本的方法を

方法の改善なども充分考慮しなくてはならぬ問題であらう。がそれにもまして今日最も急務とされるのは教育制度そのものゝ改造である。

文化が高まり社会生活の態様が極度に複雑化するに及んで一般に生活上の形式がその内容に對して著しく重要性を増して來たことは否まれない。教育に於てもその理想とする教育の内容はそれに適合する様な教育制度の内に於てのみ實現が望まれ得る。それ故に教育改善の問題はその制度改造を他にして考へることは今日では殆んど意味をなさないのである。そこで教育制度の改造を考へる爲には先づ以て現在の制度を知らなくてはならないのであるが今日の教育制度は極めて複雑多岐でこれを悉く知ることはなか／＼容易なことではない。

我國の教育制度に關しても從來二三の著書が無いでは無かつたが何れも既に相當の年月を経てゐる爲めに今日の問題に對する参考書としては遺憾の點が多かつた。然るに今度下村氏によつて新たに教育行政摘要の一冊を得たことは此の方面に關心を有つものにとつて大なる便宜が與へられた譯である。

著者は多年中央並びに地方に於ける教育行政の實地に携

り、また嘗て澤柳博士等の一行に加はつて具さに歐米各國の

教育制度を観察したこともあるつて内外教育制度に精通し教育制度の改善に就いても一隻眼を具へた人である。そして本書は著者が東京文理科大學及び法政大學で講述した教育行政の骨子を摘録したもので簡潔平明の叙述を以てよく廣汎多岐な我國教育制度の大要を盡し併せて歐米教育制度の一斑をも示してゐる。尙卷末には附錄として興味の深い各國學校系統概表及び全國學事統計概覽を添へてある。

教育行政の實務に携はる人は固より廣く今日の教育改造問題に關心を有つ人々に是非一讀を薦め度い。

(昭和八、四、二五 岩波書店 四六判一八七頁 一・二〇)

個性調査と職業指導の原理

田中寛一著

著者は本書に於て職業指導をもつて一つの教育法の改善乃至生活指導とみて、從來の諸種の新らしい教育主義や方法の多くの主張を包摶して一層よく教育の目標を實現し得るものとしてこれを強調するのである。而して、職業指導を適切に行ふ爲の要件は種々あるが、その中でも兒童生徒の個人的特徴を明かにしておくことが最も重要であるとし、最初に「個性調査法」を説いてゐる。

著者は本書に於て職業指導をもつて一つの教育法の改善乃至生活指導とみて、從來の諸種の新らしい教育主義や方法の多くの主張を包摶して一層よく教育の目標を實現し得るものとしてこれを強調するのである。而して、職業指導を適切に行ふ爲の要件は種々あるが、その中でも兒童生徒の個人的特徴を明かにしておくことが最も重要であるとし、最初に「個性調査法」を説いてゐる。

子供の遊ばせ方

坂内ミツ著

著者は本書に於て職業指導をもつて一つの教育法の改善乃至生活指導とみて、從來の諸種の新らしい教育主義や方法の多くの主張を包摶して一層よく教育の目標を實現し得るものとしてこれを強調するのである。而して、職業指導を適切に行ふ爲の要件は種々あるが、その中でも兒童生徒の個人的特徴を明かにしておくことが最も重要であるとし、最初に「個性調査法」を説いてゐる。

我々の精神生活は或る中心的なものがあつてそれに率ゐられて茲に一つの組織が出來てゐるものであるから、個性研究は分析的分量的に行はるべきことを述べ、この場合全人格といふ様に全體の精神構造或ひは性質についてみると同時に個々の性能についての調査或ひは測定の必要が著しくなるとして、著者は此の意味に於ける個性調査の方法を説いてゐる。即ち寫眞による品評、面會による品評、日常の觀察による評定とその改善法を示し、更にその他の各種の評定法を紹介し、續いて検査として知能検査、情意検査、學力検査、身體検査の四つに分つて常に全體性を失はない個性の調査を志向し、その方法を如何にすれば科學的に取扱ひ得るか、職業指導の目的に合致するかを説き、テストの総合的圖示を表示して研究者に便にしてゐる。

一般に職業指導の根本假定として、その必要とする精神性能の程度の方面から各職業を調べて各自の性能に相應した方面の職業を選定するやうに平生兒童を指導しておくことの肝要を説き、その他詳しく述べ、該指導の發達とその意義を述べ、職業調査と職業指導の具體的方法を説明してゐる。

本書は昭和四年末に大阪府教育會の依頼に應じて試みた講演の筆記に手を入れたものださうであるが、叙述も口語體で

近時兒童研究はかなりの進歩を示し、其の取扱方の法も大いに工夫されて居るが、未だその成果は多く校門を出でない。都市の路次、田舎の軒端に遊ぶ子供の遊戯を觀察するがよい。彼等の遊びは依然として大なる進歩を見せない。遊びの指導の代りに悪い遊びの禁止のみが考へられ與へられた玩具の有効な利用の代りに始末と保存とが父兄の關心事ではないだらうか。

無論現代の世相は終日子供と遊ぶことを不可能ならしめた

ある。しかしながら遊びが子供の生活の全部であり、子供の日常生活を無視してその生涯を考へることが出来ないとなれば遊びの指導は看却さるべきではない。この意味に於て我々は子供の日常生活に最も密接なる關係を有せらるゝ母たる人々の注意を喚起したい。

著者は多年幼稚園の保母として児童の遊びの指導に渾身の努力を傾け、又母として子女の遊びに多大の注意を拂つて居る實際家である。

團體遊戯、個人遊戯、室内遊戯、室外遊戯、児童の年齢、個性に應じ、創造的精神を培ひ、常に興味を以つて迎ふる遊戯の工夫は並大抵ではない。本書はこれ等の遊戯の方法と材料を簡明に記述したものである。

而して著者は「遊ばせ方」に對する秘訣は單なる方法や材料の提供にあるのではなくして「誠意を以て遊んでやることが必要である」と述べられて居るが、この態度は大いに味ふべき點であると思ふ。

本書は單なる遊戯の方法論を説述したものではなくて著者の尊い體験の記錄で價值も亦その點に存すると信する。

(昭和八、七、一再版 吉岡書房 四六判二一三頁 一・五〇)

吉村千鶴子著

女子公 民 讀 本

文學博士 下 田 次 郎

我が國女子の教育は小學校に於ては男子同様普及せるのみ

が上手に取扱はない、生徒に興味を以て迎へられることがむづかしいやうである。

この時に當つて現はれたのが、吉村千鶴子氏の著『女子公民讀本』である。吉村女史は東京女高師初期の出身であつて、初め母校に教鞭を執り、後女子學習院に轉じて多年そこに勤められ、女子の教育には知識経験共に豊富な方である。さきに『婦人と政治』を公にして、從來最も缺けて居た政治的自覺を婦人に養ふことに盡くされ、徳富蘇峰氏の推奨を受け、相當大きな影響を與へられたことである。この書は女史が數年前歐米を視察せられ、彼國婦人の教養や生活の實際を見られ、特に公民及國民として女子の自覺や活動振りに大なる刺戟を受けて、歸朝されてから、最初の土産であつたが、この度またこの『女子公民讀本』を公にせられたのである。

今その目次を見ると、一、女性は目ざめる。二、私達の國を考へつゝ。三、よき政治とは。四、代議制度と女性。五、女性はみづからを知れ。六、經濟知識のあらまし。七、世界の日本に活ける。の九章に分ち、政治及び經濟の方面に於て、女子に必要な知識を授くるは勿論、道徳的國民及び文化的國民としての自覺を女子に與へることを期して居られる。而してその特に喜ぶべきは、皇室を國家の中心とし國民の生活及び活動の基礎を我が國體及び歴史に置き、しかも固陋に陥ら

ならず、中等教育に於ても、高等女學校の數は九百餘校で中學校の數よりも多く、男子と同じ程に廣く行はれて居る。しかし女子の仕事は家庭にありとせられて居た爲に、その中等教育も殆ど家庭の事に限られて、國家社會の生活に於ける女子の任務といふやうな事には、關心することが少なかつた。従つて女子の權利義務といふ觀念も甚だ薄弱で、女子自ら主張すべきことを主張せず、務むべきことを務めず、その點は殆ど封建時代の女子と異なる所がなかつた。

然るに西洋では女子の公民權も參政權も認められ、公民として又國民としての自覺も女子がもち、これを事實に致して居るのであつて、この方面は何といつても我が國の女子は後れて居ることである。

それで我が國でも昨年の四月から高等女學校にも公民科が課せられて、公民としての心得、知識が授けられることになつたのは、洵に結構なことである。

その公民科の要目を見、又教科書を讀むと、今日まで女子がかやうな事を知らないでよくも過ごせたものだと思ふことである。つまり女子はこれだけの知識もなく、ほんやりと生活して來たことになるのである。ところで、一般に教科書は、その性質上窮屈なところがあり、又形式に陥り易いものであるが、特に公民科のものは、理屈が多くて、肩が凝り、教師

す、急激に走らす、世界の文化を國家發展に採り入れることを怠らず、世界に於ける大日本といふ抱負の實現を期すべく、女子を啓發指導して居られることである。

かやうな事は、女學校の公民教科書に於ては、全部を期待し難いことであるから、女子のこの書は教科書の補充として次ぎ足しとして併せ讀まれたならば、公民科の教授を一層有効ならしめることが出来るであらう。又學校内外に於て、廣く婦人に讀まれたならばその知識の普及、又婦人の此の方面的進展に役立つことが多いであらう。

從來の女子は、政治的、國際的方面には迂遠で、殆ど沒交渉の有様であった。これは女子に公民權の如き與へらるべきものが與へられず、従つてこの方面に感興も起らず、他所の實の話を聽くの感なきにしもあらずであったが、今日はその準備時代としてもこれだけの修養は必要である。

我が國の女子は一體に意見を發表せず、著書の如きも少く、少數のものはあつても、多くは文學か家事に限られたものであつて、政治經濟等の方面に於ては、絶無に近い。その狀態にある我が婦人界から、吉村女史が前には『政治と婦人』今又この書を公にせられたことは、洵に喜ぶべきことで、本書の最後の文句たる「黎明に棹して、開かれた女性の海」へ進航する船頭歌とも見らるべきものであり婦人の人意を強うす

る點に於ても洪水の如き出版物の中に稀有な、特殊の價值あるものとして、推薦すべきものである。

(昭和八、一、一五 光宏書院 菊判三五八頁 四號活字 二・三〇)

青年團の經營（農村の部）

熊谷辰治郎著

近時青年團の統制的活動は都鄙を通じて頗る見るべきものあり、邦家の爲め誠に慶賀に堪へない所である。然しながら疲弊せる農漁村の青年團には萎微振はざるものがあり指導的地位にある町村吏員小學校職員宗教家等は各其の本務多忙のために、これが指導に専念することの困難なことは容易に想像される。

青年團の經營は團員各自の創造的精神を基調とすべきは論を待たないが、指導的地位に立つ人々の理解なくしては健全なる發展を企圖することは不可能であらう。

本書は斯うした實情に鑑み現在大日本聯合青年團の編輯部長たる著者が、多年の蘊蓄を傾けて、懇切に經營の具體的方法、精神を公開されたものである。

内容は必ずしも體系的ではないが先づ「青年團指導の要諦」とその組織」の項に於ては我國青年團の特質を述べ、次に「指

導者とその五つの資格」「幹部としての十の覺悟」をあげて本書の對象とする讀者の注意を喚起するに努めて居る。

次に「青年團の振興をかく計畫した」と云ふ項では未發達の青年團に對して活動の端緒を與へた講習會の實際を述べて青年團振興の方策を暗示して居る。

「團則の制定と運用について」「青年團教範の制定に關する諸問題」「何を標準として青年團の成績を決定すべきか」「青年團の產業的進出」(中略)「青年團經營上の諸問題」の諸項目は何れも經營上の具體的問題の解決であつて關係者を裨益するところ極めて大なるものがあると信ずる。

青年團員は明日の國家を双肩に荷るべき人々である。殊に農村更生は生氣澁渾たる團員の奮起に待たなければならぬ。祖國の興隆を希求する士は本書によつてその動向を理解し郷土に即した方策を樹立しその嚮ふ所を知らしめなくてはならない。

(昭和八、七、一八 日本青年館 四六判三一五頁・五〇)

も理想主義的なものであつて、一般に流布する誤解のごとく單なる反動主義ではなく、ひとつの積極的根據をもつものであることを明かにしようと努めてゐる。最後に「國民社會主義」と「ファシズム」との異同を辯じ、幾多の類似點をあげて、結局ドイツ國民を土臺としたファシズムであることを説いてゐる。

今やファシズムの勢は滔々として世を風靡せんとしてゐる。この現象は一時の反動とのみ見るべきものではあるまい。その據つて起るところには、何等か國民性と歴史とに結びつくものがあるであらう。この際に我々は本書のやうな着實な研究書によつて、ドイツにおけるナチスの據つて立つ基礎を探究してみたなら得るところも多いであらう。

(昭和八、四、一〇 日本評論社 四六判三一〇頁 一・二〇)

ナチス
長守善著

本書は、現に世界の耳目を聾動せしめてゐるドイツにおけるヒットラーの率ゐる「國民社會黨」即ちナチスの運動、思想、政策の全般に亘り、學問的態度をもつて研究した著述である。かかる時事の題目に關する著書は、とかく煽動的なものか、ジヤーナリスティックなものか、いはゆる際物になりがちのものであり、選擇にも一層の注意を要するのであるが、本書は右のやうな弊を避け、着實な研究によつて、客觀的にその本體を明かにしようと努めたもので、信用するに足るものである。

大戰後の「社會民主主義の破綻」より筆を起し「國民社會主義運動」の發生より現在に至るまでの大勢を説き、次に本書の特色を形作る「思想體系」「政治理論」「經濟政策理論」究明に入つてゐる。

國民社會主義思想の淵源をフイヒテの浪漫的理想的の思想にまでもとめ、諸々の社會主義との關係を探ねて、その何れとも異なるひとつの理想主義的國民主義である所以を明かにしてゐる。その政治理論、經濟政策理論においてもあくまで

現に海軍に御奉公して居る自分の口からは少し云ひ難いことであるが、自分の氣持を卒直に申せば、海軍に對する認識を層一層と高むることは國民の避くべからざる義務であり、

海軍研究社編
わが海軍

海軍少將 日比野正治

究明に入つてゐる。

國民社會主義思想の淵源をフイヒテの浪漫的理想的の思想にまでもとめ、諸々の社會主義との關係を探ねて、その何れとも異なるひとつの理想主義的國民主義である所以を明かにしてゐる。その政治理論、經濟政策理論においてもあくまで

又認識の増進に微力を致することは、自分等の重要な職責であると考へる。

のであるから、陸軍に較べて國民との接觸の機會が少い。軍港の見學に行くか、軍艦でも巡航しない限り之に接する機會がなく、又一生のうち一度も軍艦の姿さへ見すに終る人々が、九千萬同胞中恐らく渺くないではなからうかとさへ思はれるのである。故にこの何千萬と云ふ人々に海軍を正確に認識して貰ふことは、甚だ六ヶ敷いことゝ申さねばならぬ。一體物を正確に認識して貰ふ爲には、實物に就て説明するのが最も捷徑ではあるが、一々軍艦を引張つて來るわけにはゆかぬから、海軍の事情を一般に普及することは困難な事柄である。止むを得ず先づ實物の代りに正確な讀物を讀んで貰ふより外に途がない。ひ、説明の代りに正確な讀物を讀んで貰ふことが認識上の要素しかし目に訴へることと頭に讀んで貰ふことが認識上の要素であるからと云つて、無味乾燥なものでは折角材料がよくても頭にハツキリと這入らぬものである。書物などにあつては殊に然りで、正確な材料の羅列のみでは一向に興味が起らな。時局柄海軍に關した書物がいろいろと世間に出て居るやうであるが、正確なものには興味が足らず興味を惹くやうなものには正確さが缺け易い憾みがあるのである。

かうした時に正確さから見ても興味から立つても申分のない「わが海軍」と云ふ立派な書物が海軍研究社から出版された。

兵營の異聞と秘記

陸軍省新聞班にはもの純粋音経

(昭和七、一一、二六 海軍研究社 四六倍判二六八頁 全部二度刷五〇〇)

ないものゝやうに考へて居る向がかなり多い様に思ふ。無論短日月の間に軍人精神を鍛練し、一朝有事の際に身を挺して國難に赴き、喜んで任務に斃れる如く訓練する軍隊教育が放縱な日常生活に比して嚴肅であることはあまりにも當然である。

それを一途に強制と考へ、單なるつとめと感するのはその人々の日頃の生活が放縱であることゝ、さうした生活になれた人々が軍隊生活を誤傳するからではあるまいか。

然しこの嚴肅な軍隊生活殊に日常演習の間、朝夕の兵營生活には社會の日常生活に於ては到底得られない各種の美德や教訓が潛んで居り、生活の妙味が横溢して居る。

私は軍隊教育こそは現代教育中最も効果的であり、國民のすべてが通つて来てよい節制あり、秩序あるルツボであると

海軍士官の搭艦、飛行機と飛行船、海軍の軍艦、軍艦はどうして走るか、科學の粹で戰ふ近代の海戰、海軍と無線電信、水兵さんの巢立ち、軍艦生活の一日、太平洋上の猛烈な訓練、海軍軍人の階級、帝國海軍の組織、平時に於ける海軍の任務、軍艦を解剖したら、海軍の創始時代、皇國の驕廢此一戰、榮ある觀艦式、楽しい遠洋航海、勇ましい海の子、軍艦旗と國旗、列強の海軍等悉く興味深いものである。尙附錄列強艦艇一覽表を二色で印刷してあるのも面白い試みであると思ふ。

要するに、大人にも少年にも婦人にも向き、勞せずして海軍の認識を高め得るところに本書の特長がある。徳富蘇峰氏が過日「東京日日新聞」紙上で本書を評されたうちに「海軍思想の普及は何よりの急務である。然もこれを普及せしむるに於て戸毎に説き人毎に諭すは決して容易の業ではない。然るに本書は中學程度の少年より七十の老翁に至るまで、以て讀むべく以て觀る可き恰當の案内者だ」と申され、尙「本書を通覽し、現代の所謂海軍に就ての概念を得たるが如き心地がした。此れは決して小供だましの宣傳用の書物ではなく、平易であるが、海軍に關する最新の知識を提供するものだ」と賞讃せられて居る。蓋し本書は海國日本の國民一般に推薦

三〇

本書は斯うした誤傳の多い兵營生活に起伏する幾多の珍談異聞を極めて軽快な筆致を以て物語風に記述されたものである。

小學校だけを終へた青少年にも樂に通讀が出來、如何なる
讀書嫌ひの青年でも一氣に読みとほすこと辭せないであら
うと思ふ。そして兵營生活の妙味ひしひしと讀者の胸裡に迫

第四自然科學

科學隨想

西村真琴著

内容は七十幾つかの小品文から成って居るが、之を大體二つの傾向に分けて見られる。一つは普通の隨筆であるが、著者が科學者なるが故に、普通の人の考へ及ばない點に科學的な觀察を與へたもので、も一つは純然たる科學の話を、諧謔交りに平易に通俗的に書いたものである。例へば「六甲山上のルンペン・カメレオンの死」「鳥の糞」「自動車と牛の對面」

發明發見界の智囊

三石巖重久山畠

頁のものか一番多い。その短文の中にも、ちやんと科学的の結論を出してゐる所は、科學者として又ジヤーナリストとしての著者の腕前で讀物としても大變面白い。

本書は新國民理學叢書第九卷として刊行されたもので、一般家庭教育の参考の爲に、併せて初等中等學校に於ける教育資料たらしめん爲に編まれたものである。然し内容は比較的平易に記述されてあるので中等學校で物理化學を學ぶ様になつたら、直接此等の少年少女に與へてもよいものである。内容は二つの篇に分たれ、第一篇は「發明發見界の實績」として、理化學上、生物學上、工業上の多くの發明發見につき、その

發明發見に至る經過、簡単な理論、その發明發見が與へた世の中に對する恩惠等を説くもので、汽車とか汽船とか、さては近頃問題のテレビジョンやヴィタミンは固より、日常我々が何等の批判も不思議もなく使用してゐるマッチ、空氣ボンブ、罐詰、紙等が何時頃、どんな方法で誰の手に依つて發明

物質と言葉

寺田寅彦著

最近、續冬彥集、柿の種等所謂冬彥ものを世に送られた著者は萬華鏡につぐ科學的隨筆集として此の書を纏められた。

四五

篇は發明發見界の偉人の傳記で、ガリレオ、ニュートン、フランクリン等十七人の理化學者、リンネ、ラマルク、メンデル、ダーウィン等十五人の生物學者、グーテンベルヒ、ウエスティングハウス、エヂソン等七人の工業上の發明家につき、その傳記を簡単に記してゐる。

誠に世界文化の歴史は、殊に近代文化の歴史は、ある意味に於て發明發見の歴史である。著者の言を藉りて云へば全く「現今我國の狀態は空前の經濟的國難に直面し、國家の前途は大に憂ふべきものがある。此の難局に處し、國家をして一層隆盛の域に達せしめる所以のものは、實に學術振興、發明獎勵の途を措いて外にはない」のである。本書はこの目的に添ふ爲に著されたものとして此處に紹介をする次第である。

つて来るものがあり、將に入らんとする兵營生活に對する準備は自ら作られて來ると思ふ。

私は本書を軍隊生活に入るべきすべての青少年に勧めたい。

(昭和八、八、一 新知社發賣 四六判二四一頁・三五)

「奇禍に遇うたハバロフスク」等々は前者に屬し、「鳥のトピツクス」「二千年前に射た光の矢」等の「科學スケッチ」の中に收められたものなどは後者である。が、結果から見れば何れも同じ様なジャーナリストイックなもので、所謂隨筆家の隨筆から感じられるような文學的な雰圍氣は本書からは求められないが、唯、日常身邊に遭遇する自然の事物並に現象に對して、科學的に之を觀察する態度と、斷片的ではあるが科學的の知識とを教ふるものである。科學隨想と云ふ書名は、この點でまことに相應しい。

何れも極めて短文で、一篇十頁を超ゆるものは稀で、三四

書中の各編は岩波講座、帝大新聞、科學、理學界、鐵塔其他の雑誌に掲載されたもの、これを「物質と人間」、「言葉と人間」の二項となし別に新刊科學圖書紹介及び伊太利の通俗科學雜誌の図に應じて書かれたといふ英文「Image of physical world in cinematography」を收められて居る。

卷頭の「ルクレチウスと科學」といふ嚴しい題のものは西紀前一世紀にローマに出た詩人哲學者たるルクレチウスに關するマンローの著述の紹介である。ル氏が物理學史上如何なる功績を遺したか、又それが後世の物理學乃至自然科學界に如何な示唆を與へたかを詳細に記述して若き科學の學徒の参考に資せんとせられて居る。

第二の「數學と語學」といふのは數學が好きで語學の嫌ひな學生と語學が好きで數學の嫌ひな學生との間に於ける好惡には共通の要素の好在すること、そして嫌ひなものを征服する道程を暗示せんとするものである。

次の「日常身邊の物理的諸問題」や「物理學圈外の物理的現象」「自然界の縮模様」「家庭の人へ」等は何れも敏感な著者の眼に映じた物理的現象の一端であるが、讀者に科學的觀察眼を附與する興味ある讀物である。

「言葉と人間」の項には「日本樂器の名稱」「土佐の地名」「火山の名に就て」「歌の口調」「短歌の詩形」「言葉の不思

議」等語源の穿鑿を主としたもの、書籍紹介には藤原博士の「雲」、武者氏の「地震に伴ふ發光現象の研究」、岡田博士の「測候增談」をあげて居る。何れの一篇にも著者の該博なる識見、豊富なる趣味、洗練された筆致があらはれて居り、啓發せらるゝこと大なるものがあると思ふ。

(昭和八、一〇、二二 鐵塔書院 四六判三七七頁 二・〇〇)

電 氣 物 語

石 原 純 著

電燈、電車、電話、ラヂオ等は日常直接我々がお蔭を蒙つて居る所であるが、此の外今日の世界がどれ程多くの恩恵を電氣に蒙つて居るかは今更申す迄もない。その割合に世人が一般に電氣知識に乏しいのは一つには電氣に對する危險視にもよるが、一つには適當な通俗書が少なかつたせいにもよる。本書の序文では著者は斯う云つてゐる。

「電氣とは抑も何んであるか、又どうして之等の應用が發明されるやうになつたか、さう云ふ疑問に對して一般の人々はまだよくそれ程明瞭には答へることが出来ないのであらう。私はここで電氣の性質について出来るだけ解り易く物語つて見たいと思ふ。電氣の一切の取扱ひを學者や技術者だけに任せきりにした時代は既

化 學 物 語

益 田 苦 良 著

小學校に於ける理科教育、中等學校に於ける博物、理化學教育は近時實驗觀察を主として進められて居るからこれ等の學科に對する兒童生徒の學習態度が昔日のそれに比して良好な事は何人もこれを認むるところである。

然しながらこれ等の自然科學科に於ては、自然現象、物理化的現象そのものの學習、教授に其の主力が注がれる結果、言はゞ學者の研究の結論のみが次々に注入せらるることとなり、往々にして乾燥無味に終ることなきを保しがたい。

林檎の落下に暗示を得て引力の法則を發見したニュートン、豌豆の花の觀察から遺傳の法則を導き出したメンデルの如き自然科學者の生涯を語ることは學ぶ者の向學心を鼓舞する上に相當の教育的效果が期待されると考へられる。

本書は斯うした意圖の下に偉大なる化學者の努力、勤勉忍耐の生涯を記述し、數年前科學畫報に連載したものを取りまとめ、補訂したものである。

本書は合して十二章よりなりラボアジエーを以て前後篇の分界點となして居る。ラボアジエーは佛蘭西革命に際し「我

(昭和八、三、二八 新光社 四六判二三七頁 一・五〇)

に過ぎ去つてゐるので、我々の家庭のなかにまで電氣器械が入り込んでくるやうになると、誰でも之に對する一と通りの知識を具へて、少し位の故障は自分でなほしたり、漏電などの災害に對する豫防にも注意することが必要になるのである。」

勿論本書を讀んで直ちに電燈の故障を修繕する事は出來ないが、その故障が何處に存するかを察する事は出来るし更にも一段高級な専門書に手をつける踏臺ともなるので、本書の目的は電氣に關する總體的な一般知識を與ふるにある。内容は古代人の眼に怖ろしい神祕として映じた自然現象としての電氣磁氣に關する原始的な知識から說き起して十六七世紀以後急激に電磁氣學が發達して今日の隆盛に至る迄を歴史的に體系的に叙述されたもので、電池の發明、電流の化學作用、地球磁氣、感應電氣、X線、それから最近の電子論、宇宙線等にも僅かながら觸れてゐる。

程度は平易ではあるが、全然豫備知識なしでは讀めない。少くとも中學校の物理の知識を豫備的に有つて居れば相當に面白く、電氣に關する基礎知識を各方面から萬遍なく與ふるものとして一般に推薦し度い。

(昭和八、三、二八 新光社 四六判二三七頁 一・五〇)

(昭和八、一、一〇 新光社 四六判三〇四頁 一・五〇)

人 生 化 學

龜 高 德 平 著

が共和国に科學者はいらない」といふ科學に無理解な革命の主領のためにギロチン上の露と消えたのであるが「近代化學の建設者」たるの榮譽はとこしへに化學史上に印せられるであらう。彼の生涯と其の業績の一端は第四章近代化學の建設に收められて居る。

火は原始人の崇拜の對象であつた。然も火の正體は何人もこれを把握することが出來なかつたのである。十七世紀末英國のメーヨーが燃素説を唱導してから滿百年の後同じく英國のブリーストレーによつて酸素が發見せられ、燃燒學説の完成したことは第三章に詳述されて居る。

分子式と構造式とは化學の學習に不可缺のものであるがその單なる記憶は學ぶ者をして往々嫌忌を催ほさしむる。本書に於てはその由來を示して學習に便して居る。

一々の解説は到底本誌に盡し得る處でないから左に目次を掲げよう。

化學の先驅、鍊金術—ロバートボイルまで—燃燒の學説—近代化學の建設—詩人化學者とその弟子—原子・分子説の發展—元素符號と化學式の由來—元素發見と週期律—溶液論の今昔—電離説の出現—原子と分子の大きさ—化學の革命
内容右の如く其の叙述は平明であるから化學を學習する中等程度の生徒の適富な讀物と信する。

著者は日本化學界の大先輩の一人で、かねて化學知識の普及に努力せられつゝある篤學者であることは言ふまでもあるまい。

かつて化學知識普及のために「化學と人生」なる一書を公にせられたが、本書はその續編とも稱すべきもので、昭和年間に諸種の雑誌に載せられた論文、ラヂオ其の他の講演筆記及び新に起稿された通俗化學語を集め、更に先輩知人の論文中、人生に直接關係あり又は特別の興味あるものを收録し還暦記念として發刊されたものである。

附錄を合して七百八十頁、著者の譯著にかかる部分は約四割他は先輩知人約五十氏の論文集で、一論文の長さは十頁内外のよみきりである。從つてそこには多少の重複があり、精粗があるが、何れもその方面の専門家の執筆にかかり、且つ著者の化學知識普及化の増進を通して來たもので内容の正確さは言ふまでもなく叙述も極めて簡易平明で頗る興味深く讀み得るものである。

篇があつて、青年の知識慾を刺戟するに相應しい。

大要右の如く其の内容は著者の編輯にすぎないが、廣汎なる化學及化學工業關係事項を唯一人によつて誤謬なく然も平易に説述することは困難であるから、著者のとられた態度は必ずしも非難すべきではあるまい。但し頁數があまりに膨大であり、從つて高價であることを索引を缺くことは遺憾である。

然し本書の如きは通讀すべき書ではなく又専門的知識を要求すべきではなくして化學及化學工業についての多方面の常識を養ふに適當な書と考へ推薦せんとするものである。

(昭和八、三、八 丁未出版社 菊判七八〇頁 四・八〇)

地 球
坪 井 忠 一 著

地球とはどんなものかといふことは今日ではもう我々の常識となつてゐると考へる人は相當に多いであらうが實はなかながさうでない。

第一に地球の形にして見ても我々は一口にそれは南北に少し平たい楕圓體だとわかり切つたことの様に答へるかも知れないが、しかし考へて見れば地球上にはエヴエレスト山の様

これ等の論文は「一般化學及無機化學に關するもの」「有機化學及生物化學に關するもの」「化學工業に關するもの」「化學教育に關するもの」「傳記及雜」の五章に類別されて居る。第一章は大部分著者の著譯にかかるものであるが就中最も興味ある部分は「化學は化け學」「化學の魔術」「化學戰爭」等の青少年讀物、「明治大正に於ける化學研究の名作集」「窒素原子の自叙傳」等である。第二章には著者が昭和六年中央放送局より放送された「有機化學大意」や、ビタミンB、理研清酒の合成で名高い鈴木梅太郎博士の「ビタミン研究の回顧」を始めとして綠茶、味噌、醬油等食料品の研究等が收められて居る。

第三章には高松豊吉博士の「本邦重要化學工業發達の概要」田中芳雄博士の「化學工業の尖端的諸問題」を始めとして最新の各種化學工業發達を鳥瞰することの出来る諸論文に充ちて居る。第四章の「我國の化學教育に就て」及び「化學教授の教養的價值」によつて著者の化學教育觀を窺ふことが出来る。

第五章は大部分化學者の傳記であるが、就中、「發明發見ローマンス」には二十餘の化學者の興味あふる逸話が收められて居り、最後には、「明治元年以来本邦化學發達概史」があり、附錄として、「化學を修めんとする青年のために」の一

に九千米の高山もあれば一方ではエムデン海溝中に一萬一千米の深さの所もあつてその高低の差は二千糠にも及んでゐる。これは地球の半径を何メートルといふ細かい所まで問題とする今日では「たつたそれ位」と簡単に片附ける譯には行かない。また我々は地球の内部は高熱の爲めどうの波状になつてゐると教へられてゐたが近時は地球の潮汐の現象や地球の廻轉軸の運動の周期などの観測の結果それは相當の剛性をもつものと考へられるやうになつてゐる。最近今村博士が地球の中心を通過したらしい地震の横波を観測したとの報告は一層この説を都合よくするのである。更に地球上の海や陸や山脈がどうして出来たかといふ興味ある問題についてもそれは丁度林檎が水分を失つて縮むるとき表面に出来る皺のやうなものだといふ昔の考へ方を今なほそのまま信じてゐる人が多いと思ふが、この頃では岩石中に含まれる放射性元素が絶えず熱を発生してゐるといふ事實から地球が冷却するといふことが疑はれるやうになり從つてこれによる地球の収縮の結果山脈や海が出来るとの説明は根本的に怪しくなつた。そして其後各方面からの研究の結果今日では大陸と大洋とは本來全く違つた物質から出来ており軽い物質からなる大陸の塊が流動性のある重い海底物質の上に浮んで壓力が等しくなつて地殻のつり合ひがとれるやうな状態にあるのだと考へら

れる様になつてゐる。これが所謂アイソスタシーの説である。そして山脈の出来る構造に就いてアイソスタシーと同じ考へ方の上に立つて有名なワーゲナーの大陸移動説があるのである。

本書第一章から第三章までに於て右に述べた様な諸點に就て地球に關する現在の知識が本質的の厳密さを失ふことなく平易な言葉で説かれている。第四章は本著者得意の地震と地殻の變動の説明である。著者は帝大助教授であるが同時に地震研究所の所員として地面の移動の測定及重力の測定に従事してをらるる新進の學徒であつてこの章の記述は就中權威あるものである。

この著者は地震學の研究が當然に物理的な量の問題にまで立入るべきを説いてゐる。そして第五章に於て地磁氣を説明してゐるのである。第六章は地球の年齢でいろいろの學者の研究を紹介してをり第七章は地球物理學の應用としてこれが人生への結び付きを示してゐる。

(昭和八、五、一五 鐵塔書院 四六判一二八頁・八〇)

測候瑣談

岡田武松著

本書は神戸の海洋氣象臺の同人雑誌「海と空」に數年間にわたり寄せられた著者の短文百八十篇と歐洲氣象臺巡回談十一篇とを集めたものである。内容は何れの一篇も全く「測候瑣談」の名にふさはしく、寒暖計の渡來、昔の時刻、貿易風の譯語、颶風の語源、天氣豫報石、梅雨等々多少考證めいたものもあれば、氣象學或は測候所關係の内外先輩の逸事逸話(主に日本人に關係してあるが)、著者の經驗思ひ出話、さては「名古屋を境界線として是より以東以北の地は毎朝飯をたいて味噌汁をこしらへる、是より以西以南の地は朝は冷飯に漬物で食ふ。これは氣候の寒暖の差から起つた事であらう」とは、子規居士の墨汁一滴の中の文句であるが、著者に云はせれば關東以北の蕎麥と名古屋以西の餡餅、之も氣候のせいである。かとおもふと、民謡木曾節の中から木曾御嶽山頂の夏季の氣温を見積つたり、或は氣象方言の例解やら、氣象を通じての著者の人生觀らしきものなども見え、読んで仲々に面白く、面白い中に断片的ながら測候と云ふ事に對する知識と親しみとが喚び起される。中には相當

豫備知識を必要とするものらしく思はれる處、少くとも豫備知識があれば一層興深く讀む事が出来るだらうと思はれる個所も少くはない。殊に卷末の歐洲氣象臺巡回談に於てその感を深くする。然し必要な事柄には一々註譯が附いてゐるし、叙述は平易であるので、讀んで分らないなどと云ふ處は一つもない。著者は序文の中で、「元來が測候丈けに圖ることだから、話題の範囲が誠に狭い、從つて之に興味を持たるゝ方も極めて少數であらう」と云つて本書の出版を大いに遠慮して居られるが、測候とか氣象とか云ふ事は高遠な學理であると共に、我々日常生活に最も關係の深い事柄で、相當我々の關心を惹く事であり、知つておかなければならぬ事でもある。その意味で藤原咲平博士の二三通俗的の名著と共に本書の如きは一般讀書子の間に愛讀されてよいものと思ふ。

(昭和八、三、二十五 鐵塔書院 四六判四四八頁・二三〇)

生物學十講

中島毅一著

あらゆる生物は——いふまでもなくわれく人間をも含めて——自然の理法の下に生きてゐる。ただ特に理智の發達した人間はこの自然の理法を理解することによつてよくこれを

生の深い意味が諒解される」

「人類は自然を征服せり」といふやうな思ひ上つたものの言ひ方を本書の著者は近頃最も耳障りだといふのである。人類は決して自然と争つてゐるのではない。文化とは人智を以て自然を征服するの謂ではない。却つて自然の理法を理解し、よりよく生きるために自らこれに順ふことである。自然に反して文化の向上はあり得ないのだ。

自然を學ぶ者は常にこの敬虔の気持ちを忘れてはならぬ。

この気持ちを持つて對するとき自然は最も偉大であり且それは恩恵に満ちてゐる。

本書の著者は生物學に志して三十年、常にこの心を以て自然を研究したといふ。

著者の心を最も惹付けた問題は、生命の現象、生物と環境、發生、生殖、進化、遺傳、人間と動物、人間社會と動物社會等であつた。本書は十講に分つてこれ等の諸問題を説いてゐるのである。

著者はいふ。

「これ等に關する知識を得たことによつて私は聊か精神的に自己を統一する信念を得た。生物に就てその形象を形態的に生理生態的に研究し、生きることが何であるかの確かな一面を知ることが出來た。諸生物及び人間に對し謙遜の態度を以て接見すると、

かくて著者は「一般に人としての生活及び思想の建設には生物的知識の修得が必要である」との信條の下に本書を公にされたのである。

（昭和八、九、一二 厚生閣 四六判三三六頁 二・三〇）

大島正滿著

動物物語

上野動物園長 古賀忠道

近時機械文明に伴ひ、凡て目に見え、耳に聞ゆるもののは殆ど人工的のものとなり、社會組織は益々複雑化すると共に、人々は愈々目まぐるしい生活に追はるゝ様に成つた。

斯る時世に當り、又一方には生物の自然の狀態に對する人の注意も、稍々強く成りつゝあるかの感じがある。是は誠に喜ぶべき事實で、少く共、吾々は一日の或る時間位は、それがほんの一瞬間であるにしても、自然を見、自然を聞いて、全く物質文明を忘れた、ゆつくりした氣持に成り度いもので

あると思ふ。

而も最ものんびりして居り最も自然であるべき子供達に取つてこそ「自然」が最も必要ではなからうか。

吾々が自然に接する場合、先づ之に近づく所の機會と成るものは、幾分でも自然に對して興味を有すると云ふ事である。而もこの興味たるや、自然を知る事即ち自然に就いての知識を得る事より始まる。自然の中には常に人智の計り識り得ない妙味がある。

而も其中には幾分の無理も無い、此の妙にして、無理の無い所には子供達は勿論大供達も親しむと云ふ事こそ最も必要な事の一つでは無からうか。

以上は私の常に考へて居る事であつて、この自然に近づかしめる爲の一つとして彼等に「適當」な書籍を與へると云ふ事は、特に都會の子供達に取つては最も近道であると考へる。即ち其「適當」と云ふのは、彼等に相當の興味を起さしめるに充分であると云ふ意味である。勿論興味と云つても嘘では困る。興味を起させ、而も事實を知らしめて自然に導かうと云ふ目的であるが爲である。

先づ實物を見、然る後に之に關する研究資料を與へる事も勿論、自然に近づく一法には相違ない。併し時と場所とに依つては不可能な事もあり或は又却つて不適當な場合も多いと

考へる。勿論此の兩者を同時に與ふる事が最も好結果を來すには相違ないが、之とて不可能の場合が非常に多い。知識慾の旺な子供達を満足させ、而も益々興味を起させる爲には、段々自然に遠ざかりつゝある子供達に先づ良案内書を與ふるゝ云ふ事が、最も行ひ易い道であると思ふ。

今度出版された、大島正滿博士の「動物物語」は斯る意味に於て、私としては、最も「適當」な本であると思ふ。同博士は人も知る動物學に於ける權威者である。讀む者をして自ら興味の内に、次々と読み續けしめると同時に、又其間自然に對する正確なる知識を與へる。而も其文章は最も人々に親しみ易く、且つ又其間種々の挿話等が入つて居り、少しも肩のこらないすらゝと読み終り得る様に出來て居る。而して博士自身の經驗による旅行記、實見記の如きも、子供達をしてほんの一部分であるから、其對象物に依つては、之を全く平易にのみ書くと云つても之は程度問題であるから、本書に就いても無理も無い事と思ふ。併し小學校の上級生を目的としては全くの好参考書たるを失はない。

私は今小學生と云つた。勿論前記の通り、上級小學生を當であらうが、而も大人に取つても亦知識を與ふるに充分な

ものである。子供達に理解せしむべき動物の話に就いては又最も良書であらう。

唯自分一個人として動物園で實際見て居る事と、自然の場合とが必ずしも一致するとは思はない。併し或點に於ては、本書中に自分の考へとは異なる記載もある。例へば動物の寢すがた等の點に於てである。

併し之を要するに、現代の子供達及び子供の指導者に取つては絶好の動物案内書として、一動物に興味を持たせる導火線として一般に推薦し度い良書である。

(昭和八、四、一〇 講談社 菊判二五一頁 一・三〇)

原色昆蟲圖譜

松村松年校閲

平山修次郎著

知識を得るといふことは世界を廣くし世の中を面白くするものである。

夏の夜螢火を慕つて飛んで来る難多の蟲もこれに無関心な人々にはただうるさいもので單に腹を立てさせる材料に過ぎないが、少しその名前でも覚えて見ると今まで徒らにうるさいものだつた蛾だのブンブン蟲だの類も、これはヤガ科

のゴマケンモンだ、これはコガネ科のムネアカだと品定めに興が出て、時にまだ名を知らぬ珍らしい蟲でも飛んで來ると早速昆蟲圖譜の類を引つ張り出してその正體をつきとめなくては承知が出来なくなるのだ。

我國昆蟲圖譜、圖鑑の類も相當出てゐるが何れも高價で一般家庭に一本づつを備へるに適しない。

今度井之頭公園側平井博物館の經營者であり標本作製に堪能な平山氏が主として我國に最も普通な種類の昆蟲千種を同氏所藏の標本中から選んでこれを原色版とし、更にその一つについて和名、學名、科名、產地、採集月日並に食草を記し或場合にはその習性を略記した恰好の昆蟲圖譜を公にされた。定價至廉しかも日常我々の目に觸れる昆蟲の大體を集め得てゐる。

なほ卷末には附錄として昆蟲の分類、昆蟲採集器、昆蟲採集法、標本作製法、昆蟲飼育法、標本保有法等を述べてゐるのも我々素人には極めて便利である。

(昭和八、八、一 三省堂 四六判圖版一〇四頁附錄一八頁 和名

索引二三頁 科名索引二三頁 三、〇〇)

蟲の社會生活

松村松年著

昔から蟲けらの如くと云へば、甚だめでたからぬものゝ代表語であるが、蟲けらと雖も仲々に馬鹿にはならない。勿論中には暑さに死に、寒さに凍え、食物の缺乏によつては饑餓に迫られると云ふ、一見甚だ無爲無能な蟲けらもあるが、これとて何も蟲けらの如くと云つて人間から蔑視されるいはれはないのである。若し夫れ蟲や蜂の類に至つては堂々たる社會生活を營んで相互扶助や社會秩序を亂すものへの制裁が極めて合理的に行はれ人の社會の夫にも似たる階級や騎士道やがほゝゑましくも存在し、その社會生活が本能的であるだけに、甚だ機械的に取り行はれて居るのである。

(昭和八、七、二二 東京堂 四六判三一七頁 一・八〇)

能率百話

上野陽一著

商工業の經營に對して如何にすれば能率をあげ得るかといふ問題に對し、種々な方面から分り易く講ぜられたものが本書である。第一に會社工場の指導者に與ふるものとして「指

導者讀本「自己改造の卷、人心統率の卷がある。著者は「本書を四十歳以上の人々のために書いた」と述べてゐる。事業の經營と實際的運用に最も該博なる注意をあげ指導者は危險に臆せざるやう自己改造の要を説き、部下を保護し、定見を以て事に當り理想を確立せよ等實地に接觸して多くの例證を以て誇々と語つてゐる。「會議を主宰するチエアマンの職責十二ヶ條」も同様に座長たるものゝ急所をよく捉へて示唆してゐる點注目に値する。

第二に心理學的立場から、「科學的管理法の實施に必要な性格について」述べ、人間には「事務屋」と「技術屋」の兩性格があるからその才の適當なる應用の方法によつて事業の能率をあげることが出来るとして、その性格の摘出に行届いた観察を施してゐる。新管理法の父フレデリック・ウインスロー、テーラーの科學的管理法については詳細に調査し、經濟家の技師としてのテーラーの根本思想、テーラー式の管理法の原理と手續、原價計算等に亘つて叙述してゐる。尙「ロシア計畫經濟における獎勵方法について」「駆音の中に住むわれらの生活」「能率の立場から見た日本のモジとコトバ」等の評論も現代焦眉の問題を捉へたものとして一讀の價値あるものである。學問的といふよりも實際的實務的に講ぜられた本書は誰にも分り易いやうに書かれた指導書として十分有益なものである。

(昭和八、二、二三 千倉書房 四六判三一〇頁 一・五〇)

潜水生活二十年

三浦定之助 著

海に臨んで常に「沈むことばかり考へてゐた」といふ著者が二十餘年の潛水生活の間に觀察した魚類の海中におけるありのまゝの活動を、面白く描いたものである。

無慾で男性的な「うつば」と懲深で不死身の「たこ」との闘争を始め、電擊によつて敵をたはす「しごれえい」猛毒をもつて害敵を防ぐ「ごんすい」大鯨を襲ふ「しゃち」なら、えび、貝類に至る海中動物の、烈しい生存競争場裡における生活狀態、その性能を紹介し、又魚類の繁殖の事情、防禦力の全くない「ぶり」の仔魚が、自然の災害、數々の害敵を免れて成長する變化に富む生涯を示し、その他簡単に潛水夫の活動、魚群の襲來、揚網の模様などにも觸れてゐる。

すべて著者自身の經驗に基き、描寫もまた巧みで、讀者を魚類の生活に親しませるのみならず、魚類に見られる不可思議なる本能のありのまゝの紹介は有益な興味を與へる。

(昭和八、三、一九 改造社 四六判二二三頁 一・〇〇)

交 通 物 語

三井高陽著

著者は主として郵便の歴史を研究してゐるその道の専門家である。本書も郵便に關するものが多い。「美術に現れたる郵便交通」「郵便の使命」「歐洲郵便制度の沿革に就て」「歐洲各國郵便博物館めぐり」「封筒史」「萬國郵便聯合の祖ステファン」「郵便と切手の話」「郵便の機械化」等。

郵便に關することは流石に詳しいものである。日本、西洋における書簡の歴史、書狀の折り方、封筒の起り、その變遷、さては封臘のこと、歐洲における郵便制度の起り、その沿革、萬國郵便聯合の成立など微に入り細に亘つて説明してゐる。今日われ／＼が何の氣もなく利用してゐる郵便が、かくも複

雑な徑路を経て出來あがつたものかと驚き現在の日本の制度にも幾多改善すべき餘地のあることなどを知るのである。

一般交通のことについては歩行、動物利用、駕昇、馬車、汽車、自動車、舟、汽船、飛行機等の發達概要を「松並木の下を行く」「駕昇と駕者」「汽車と船の生立ち」等で述べてゐる。日本の昔の旅、道路のこと、徳川時代の鎖國が交通の發達に及ぼした障礙、道中の危難、迷信のこと(「東西道中懷實記と時間表」)、西洋の昔の旅、馬車と道路のことなどを情味ある筆に託して興味深く語つてゐる。著者もいつてゐるやうに、本書は交通に關する漫談風の小著ではあるが文化の發達に關係の大きい交通に新たな關心を喚びさまし、興味を湧き立たせる好著としてこれを推奨したい。

(昭和七、一二、二〇 丁未出版社 四六判一五〇頁 一・七〇)

美學及藝術論

大塚博士講義集 I

藝術を論じ、美を説くものは多いが、多くは断片的に終り、藝術、美に關し基礎的に取扱つたものは案外少ない憾みがある。

大塚博士は東京帝國大學に美學講座開設以來三十年に亘つ

て、美學を講ぜられ、我が國に於ける斯學の専門的研究の基礎を確立した人とされ、しかも日夜研究に没頭して一冊の著書をも公にされることなく、その學殖を惜しまれつゝ逝かれた。その歿後博士の門弟等によつて、博士の學識を世に傳へるため、その講義が纏められることになり、その第一巻として出版されたのが本書である。

本書の内容は美學概論、藝術論、造形美術論から成つてゐるが、編者の言葉によれば大正十年度から昭和三年度に至る八年間の講義を、重複を避け適宜取捨綜合してこれらの三つに纏めたものである。

先づ「美學概論」では美學の課題及び方法を、説明し、美學の研究対象を、人間にとつて美の最もよく發揮される中心である藝術に限り、而してその藝術體驗に對しては、哲學的思辨的な構成を避け、經驗を重んじ、所謂類型學的方法に基いて記述し解釋すべきことを明かにし、以下に美的體驗の諸特質を擧げ、美的體驗の客觀的知的方面即ち美的直觀、その主觀的情的方面を示す美的感動をそれゝ明かにしてゐる。

第二の藝術論では、主として藝術的創作を取り扱ひ、併せて藝術の種類に就いて述べ、第三の造形美術論では建築、彫刻及び繪畫をそれゝ精しく取扱つてゐる。

全體を通じて批判的態度を以て、種々の美學説、及び美、藝術に關する多くの文獻を顧み、折衷的ともいへるほど穩健な道を求める、深遠な理論を精しく辿ると同時に、複雑曖昧な概念を避けて極めて平明に叙述してゐる。しかも美學上重要な問題にはすべて觸れて居り、斯學の専門的研究者にとつても教へる所が多いと考へられるが、美、藝術の問題に關して何等か基礎的な知識を得ようとするものにとつては、美學概論として、恰好の書であらうと思ふ。

ちなみに大塚博士の講義集の第二巻は文藝思潮論を中心とし、附錄として、生前公にされた論文、講演等が集録される筈であつて、第一巻だけ完結したものとして、獨立に讀んで不満のないものである。

(昭和八、五、一五 岩波書店 菊判六三三頁 四・五〇)

書道と畫道

津田青楓著

著者は畫家であるが書にも堪能である。然し所謂書家とは自ら趣を異にして、今日程良寛が世に持てはやされなかつた時代から、良寛の草書を好むこと甚しかつた。著者の良寛の草書を好むに至つた理由は良寛の書には、「ものごとに感じ易

(昭和八、一二、五 小山書店 四六判二二四頁 二・〇〇)

實例 趣味の寫眞術初步

松山思水著

この本はあく迄もアマチュアの初心者を對手にしてゐる。

本書の中の一部分、例へば露出だけ、又は整色寫真撮影法その他の特殊な部分だけに關する優秀な著述は相當ある。然しそれの高級な研究書を手にする以前に、初心者には一通り寫眞術のすべての問題に觸れた謂はゞ寫眞概論とも云ふ可き入門書が必要である。世間にはシャッターが何だか絞りが何だか、露出が何だか整色が何だか、それすら知らないアマチュアが相當にあると思ふ。その人達の爲に、餘り専門語を使はず、餘り高級品を材料にしないで平易懇切に説く本があつた中には若干も少し詳細に盡して貰ひ度い點もないではないが、それは多少なりとも寫眞趣味に足を踏み込んだ者の云ふことで、この程度の入門書には無理かも知れない。その上この本は元來がアマチュアから出發した著者の過去二十年以上の経験から割り出されてゐるので、我々が現在行ひ勝ちな失敗は著者の嘗ての失敗でもあつた。この點で著者の説明は

初心者に同情があつて指導的である。以上のような意味から本書を寫眞術の初步にある人々の爲に薦め度いと思ふ。

(昭和八、八、一九 金星堂 四六判二一六頁 一・九〇)

大河内正敏著

清美庵陶
隨筆集

片

奥田誠一

科學者であると同時に趣味家である著者の隨筆である陶片は、著者が曾て陶磁器の趣味に熱中された時代の小論文を幹として、最近忙中閑に其の思ひ出を筆に任せて物されたものを枝とし、之に科學と其實踐問題や、產業政策の行政論と云ふ葉や花をつけて出來た小冊子であるから、卷中至る所に著者の科學者である半面と趣味の豊富さが現はれて居ると同時に工業行政に於ける識見が窺はれるのは此著者ならんばかりはざる所である。陶磁器に就ては此所に紹介する迄もなく既に天下に定評がある。又科學者として將又産業問題に對する識見に至つても世間の既に認むる所であるから亦贅する迄もあるまい。

然しかる眞面目な半面に頗る碎けた魚釣りの道楽や銃獵

の趣味や食道樂迄ある上に、餘技の繪技迄一寸素人離れのして居るに至つては其才氣煥發八面鋒の切れ味に驚かざるを得ぬ次第である。從つて此書を繕くに從つて趣味や科學の世界から工業や産業問題に至る迄一かどの通に教育されてしまふ。眞に之れ非常時代に於ける一清涼劑たるを失はぬ。親しみべき燈下に於ける座右の好伴侶として推賞する所以である。殊に挿畫の登り帖の圖は其隨筆と相俟つて香氣の瀰漫たるものがある。挿まれたる陶器亦逸品多く趣味の横溢するは著者の通の然らしむる所。其産業論に至つては正に襟を正して聞く可きである。

一卷三百九頁、紙數多きに非ずとするも其内容の豊富にして多方面なる、次の内容目次を以ても首肯し得る事であらう。

日本陶器の鑑賞	(陶磁研究)
大鶴・小鶴	(狩獵と味樂)
青とうがらし	(味樂)
魚の味	(同)
なます釣り	(釣趣味)
中金の豚鍋	(味樂)
銀の塔	(同)
樂茶碗	(陶磁研究)
秋雑感	(味樂)

柿の蒂

坪内逍遙著

「柿の蒂」は劇壇の舊宿坪内博士が主として過去の思ひ出話を折にふれて書かれたものを集輯したものである。著者が明治文學界の開拓者であるだけに、明治の文化と文壇の裏面史ともいふべきものが多く記載されてゐる。

「二葉亭四迷の事」「明治二十三四年ごろの文壇」「饗庭篠村の事」の標題の下に二葉亭、篠村は勿論、數多の明治の文學者の來往の跡を辿り、著者自身書いてゐる如く熟慮の結果筆を執つたもの故、事實は信據するに足ると云へる。その總てが著者の若年のことともであるからまた感激深く叙せられてゐる。

次に「活歴劇桃山譚の今昔」「清正役者としての吉右衛門」「梨園外からの劇の指導者」「自作上演の新演出」「沙翁劇の新演出」「老衰の歌舞伎を診断する」等の演劇談には劇壇に關する著者多年の経験と一家の見識を述べて居り、「藝術上に於ける寫實の位置」「藝術傳統のねばり強さ」「俳優術」等に著者の演劇觀乃至藝術論といふべきものを窺ふことができるのである。それから「ドクトル野口英世と書生氣質」「八代大將の

スパニール	(狩獵趣味)
王一亭の畫室	(隅感)
青磁の壺	(陶磁趣味)
柿右衛門と色鍋島	(陶磁研究)
「柿右衛門と色鍋島」の序	(同)
武器の賣込み	(産業問題)
產業第二革命	(同)
關稅戰は何時迄續く	(同)
自然科學の普及	(同)
古九谷	(陶磁器研究)
陶器圖版解說	
圖版目次	
柿右衛門作 桐模様長皿	表紙
鮎 圖(著者餘技)	
道入作 赤樂筒茶碗	
スパニール(著者餘技)	
色鍋島 房模様中皿	
古九谷 波斯平臺鉢	
古九谷 宗達平小皿	

(昭和八、九、一五 鐵塔書院 四六判三〇九頁 二・四〇)

事」等にも著者の廣汎な交友の跡がみえる。

又著者の饗庭算村との水魚の交といひ、二葉亭四迷を思ふの情といひ、温情湧くが如き人間逍遙を偲ばしめるに足るものである。

演劇及び劇作に於ける逍遙の創見のたかさと分析の鋭さとは今更茲にいふまでもあるまい。明治文化研究の一面向として明治文學研究の盛んなる今日、本書はその道の研究者にとつて貴重な資料であるばかりでなく、一般好劇家にも文學愛好者にも興味盡きざるものがあらう。それは本書が著者の人格を裏づける好著であるからである。

(昭和八、六、三〇 文啓社 四六判五三五頁 二・八〇)

岡本綺堂著
額田六福著

家庭 日本芝居物語

河竹繁俊

例の富山房の模範家庭文庫の一篇である。著者は我らが尊敬する岡本綺堂、額田六福の兩氏、挿畫は鳥居言人、清水三重三の二氏、企てといひ著者といひ、裝幀挿畫といひ三拍子

主眼とした家庭悲劇めいたものは、この文庫の目的から言って、警戒されなければならない。そこは至極安全にできてる。忠臣孝士義烈婦ばかりが描かれてゐるが、芝居の一部分だと思つて貰へば差支へはない。實際止むを得ない。歌舞伎は將來ます／＼古典化して行くであらう。豫備知識なくしては、面白くないものに既に／＼なりつゝある。

同時にこれを觀に行く家庭も減つて行く「忠臣蔵」や「先代戯」の筋を知らない若い主人や奥さんも一層多くならう。概略でもいゝ、日本國民の創成した代表的な劇曲に親しむにはかうした書物は最も恰好だ。卷首の目次の所に、作者や年代記的の要目を附記してあるのも、兒童のためばかりでなく、成人のためにも大いに役立つて、観劇に對する豫備知識にもならう。私どもはこの新著が甚だ重寶なまた時宜にかなつた、家庭文庫として大いに推奨するに躊躇しない。

(昭和八、四、二八 富山房 菊判五七〇頁 二・八〇)

積雪期登山

—準備と技術—

藤田信道著

「若し大正十年頃の熱心な登山家たちに知己を持つてゐた人であ

つたならば、彼等が獨逸語や、佛蘭西語の教科書を小わきに抱へて外國語の講習會や外國語學校の夜學の門をくぐつて行つた姿を記憶してをられるであらう」

とは本書「スキー登山界の回顧」の一節である。「山登りには何故語學が必要であるか」とは何人もが懷く疑問であらう。然しこれが我國スキー登山の初期に於けるバイオニア・アルビニストの隠れたる努力の一端を述べたものであることを知つたならば、同時に我等は我が國に於ける積雪期登山の搖藍時代に想到することが出来よう。

安曇野の高原を越え白馬の山頂を目指して登高を試みた當時の優秀なるスキー・アルビニスト等が撃退されたのは大正九年三月であつたが、爾來早慶學習院等の山岳會員諸氏の堅實なる努力によつて積雪登山は漸次に開拓せられた。

今や一般大衆の手に委ねらるゝに至つたのである。

然し我等はこの輝かしい登山界の發展途上に幾多の悲痛なるアクシデントを送迎したことを記憶しなければならない。著者はスキー・アルビニストの活躍を叙した序に、「併し乍ら、此れは形式的の事實のみを見た場合であつて、更にスキー・アルビニストの素質如何といふ點を考へるならば、各自が實力の向上の爲めに、より経験を積み、より深き研究を遂げることを要するがないでもない」

捕つた出來榮えといつてよい。

歌舞伎芝居として世間に廣く知られてゐる。「鹽原多助」と「加賀見山」「二十四孝」「寺小屋」「忠臣蔵」「勵進帳」といつた風のもの二十五種を「物語」の題名にふさはしく、なだらかな分かりのよい文章で書いたもの。シェークスピアの作品には有名なラムの、「シェークスピア物語」といふものが、ある。だいたいさういつたものではあるが、此方はもつと／＼分かりよく、兒童のためにくだけたもので、まことにすらすらと讀める。今日でも舞臺に生命を持つてゐる有名な場面を描寫し、その中へ全體のあら筋も大凡呑みこめるやうに、手際よく織込んであるから、ちつともたど／＼しい感じを與へない。

著者は其はしがきに於て、「家族團欒の裡にひもどき得るためにには、道徳、風俗、思想共に百分に健全であることを必要とする。こゝに選定した二十五篇を得るにも、異常な苦心を要した」と述べてゐる。何にしろ、人形淨瑠璃芝居や歌舞伎劇は江戸時代の民衆を背景として生れ、單俗美を多分に持ち、主として「情」に訴へたものなのだから、著者の此苦心は、他人事ならず察せられる。家庭の讀物として芝居のストーリーを興味あるやうに書かうとするには、その選擇に先づ苦心が拂はれなければならない。義賊を獎勵する芝居や、情事を書く

と述べて居るのは全く同感である。

本書は斯道の一權威たる著者がスキー術又は夏期登山の段階を一應過程したものが積雪期登山を志す場合の注意を記述されたもので、スキー・アルビニストの絶好の指針である。

内容は次の七章から成つてゐる。

積雪期登山の準備—資格と訓練—スキー合宿—山岳スキー術—雪上技術と雪質—氷上技術—積雪期山岳の危険（附録）乾燥雪崩—

スキー登山界の回顧
何れも著者多年の経験を基礎として極めて懇切に叙述せられ、行文も亦極めて清新明快である。

（昭和八、一一、一二、朋文堂 四六列三一三頁 一・五〇）

山スキーの技術

長田 進 著

本書はスキー技術並にスキー登山の教科書であり、教授書である。従つて殆んどすべての粉飾を避けて専ら技術の説明に終始して居る。

内容は次の八篇よりなつてゐる。

緒論—スキー指導に就て—裝備—スキー技術—スキー・ジャンピングに就いて—雪質及びワックス—スキー登山に就いて—スキー及び其の附屬品の取扱法と保存法

雪 女性とスキー

黒田米子著

数多いスキー書の中から女性により女性のために書かれたものとして本書を取り出したのである。

スキーの技術的方面には男女の別はないのであらうが女性には男子と異なる心がまへが必要である。女性独特の纖細な注意は女性によつてのみ可能である。

本書は技術を詳述するのを目的としては居ない。前篇「スキーハンドブック」「女性とスキー」「出立までの準備」「スキー場にて」よりなり、スキーを試みんとする女性に對し著者の體験に基づいて極めて簡潔に其の要領を説いたものである。

中篇「雪の山の手引」は「雪の常識」「樹木をたづねて」「雪の高嶺」「後篇雪煙巡禮」は「初冬の富士にて」「嚴冬の十勝岳日記」「雪解の白馬紀行」「新雪の檜の穗先」「粉雪たつ五色の裏山めぐり」「穂高岬の春」「赤倉の春二景」「スキー練習

の一日」からなり、何れも軽快な筆致を以てものされた雪中登山紀行である。

大要右の如く女性の手によるスキー技術の入門書、雪中登

第七 文 學

文學と感情

土田杏村著

本書は著者がこれまでに續けて來た「國文學の哲學的研究」の第四卷にあたるものであると卷頭に記されてゐるがこの一冊のみを獨立したる讀物としてみても、もとより差支へのない性質のものである。要するに四巻を貫ぬき、その基調をなすものは「哲學的研究」なる方法論的研究であつて、その方法の適用されたる研究の成果であるところの本巻の如きは、一つの讀物として獨立し得るものである。而して極めて優れた讀物である。

いま序文中から引用して著者のとつてゐる方法論的研究の大要をあげておこう。

「私の考へでは言語や文學やは單に一般的社會的財産であるところの意味を表現するだけのものではなく、實にその主體の人間的態度そのもの、なほ内面的にいへば、その主體者の生活の背景にあつて彼の行動を全的に支配する情意活動そのものを表現することのものだ。隨つて解釋の仕事は、その表現に即しつゝ表現の背景に存する全人間的態度、全情意活動を理解し追體験するものでなければならぬ。人間は必ず地位的に存在するとは、その時代の社會生活の中に具體的に一つの地位を占め、主體的にその社會生活の上に働きかけると同時にこれによつて決定せられる相互關係的な存在の仕方をなすことを意味する。それ故に文藝的表現は、創作者の個性を表現すると同時に、その時代の社會生活の個性をも表現するものになつてゐるのであらう。文藝の解釋は地位的の解釋でなければならない」

本書の内容はほゞ四部分に分たれ、第一部は國語國文學の「方法論的研究」として「方言研究の主觀的方法」及び「富士谷御杖の『眞言辨』に對する解釋的試み」よりなつてをり著者

尙隨所に挿入された獨特の登行圖、廻轉圖、各章末の注意事項は著者の體験より出でたもので懇切を極めて居る。

（昭和八、一二、一〇 隆章閣 菊判二二三頁 一・五〇）

の主張するやうな研究方法が如何なる基礎の上に成立し得るかを考察せんとするものである。いま方言研究の主観的研究をとれば、方言を形態學的にみ、更にその形態の經過した輪廻を明らかにし且つその際、採集されたる各特殊點を個々的に扱はず組織的、綜合的に扱はんとする、從來行はれたる客觀的方法を以て方言研究の一半の仕事となし、更に方言の背景に横はる全感情生活に即し、その方言の特性を記載し説明せんとする方法をとるところの主観的研究を述べたものである。

第二部をなす著者の主張する方法論の適用されたる成果はまことに好個の讀物であり、著者の文學に對する把握力の確かさと正しさを如實に示してゐるものである。「弱法師」を通して幽玄の哲學をとらへ「能面の考察」に赤鶴、水見、辰右衛門をならべて藝術品のもつ深さへの理解、智證大師像を通して大師の精神生活の分析、龍安寺の石庭の石群の配置に対する考察などまことに興味のつきない諸篇がもられてゐる。第三部は歌形の研究であり上代歌謡の解釋は歌形研究が先行すべきものであるといふ著者の主張に基づく二三の例があげられてゐる。

第四部は主として上代大和に於ける日本民族の宗教意識の考察であるが、祝詞と怕物の歌の二篇の外、上代部族集團の

人文地理學的研究なる一篇が收められており、後者の、新古同一地名の關係の考察に始まり部族移動の方向、飛鳥平野附近の人文地理學的意義に及ぶ研究は民俗學的にみてもまことに興味のある一篇である。

(昭和八、三、一五 第一書房 菊判三四四頁 二〇〇)

日本文學史概說

山 口 剛 著

本書は著者がアルスの文化講座に筆をとつたものを、著者の歿後遺稿の手によつて上梓されたものである。

國文學に造詣の深い著者が日本文學史の概觀を傳へるために自由な氣持で筆を運ばれたものであつて、上古紀、記の歌謡から明治の初めまで一氣に書き流した風のものである。博引傍證といふやうな考證の煩はしさがなく、著者の一貫した文學史觀がくつきりと現れてゐる著書である。われくは本書によつて、著者の眼識に照らされ、日本文學發展の様相をはつきりと捉へることが出来る。前代後代の文學の聯繫、大作品の後代に及ぼす影響、その様式の變化發展等を明かに看取することが出来る。

本書は著者の文學史眼に照らし出された日本文學史の概觀

であつて、初步の入門書と見るべきものではないが、いくらかの知識と關心とをもつ人のためには、頗る興味ある有益な著述である。著者の明快簡勁な筆致は高い氣品を保ち、本書を實際立つて爽快なものとしてゐる。日本文學愛好の人々に薦めたい。

(昭和八、六、一 刀江書院 菊判一九三頁 一・三〇)

自然禮讚讀本

野口米次郎 著

野口米次郎氏の長い詩生活は、常に人生哲理の直視と自然の禮讚に向けられてきた。即ち本書の成る所以であらう。本書はまたその意味で氏の特色が最もよく顯はれてゐるものといふべきであらう。

長い間外國生活をしてきた人々が故國の山河に深い愛慕の情をよせるることは普通であるが、氏の如き詩人には一層その

思 想 遠 近

谷川徹三 著

現在の文學界思想界に對する一般的批評といふものは一方的に偏するものが多く、それを一應理解して妥當なる裁斷を下すといふことは困難である。本書の著者はその教養の高さ

の木の日本」「日光論」「月瀬紀行」「京都」等に、同じやうな洞察の深さと觀察の妙を汲むことが出来る。此等は何れも本書中につけて吾人に教へるところ多いものである。

氏が青年期を送った「米國加州の自然美」や「春の追憶」や外國人と日本人との「雨」に對する感情の比較や二月目に一流の微妙な鑑賞が窺はれ獨特の評價が見えてゐる。

本書はこのやうに外國生活の追憶を語り、外國を觀てきた詩人の目で祖國の自然を視直してゐるといふ點が興味深く、一種のオリエンタリズムの風韻が漂ふてゐる。自然鑑賞に於て、西洋と東洋の自然美的相異について、將又日本に於ける自然美的再發見といふことに於て、本書は吾人に示唆するところ多いものである。

(昭和八、四、一 金星堂 菊判二〇〇頁 一・二〇)

と思惟の深さに於てこの困難なる仕事を爲し得て、最近の業績には見るべきものが多い。本書には研究、評論、紹介、隨筆と傍記されてある通り、著者のかゝる種類の業績のかなり様々の方面のものを長短とり集め收めてある。

第一のゲーテ考察ともいふべきものは昨年のゲーテ百年祭をゆかりとする四篇で、卷頭の「ゲーテの藝術觀と現代日本文學」は「蒐集家とその友達」に見えるゲーテの藝術觀により、藝術家及び藝術愛好家を六つに分類して、これを日本の現代作家の傾向に適應して論究してゐる。次に自然主義及びそれ以降の現代の諸作家に對する評論はかなりまとまつたものである。この諸作家に對する批評はその作家の作品目録をあげ、作家の個々を取りあげる仕方で、同時に自然主義文學以後白樺派の運動、新感覺派の運動等、文學運動を今日に至るまでの流派に沿うて概観して安否なる理解を示してゐる點、文學講座風な啓蒙的な意味を帶びた解説であるといつてよい。

それから「帝展を見て」「美術界展望」等の美術評論あり、「リカルダ・フツフの人間論」「思想闘争上の日本」「常識の限界その他」の思想界概観あり、土居光知氏の「文學序説」和辻哲郎氏の「日本精神史研究」土居光知氏の「文學論」等の書物批評あり、「深田先生追憶」「三木清」「長谷川如是閑」

等の思想界文學界の人物の氣のきいた素描がある。これ等の取扱ひ方には大きな構造はないけれども、著者の哲學的教養に基づいた曇りなき眼が行き届いてゐて、頭のいゝ時評論として氣樂に讀むことが出来、その表現も圓熟してゐるから讀む者に深い感銘を與へ、目下の動きつゝある精神界を理解せしめる。

最後の隨筆十數篇は著者自身も書後に云つてゐるやうに他の諸篇がおほむね注文によつて、しかも題名を與へられて書いたものであるに反して、これは自發的に書かれたものであるだけ樂しみながら著者の身邊風物を描いたもので滋味あるものである。

この著者はこの本の外にも三四の同じやうな著書があるが、本書には比較的まとまつた評論が多く著者の批評的才能がよく窺はれるものである。よいエッセイ集として讀書家に歎ばれるものであらう。

(昭和八、一〇、一〇 小山書店 四六判四〇二頁 二・三〇)

武藏野にをりて

吉田絃二郎 著

吉田絃二郎氏の文章はいつも人生と自然に對する愛をもつ

て以て知られており、そのいづれも推稱されて良いものである。本書はその最近作としてこゝに擧げるものである。

(昭和八、一二、一六 改造社 四六判二四八頁 八〇)

わが子を歌へる

百田宗治 編

親が子をいつくしみ、いとほしむの、優しくも、美しい心は東西に亘り、古今に通じて、數々の文藝の中に盛られてゐる。まことにこの至情こそは、人の心の底の底から歌にあげられて來り、あまねく人の心の隅にまでゆき亘りしみこま乎にはをかないものであらう。

本書はさうした美しい親心の我が國の古今の詩歌、俳句に表現されたものを丹念に拾ひ出して編纂したものである。すなはち歌は萬葉の昔より現代に至るまで、同じく俳句は江戸より現代の新傾向句に至るまで、その外、明治以後の新體詩より、親心を初めとして、すべて兒童の愛らしさを唄ひあげたものを擧げて、その重なるものに編者の評釋を加へたものである。

卷頭に「日本詩歌と兒童」の一篇を置き、わが國の詩歌に於て兒童を對象とした作品に就て總括的な考察を加へ、以下

て終始してゐる。その作品には常に自然に對する佗しさ、人生に對する思ひやりが美しい感傷を通して語られてゐる。

これは日本文學の長い傳統である。氏が自然を愛する心は漂泊の詩人であつた芭蕉や西行の心と同じである。氏が人生に向ける愛は常に人生の片隅に忘れ棄てられた如き人物の怒り、悲しみを拾ひあげて來る。

從つて現代のやうに人間が塵勞の巷に自己を空しくしてゐる時代には、氏の文學は相當に縁遠いもののやうである。氏の作品が常に未だ豊かな空想力と素直な純情を失つてゐない青年子女の間に多くの愛讀者層を持つてゐるのはまことに自然なことであらう。しかし、自然と人生に對する美しい愛はつねに人間の心の一隅に滅びないで残つてゐる筈のものである。吾々はこの心を折にふれて温めてをかなくてはなるまい。而して氏の作品はこの美しい愛の故に誰からも愛せられてよいものであらう。

惜しむらくは氏はその豊富なる純情の滾々として湧きあがり来るものの核心を十分に把握して、これを整理された表現に盛るだけの豊かな才分に於て幾分缺けてゐるところがあるやうである。氏の作品が常に焦點を逸した憾みのあるのはこの爲である。しかし、これらの缺點にも拘らず氏の文學の藏する美しさは捨て去ることの出來ない存在である。氏は多作

を上下二篇に分ち、上篇は明治以前、下篇は明治以後に分ける。更に上篇は之を時代別に分け、下篇は學校、家庭、団旅、病兒等の主題により分類されてゐる。卷末に作者別の索引が添えられてゐるのも親切である。

(昭和八、一二、一四 厚生閣 四六判五〇〇頁 一・八〇)

日本和歌讀本

太田水穂著

著者は象徴歌風をとなへ、歌誌「潮音」を主宰する現歌壇の一方の雄である。

この本の「卷末に」といふところで、「太古素養鳥尊のお歌から筆をおこして、明治大正の新派和歌の盛んになつた今日まで、和歌の變遷を出来るだけ分かり易く書きつけました。この書物をお読みになる方は、日本の精神の骨髓とも申すべき和歌を通じて、吾々の祖先の思想、生活、戀愛等の細い素地を味はふことが出来るであります。言葉といふものゝ不思議なから、調べといふものの微妙な味ひ、物も言ひ様で圓くなり、四角になり、平面的にも立體的にも、露骨にも暗示的にもなるものだと云ふことが、この一冊をお読みになることによつて可なりはつきりとお分かりにならうかと思ひま

にもふれてとくといふ親切をしめしてゐる。

全卷二百五十頁ばかり、和歌史として、これほど短く、平易に、要をつくしたものは、おそらくほかにあるまい。初步のひとに最も適した本のやうにおもふ。たゞ最後に著者自身の象徴歌風を紹介し、和歌史のとどめをさしたことは著作の態度として遺憾があるやうにおもふ。一考を煩はしたい。

(昭和八、四 立命館出版部 四六判二五六頁 一・二〇)

歌話ご隨筆

窪田空穂著

歌壇の老大家窪田氏の「歌話と隨筆」集である。歌話は前著「短歌隨見」以後のものを主として集め、隨筆は前著「消燈前」以後のものを集めてゐる。

八代集選釋

久松潛一著

歌話は歌集及び歌評を主とし、その他折にふれて書いた短い論文、感想などであり、ただひとつ前著以前の筆による「作歌を始めた當時の思ひ出」といふ割に長いものが巻頭に載つてゐる。これは「序」にあるやうに、「明治時代の和歌史の一断片」ともいふものであつて、興味もあり、資料としても有益である。氏の歌話は流石に大家の面影をもち、片々たる感想も含蓄あり、味のあるものであるが、氏の觀賞批評の態度

す」とかいてゐる。それゆゑこの本は和歌の歴史によつて、日本人の思想、生活の歴史や言葉の歴史を知らせるに役だつといふわけである。思想、生活の方面はともかくとして、日本のことばを知るには和歌にしくものはない。この本によつて、日本のことばはいかに陰影に富んだ、含蓄の多いことばであるかを理解することができよう。ことばの變遷も窺ひ知ることはできようが、誰の目にもわかることは、その用ひざまであつて、歌ことばといふ大體の規準があるので、その變遷をこまかに知ることは容易のわざではあるまい。

おなじ「卷末」にといふところで、「萬葉集の歌の味ひ方古今集の味ひ方、新古今集の味ひ方と云つたやうな時代々々の觀照へのやゝ細かい心づかひをして書いてあるつもりであります。」といつてゐるが、さすがは現歌壇の大家とされてゐるひとだけに、歌の味覺はなかく確かなところをみせてゐる。それぞれの時代の歌風の特質といふやうなものをとらへ、要領よく解きあかしてゐるあたりは、かけだしのおよびがたい手腕をみせてゐる。

全編を七章にわけ、「紀記歌集に現れた古代の歌」から、萬葉、古今、新古今、室町時代、徳川時代、明治大正の和歌とし、選集はその成立から特色をのべ、歌の評釋をかゝげるといふ體裁であり、またそれぞれの時代の時代精神といふもの

は、直感より入るよりもむしろ觀念の境地にあつて、こまやかにものを見、味はふといふ態度であるから、これには異議、不満をもつ人もある。とまれ、一家の堂々たる風格を蔽してゐる。

氏の隨筆は歌人の微妙な觀察を示し、含蓄多く、珍重すべきものである。氏の筆はその歌風の如く素朴、枯淡なものであるが、むしろ歌よりもびくして、味が多い。しかし「春の來る惱み」などを読むと往時のみづくしい情感の豊かさを見せてゐて懷しい。

本書は全體として、軽いものであるが、よい趣味の讀物といへよう。

(昭和八、一、一四 一誠社 四六判四〇四頁 二・五〇)

八代集選釋

久松潛一著

八代集とは古今集、後撰集、拾遺集、後拾遺集、金葉集、詞花集、千載集、新古今集の八種の勅選和歌集を言ふのであつて、時代から言へば、平安朝から鎌倉時代にかけて出來たものであつて、平安朝及び鎌倉時代初期の和歌はこれによつて代表されてゐると言ふことが出来る。この中、古今集と新

古今集とは從來相當に多くの研究が出てゐるが、八代集を全體として考察したものでは北村季吟の八代集抄百八卷があるのみである。本書は久松潛一氏の監修の下に杉本長重、白石光邦、藤崎一史、井上豊の四氏が分擔して作つた現代の八代集抄であつて、各歌集から秀歌を選び出して分り易く説明したものである。

各歌集ごとに解題がつけてあつて、編纂された時期、撰者の姓名、履歴、歌集の形式特徴、現在流布してゐるその寫本の種類等に就いて、分り易く説明がしてある。

歌の説明は語釋、口譯、評の三部分よりなつてゐて、語釋では作者、地名、枕詞、その他難解の用語の説明がしてあり、口譯は歌一首全體の口語譯であつて譯の仕方は、字義通りに譯しただけのものではなく、歌の意が十分に分るやうに叮寧な説明がついてゐる。評の部は歌の出來た動機とか、その心とか、表現の旨味とかに就いて批評したものである。この三部は四氏のものいづれも親切叮寧であつて、初學者にも分り易い。

一例として杉本長重氏受持の古今集から一首とつてみると
さくらの花のちるをよめる 紀友則

久かたのひかりのどけきはるの日にしづく心なく花のちるらむ。

【語釋】 ○久かたの「天」「空」「光」その他、天に關する物事に冠

らす枕詞。○しづく心なく 落着かず、忙しくの意。○紀友則 宮内權少輔有朋の男。貫之と從兄弟である。延喜年中（醍醐天皇の御代）大内記となり、六位に叙せらる。此の集の選者の一人であるが、選の了へざるに先立つて卒す。三十六歌仙の一人。
【口譯】 日の光も長閑かにさしてゐる春の日に、どうして花だけは落着かず忙しく散つて行くのであらう。

【評】 これ又、春の光の中にすべてのものが融け込んでのんびりとしてゐるが、櫻ばかりはどうして忙しく散つて行くのであらうと、散り行く櫻に深い愛情の情を述べたのであるが、平明な中によくその情が表はれてゐると思ふ。それには、此の歌の韻律的な點が重要な役目を果してゐると思はれる。本歌は「百人一首」に入る。

（昭和八、二、九 大明堂書店 菊判二六六頁 二・〇〇）

歌集 青牛集

古泉千樺著

故古泉千樺の第三歌集である。千樺は安房の國の生れ、和牛のよく育つ、冬でも菜種の花が黄いろに咲きみだれる暖かい安房の國の人である。歌人としては伊藤左千夫の門下であり、「アララギ」に育つて來た人である。晩年、「アララギ」を

あることは云ふまでもない。

歌の世界は廣い。現代に於いても數多く歌の道がそれく人の人々によつて歩かれてゐる。しかしその道は數多いが多くの歌がいまもなほ閑人のもとそびものゝやうである。それは風流であり、姿新しき雪月花であり、雅びやかな氣品の世界である。吟むによく、愛誦すべく、色紙、短冊にしたためられるよい。しかし人の心にしみこみ、人の心をうつには力足らぬものが多い。

千樺の歌は静かに心で味つてみるべき歌である。人の心のたしになるものである。これは人生の世路艱難の歌である。

つゝましき正しき道である。

ねむりるる吾が兒の足のあたたかさ今は専らに眠らむわれもをさな兒を二人伴なひ湯にゆつ今年はよき年ならむと思ふ日曜の晝の湯に居りかよわかに娘のからだしみじみ見るも山びとが背に負ひ行く醤油樽しやうゆの搖るる音のしたしさ

軒低きみなどの宿につなげる牛わがふるさとに生れし牛多しあ（鹿野山）
(昭和八、二、二四 改造社 四六判四六四頁 二・五〇)

離れ、一時「日光」により、後には「青垣」を主宰してゐた。千樺の歌風は一言に云へば素朴であり、平淡である。同じく「アララギ」の同人ではあるが、齋藤茂吉の息づまる如き緊張味と大きさをみせる才分の豊かさではなく、島木赤彦のきびしい「鍛錬道」による手堅い、築きあげられた世界もない。千樺は自然に對しても、生活を歌ひあげても、溫和素朴にして淡白な表現をしてゐる。安房の國のなごやかな氣配がおのづからにして彼の人となりを作り、彼の歌を形づくるものと云へるかもしれない。

歌人としての千樺は花々しい人氣をもたず、同時に物質的にも恵まれなかつたやうである。「アララギ」を離れた晩年は殊に佗しかつたものゝやうである。その理由はいま問はずすれば歌集としても自選集「川のほとり」一冊が生前できたにすぎず、この「青牛集」も亦第二歌集「屋上の土」も死後の上梓である。

そのいづれを通讀しても、われくの受けるのは全卷を貫いてゐる佗しい、しづかなしかし生活にしつかりと向ひあつた感じである。それはきびしく魂に迫つてくるものではなく、魂を力強く握りしめてくるものではない。しかし静かにしみくと人の心にしみ入つてくるものである。

かうした歌風は千樺の性格が、その生活が醸しだすもので

芭蕉の研究

小宮豊隆著

小宮豊隆氏は東北帝大教授で獨逸文學專攻であるが、從來、藝術の諸分野に亘つて深い理解と鋭い考察能を持つことを以て知られてゐる。就中、芭蕉研究に於てはその一權威と謂はれる。本書は氏が大正十五年から昭和八年にかけ八年間に亘り發表して來た芭蕉に關する論文及びその他を一編めにしたものである。從つて一貫して芭蕉の全貌を描き出さうとした性質のものではないが、直ちに芭蕉俳諧の本質に侵透してその俳諧の高さ、深さを論じたものである。從つて芭蕉に就いて或る程度までの知識を得てゐなくては、理解に困難であると云ふ懸念もあるが、既に芭蕉に關する書物の數も夥しく出版され、可成り芭蕉は通俗化されており、芭蕉の眞面目を傳へんとした本書の如きが一般に讀まれることの方が望ましいと思ふ。

全部を通じて十六篇、卷頭の「芭蕉」は、まづ松永貞徳、西山宗因の俳句を引き、之を芭蕉と比較して、貞徳は俳諧に「おかしみ」と共に「品位」を求め、宗因は「おかしみ」に終始せんとし、而して芭蕉は兩者を渾一して正風の世界を開

拓したものであり、三者の比較は同時に俳諧發達の歴史を示すものとなすことに筆を起し、かくて俳諧の諸要素として俳諧と滑稽、俳諧の自由、新しみ、技巧、自然を論じ、終りにつてその俳諧の高さが導き出されたことを述べてゐる。

「不易流行説に就いて」及び「さび、しづくに就て」の二篇は芭蕉俳諧の本質を成すものとして、芭蕉を論する者のかならず觸れるところであるが、著者はこれを手軽に取扱はず、その直弟子達の文書を通してその意義を把握せんと試みてゐる。

「おくのほそ道」はその製作年代及び俳文としてのその形式に關する考察で、之を句集「猿蓑」と比較して、この半歳に亘る大旅行の記録が數年後に製作されたことを、「猿蓑」に掲載されたる句との相違、地名その位置の誤謬等より推定してゐる。

「芭蕉と蕪村」は正岡子規が蕪村に傾倒し、芭蕉を認めず、蕪村又芭蕉を殆ど顧みなかつたとなせる説を取り來り、その全く無根據の説なることを述べ、蕪村がいかに芭蕉を敬慕せらるか、又いかに蕪村の句に芭蕉の句の影響が深く入りこんでゐるかを數々の論證より説いたものである。

以上諸篇の外、「芭蕉の戀の句」「冬の日以前」「貝おほひ」

新俳文

高濱虚子著

「芭蕉の南蠻紅毛趣味」その他があり、なほ附録として「蕪村書考證」「西山宗因に就いて」「宗因の飛鳥川に就いて」の三篇が附えられてゐる。

(昭和八、一〇、五 岩波書店 菊判五〇五頁 三・二〇)

日本合戦譚

菊池寛著

著者が最近雑誌「オール讀物」に連載した合戦譚十三篇を集めたものである。

内容は姉川合戦以下、嚴島、川中島、桶狭間、田原坂、長篠、賤ヶ嶽、山崎、碧蹄館、島原、鳥羽伏見、大阪の「陣の諸合戦」を取扱ひ、大阪の陣は、とくに「大阪夏之陣」「真田幸村」の二篇になつてゐる。

何れも合戦當時の事情、武將の人となり、合戦の模様等を然るべき資料によりつゝ、しかも氏獨特の直截簡明の筆で、面白く描き出してゐる。尤も資料の正否に就いては、嚴密に言へば問題もあるであらうが、然し小説家としての著者の洞察力と自由な叙述は合戦の模様を目前に彷彿せしめ、武將の心事を窺つては、その眞面目を紙上に躍如たらしめてゐる。所々に見られる人物評も新奇な解釋を加へてゐるわけではないが、仲々興味がある。面白い歴史讀物として推薦したい。

(昭和三、九、五 中央公論社 四六判五二一頁 一・五〇)

明治俳壇の傳統を守る高濱虚子氏の「人生を諷詠した短い文章」を集めたものである。

日常身邊に起る事柄を平淡な筆致をもつてスケッチしたもののであつて、いはゆる寫生文であり一時明治文壇に流行した小品文の類ともいへるものである。氏は「斯んな文章も俳文といつてよからうかと思ふ。」といつてゐるが、もちろん「俳句は花鳥諷詠詩」を主張する氏の俳文と見るべきものであらう。讀者は春風のそよふくところ、うつらうつらと夢心地を感じるでもあらう。水彩畫家のスケッチブックを繰りひらき眺めるやうな印象の淡いのどかな心地で、われわれはこの一とすれば、かかる文章もまことに俳文たるの名にそむかぬものであらう。とまれ、現代のごとく、あくどい文章の満ちあ

長篇 少説 姉は闘ふ

エレナ・ボーテー著
村岡花子譯

この一冊は、謙虚と犠牲の精神で生活と闘つた「スウ姉さん」の話で、いつもながら優しいエレナ・ボーテーの著述である。「スウ姉さん」とことスザン・ギルモアはピアニストとして豊かな天分を恵まれてゐたが、十四の時に母を失ひ、二十の時に父の事業上の失敗に遇つて巨萬の富を失ひ彼女は今迄の華やかな生活と音楽家としての輝かしい希望をかなぐり棄て、一意専心家政挽回の爲に人世の荒波に乗り出さなくてはならなかつた。富裕の生活に馴れた弟と妹の我儘は、唯姉を利用する事より外を知らなかつた。事業の失敗の爲に頭の狂つた父親はその聲を聞くだけでも彼女には悲しみの種であつた。その上、嘗ては彼等親子に阿諛の限りをつくした人々へ、今となつては手のうらを返す様に、彼等親子を路傍の人としてより以上には扱はなかつた。此等、二十の身空には堪え難い数々の重荷を負はされて人生にスタートした彼女であつたが、「スウ姉さん」は一言の不平も不満も云はなかつた。それは苦しい境遇に壓倒しつくされて首を擡げる事が出来なかつた。

爐邊夜話

乾信一郎譯

つたのではない。不平や不服の百千萬言が實際の仕事には何の役にも立たない事を怜悧な彼女はよく知つてゐたからである。そして唯實行、次から次へと出會する苦しみを、巧にさばいて新らしい生き方を見出して行くのである。世には彼女と相似した境遇に置かれた幾人もの「スウ姉さん」が居ることゝ思ふが、本書はそれ等可憐な生活を生活しつゝある若い女性への味方であると共に、より樂しい生活をなしつゝある人々には、新らしく「スウ姉さん」を心の友として頂き度いし、より苦しい生活に在る人々への心の慰めともならうかと、ここにこの物語りを推薦する次第である。不平よ去れ、いきどほろしく人の世を呪ふなけれ。そして明かに漫遊として生活を樂しまれ度い。それがこの書の著者の心でもあらう。

(昭和七、一一、三〇 教文館 四六判三〇九頁 一〇〇)

動物小説集と傍題がある。動物の生活に見られる種々の挿

話を小説風に書いたものである。

象仲間の王子の生ひ立ち、子狐を外敵に襲はれる親狐の心配、子豹のために猪の大群と戦ふ母豹、大齧に警められた紅樹の発見、卵泥棒にされた小犬の冤罪、お邸を出て仲間と交際する飼猫、抹香鯨の生活、狼を逃れる銀狐、置時計に苦しめられる子狐、他の鳥の生んだ卵を育てる駒鳥、どうしても死なゝかつた猿、飼はれて犬になつた熊の話など十五の短篇を集めてある。原作者はそれ／＼異つてゐるが、何れも大體同じ傾向の軽い物語りで、別に人生に對する諷刺などを意圖したものではなく、極くあつさりしたものである。譯筆も亦軽妙で、爐邊ばかりでなく銷夏の讀物としても恰好のものであらう。

(昭和八、三、二〇 春秋社 四六判二六三頁 一・三〇)

詩 經

岡田正三譯

詩經は既に孔子以前に於て何人かによつて編輯されてゐたもので、孔子は之を修正したものであると云はれる。即ち周代には朝廷に采詩の官といふものがあつて地方を巡回して各地に行はれてゐる詩を採集し、是を民俗の良否、政治の得失を知る材料に供した。又朝廷に仕へてゐる公卿大夫等が詩を作つて朝廷に獻上した。又朝廷の祭祀に當つて音樂に用ふるために作られた詩があつた。そしてこれらの詩は大師といふ官があつて掌つたものである。從つて詩經を大約三百篇ばかりに編輯したものはこの周室の大師であらう。而して孔子時代に至つて詩經に錯亂した點があつたので孔子が之を整理したものであるといふのである。いづれにしても詩經は殷より春秋時代に至る上下六七百年の間に黃河流域に花ひらいた支那上代の文化の精粹と云ふべきものであつて、わが國の萬葉集とならんで東洋における最古の二大詩篇と云はれる。しかし何分にも現代人とは縁遠い漢文であるから一般人には接しがその邦譯を出版されたのは誠に喜ばしいことである。然も譯者は漢文の反り読みが誤讀や無理を伴つて、文章の持ち味の理解を困難にするは勿論、文意を止しく把握することさえ出来ないものにするとして、音讀法を主張し、以て古典の正しい姿を日本文で同胞に示さうとする意圖をもち、その第一

として詩經に着手したと云ふのであるから、以てその價值を知ることが出来る。本譯書は詩經の内で國風篇のみを扱つたものである。國風篇はかの採詩官が地方から、採集したものであつて、各地方で愛誦された民謡である。素朴なる情感に満ち満ちたものである。譯者の巧みな邦譯によつて、それらの凡てを今や我々のものとすることが出来る。いま戰陣望郷の歌の一節をひいてみる。

はげたる山 陟 岐

はげたる山に

陟彼岵兮

父曰嗟予子行役

父をおもふ

瞻望父兮

父言はむ「あはれ吾子戰に出でね

夙夜無已

あしたに夜半に暇なけむ

夙夜無已

慎みて

上慎旃哉

捕はるなけれ」と。

猶來無止

(昭和八、二、二〇 第一書房 菊判三二六頁 二・五〇)

英米文學の背景

日 高 只 一 著

本書は著者が今より十年前の英米文學に關係の深い名所舊蹟を遍歷した際に出來た記録を一巻に纏めたものである。

英 文 學 散 策

平 田 穴 木 著

の終焉の家、又は農民詩聖バーンズの故郷なるスコットランドのエヤ、更にスコットの生地エデンバラ等、その外キーツ、シェレイ、ラスキン、バイロン等の詩人文豪の遺蹟があげられてゐる。英米文學に興味を抱く者の一讀を勧めたい。

(昭和八、三、二八 四條書房 四六列三八五頁 一・八〇)

てゐるもの由、有名なウォルトンの「釣魚大全」をも併せて述べてゐる。

英吉利の旅の一篇では英吉利の田舎のなごやかな町々のことが書いてある。寺町、海岸町、温泉町など、いづれも古い、長い歴史を背景にひいてゐる落ちついた町々のことが伸々とした筆致で述べられてゐる。

沙翁とオックストフォード伯は沙翁なる人物は謎の存在であると云ふ説を否定し、沙翁とはベーコンであり、又はオックストフォード伯あるといふ説に對し、その蒙をつけ、沙翁はエーボン河岸ストラトフォード生れの男であると結んである。牛津大學の一篇は人格教育を眼目とする英吉利の大學の、特にこの傳統古く、數多くの偉人を出した牛津大學の生活が述べられてゐる。嘗て同大學に御在學らせられた秩父宮殿下はこの一篇の書かれた頃、御入學に決定あつたのでそのことにも觸れてゐる。

その他、ジョセフ・コンラッドのこと、前桂冠詩人オースチンのこと、現桂冠詩人ブリジスのこと、又はエトマンド・ゴス文庫のこと、ノベル賞授與式のためストックホルムへ旅行したイエーツのことなどが述べられてゐる。いづれも落ちついた筆致を以て書かれており、愛讀すべき一本である。

(昭和八、四、一〇 第一書房 四六列三九九頁 一・〇〇)

米國より始まり、英國に至り、更に歐洲大陸に及んで、英米文學に現はれる文豪の舊蹟が、まことに丹念に訪問されてゐる。流石に英米文學に造詣の深い著者の筆になつたものであるから、單なる旅行記とは違つて、觀察の綿密さ熱心さが、飾り氣のない淡白な文章を通じてうかゞはれる。特に著者が文豪の遺蹟を訪問する際に示してゐる刻明さ、丹念さは全く敬服に値するもので、英米文學に傾倒することの深さを充分示してゐる。僅かの時間を少しも空費せずまさに足まとめて、遺蹟を歩きまわり、文豪を偲び、低徊去る能はざる感懷に耽つてゐる。行文は淡白で、描寫は甚だ刻明である。ために遺蹟の有様など手にとるが如く描かれてゐるが、所によると少し書すぎの感がないでもない。

米國ではコンコードにエマソン、ホーリー、ソロオの家を訪ね、紐育のボウ公園にボウの小屋をみ、ボストン郊外ケムブリッヂにロングフェローの遺屋を尋ねてゐる。英國では初めに倫敦の街々を埋める晚秋の濃霧の話が語られており、シェイクスピアの生地ストラツォード訪問、ロンドン塔見物の丹念な描寫があり、湖水地方へ移つてはライダル湖畔なるワーヴィス終焉の家、コレルリッヂやサウザの住んでゐたケジック、又はエックレフエカンのカーライル誕生地、その生家、その墓、或はロンドン郊外チエルシイのそ

英 文 學 散 策

平 田 穴 木 著

これは平田禿木氏の英文學を中心とする高雅な隨筆集である。一九一二年といふ古い時代のものもあり、約二十年に亘る間に出來たものでありいづれも粒選りのものである。いまその二三をあげて紹介してみたい。

アニックの城下版「魚鑑」なる一篇があるが、この中でロイド・ハバレエといふ詩人のことが書いてある。この男はオックスフォード州の寂しい一隅に、自分で小さな家を建てて住み、奈翁時代の古い印刷機を一臺、道具屋の店から大枚壹志で買ひとり、村の鍛冶屋に修繕させて据えつけ自分の詩の植字、印刷、製本を獨りで片づけて面白い小冊子を次から次へと出してゐるといふのである。この「魚鑑」もさうした種類のものらしい小型袖珍版で禿木氏は座右において愛玩し

ゲーテの生涯

中島清著

わが國で出たゲーテ傳は數すくないが中島清氏のゲーテ傳はほど興味深く平易に書かれたものはない。よい意味での通俗ゲーテ傳である。唯が讀んでも、詩聖ゲーテがどんな生涯を送つたか、どんな思想を抱いてゐたか、どんな立派な作品を書いたかを容易に知ることが出来る。

昨年三月はゲーテの百年忌であり、世界各國に於てゲーテ百年祭が行はれ、わが國に於ても種々の記念事業が行はれて、ゲーテの名は一層親しまれることになつたが、ゲーテは獨逸文學において最高峰を占める作家であるのみならず、沙翁、ダンテとならんで世界的文豪であり、その作、「ファウスト」は人間の魂が築きあげることの出來た最も優れたる一大記念塔である。沙翁は千人の心を持つてゐたと云はれてゐる。しかしゲーテは小宇宙であると云はれる。すなはちゲーテは人間の具へ得る凡ゆる性格と才能を一身に抱擁してゐた巨人であつた。世界的な名聲を獲得してゐる文豪は甚だ數多い。しかし多くは大抵ある一點に於て深く掘り下げた人達であつて、ゲーテの如く多方面に深く進んだ人は稀である。従つて

ゲーテの作品はあらゆる人を受け入れることが出来る。必ずや何人でも自分の影を彼の作品の中に見出すであらう。しかもゲーテはその作品の凡てを通じて理性と本能との美しい調和を描いた。大いなる自然の中に同化して悠々と生きることを念願とした。これは東洋人の氣魄であるが、ゲーテは實によくこの境地に到達せんとした稀なる西歐人である。ゲーテは西歐の他の諸作家より多くわが國人に親しまれてよい。本書はその道に於てよき案内書である。廣く繰返して讀まれんことを希望して止まない。

(昭和八、一 四條書房 四六判五七五頁 一・八〇)

え・び・や・ん

辰野隆著

本書はさきに隨筆集「さ・え・ら」を出して好評を博した著者の第二隨筆集といふべきものである。フランス文學に味到するところ深き著者の筆にはフランス風の明暦とユウモアが多分に含まれてゐることは已に定説の如くであるが、氏の文學者としての教養と批評精神が本書の如きに於ても顧みられなければならぬ。

本書には先づ文藝論致として「佛蘭西古典主義文藝」に對

する理解が示され、斯文學の花盛りの時代ともいふべき十七世紀中葉ルイ十四世盛期の文學を論じ、古典主義文學の精神とその巨擘の傑作について深い洞察が下されてゐる。次に「現代佛蘭西文學管見」には國民的作家モオリス・バレスを論じ、「現代佛蘭西文學の一瞥」には、ボオル・ヴァレリイ、ボオル・クロオデル、アンドレ・ディド、マルセル・ブルースト等現代の最も新鋭なる作家、詩人、批評家が紹介されてゐる。更に佛蘭西作家の人物評論としては「モリエール瑣談」「ボードレエル」「フロオベルの風貌」「アルチユウル・ランボオ」「ジュウル・ルナアルの目」「ジヤン・コクトオ」「アルベール」

チボオデ」等に亘つて漫談調をもつて興味深く説述してゐる。著者はこれらのゴーク精神を説くに當り、日本精神を對照し、日佛文學者の對位點を擧げて、今迄の外國文學者の試みなかつた興味を喚起することに成功してゐる。

「舊友潤一郎」その他の隨筆雜感の類も、これまた著者が興に乗じて筆をとつたものであるだけ、朗らかな面白いものである。また「日佛文化接觸の跡」「若い女性に持たせたい知識と讀ませたい本」等に窺はれる著者一家の見識は吾々に啓示するところ少なくない。

(昭和八、四、二〇 白水社 菊刊三一五頁 二・五〇)

柳澤健著

日本發見

經濟學博士 林癸未夫

本書は外交官として多年フランス、メキシコ等に駐在してゐた著者が過去數年間に日本の雑誌新聞等に寄稿した感想

第八 論說・隨筆

ふにそれは著者の性情の然らしめるところでもあらうが、一つには彼が大戦後のフランスに長く滞在してゐたためでもあらう。何故なれば大戦後の世界の政治的及經濟的動向を支配しつつある思想的潮流はナショナリズムであるが、フランスに於ては殊にこの傾向が盛んであるから、そこに長く滞在してゐた著者としては、必然それから強い影響を受けないわけには行かなかつたであらうと想像されるからである。

本書中の最長篇で、しかも私が最も興味深く讀んだものは「シヤルル・モーラスと現代」と題する一文である。これはフランスの王黨の理論的指導者たるモーラスの思想を紹介したものであるが、それを一言にしてつくせば、君主制をフランスに復興することによつて民主主義と金權政治の害毒から祖國を救はうとするものである。民主主義は常に必然的に金權政治に終り、更に專制政治、武斷政治にも移轉する。實に世に民主主義ほど社會不平等の種子を植ゑ付けるものはない。然らば何うすればこの民主主義を排除することができるか。王の親政こそこれである。王のみが一視同仁の政治を爲し得る。王のみが金權政治を專制政治を武斷政治を芟除し得る。王のみが國家全般の利益を體現し得る」といふのがモーラスの中心思想である。

卷頭の二篇「日本に歸る」及「日本發見」は海外から久振

りに歸朝した著者が、祖國の人事、風物に觸れた刹那の感想を隨筆的に書き流したものであるが、そこにも著者の國粹主義的な氣持ちが到る處に發露してゐる。「我等が郷土を愛するのは、あるが儘の自己を愛することではない—傳統と歴史との堆積である自己を、その傳統と歴史とを描いて郷土を愛することは過去の歴史に於いても多く無かつたのだ、眞に賴み得るものとは、生きた人間には到底爲し得ない放れ業である」といひ、「我國人が今日ほど強く深く自己認識を強ひらることは、生きた人間には到底爲し得ない放れ業である」といひ、「亞米利加渡來のジャグとカクテルで、さては露西亞渡來のウツツカやバンフレットで、どんなに裏面は變るやうに見えても日本人は結局日本人である外はあるまい」といふやうな辭句は、飽くまで祖國の傳統と文化とを擁護宣揚することを目的とするナショナリズム運動に、著者が深い關心をもつてゐることを示すものである。

著者は、だから、ナショナリズムを否定し「プロレタリアに祖國なし」と主張する共產主義に對しては同情をもち得ぬ人であるらしい。著者自身が直接に共產主義を批判した文章は見當らぬが、併し「同志マリオンの轉向」や「イストラチの見たU.S.S.R.」等を讀むと、ソヴェート・ロシアの現状

に愛想をつかして共產主義を排棄するに至つた人々の轉向理由が詳に紹介されてゐる。吾々はそれによつて著者の意思を忖度することができる。

「東西兩文明の相剋」と題する長篇は、大戦直後西洋文明の没落を説き、印度及支那によつて代表される東洋文化に救ひを求めるようとしたスペングラー・カイザーリング等に反対して、ギリシャ・ラテン文明の優越性を指摘し、歐洲人は飽くまでも西洋文明の傳統を固持すべきであると主張したヴァーリーの「精神の危機」やマッシスの「西歐の防禦」の内容を紹介したものであるが、こゝにも他力本願を排し自力更生をモットーとするナショナリズムの聲を聞くことができる。

たゞ吾々に聊か物足りなく感ぜられる點は、外交官たる著者から本書を通じて一片の外交論をも聞くを得ないことである。殊に大戦後の外交の権軸とも見るべき國際聯盟が明白にインター・ナショナリズムを振りかざして、事毎に列國のナショナリズムと衝突し延いては日本をして聯盟脱退の已むなきに至らしめた今日であるから、ナショナリストとしての著者は是非一言なかるべからざる場合であると思はれるのに、本書にそれが見出せないのは不思議である。だが「ルネツサンス途上の日本」と題する一文中には、フランスの記者リオーテーが滿洲事變に關聯して、さんぐ國際聯盟を罵倒した文

章の梗概が紹介されてゐるから、著者はこれによつて自分の外交論を代辯させるつもりであつたのか知れない。

(昭和八、八、二〇 日本評論社 四六判五三三頁 二〇〇)

日本新聞紙の研究

上 西 半 三 郎 著

本書では新聞を定義して「多數人に利害關係又は興味ある社會百般の現象に關する報道を出来るだけ早く印刷し毎日周期的に一般社會人に賣却配布するゝもの」としてあるが、この近代的意味での日刊新聞の最初は、外國では一七〇二年創刊の英國のデイリー・クラントと聞いてゐるが、我國では明治三年十二月創刊の横濱毎日新聞である。が創刊當時の之等の新聞と、今日我々が生活の必需品として見る新聞とは、その形式内容や經營法に於て全然別個のものと云つてもよい程の相違がある。その爲め本書では創業期の新聞紙については餘り觸れず、主として現代の、然も日本に於ける大新聞を基礎として、その組織機能について解説を試みてゐる。

先づ全篇が三つに大分けがしてある。第一は「新聞の研究と理法篇」で、之は實際の新聞に就いて述べる前に豫備知識として必要な新聞一般に關する稍々、學問的な考察で新聞の

をねらつて、ねらひ中てた感がある。

(昭和八、五、一〇 大阪毎日新聞社 四六判三六五頁 一・六〇)

雲 莊 隨 筆

入 澤 達 吉 著

定義、新聞研究の歴史、新聞科學の體系、新聞價值、新聞の指導意識、新聞機構の展開等比較的面倒な問題が僅かの頁の中に壓縮されてある。或は之を序論と見てもよからう。次は「日本新聞説明篇」で、一口に云へば新聞の「種」から「配達」まで、今日あらゆる出版界印刷界のトップをきつてゐる新聞事業を、現在日本の代表的な日刊新聞について、新聞社の組織、新聞記者の生活、新聞の編輯、發刊、經營狀況等を相當詳細に、殊にその編輯に關しては、例を既刊の何年何月何日新聞の某記事と明記して採用し、説明が加へてある。

第三は「日本の新聞展望篇」で、こゝには主として新聞を一つの事業として外部から觀察した發達史、現在日本の新聞の發行量と購讀力、言葉を代へれば新聞の全國への分布密度、及新聞關係の法規集等であるが、この本の主力は何と云つても第二の篇に注がれてゐる。

著者は長年（序文によれば二十年に近い年月）大阪毎日の記者として活動して居られる人で、本書は「日本のインテリ階級の人々に對して、新聞の何たるかを説明せんが爲に、また、新聞界に活躍せんと志す青年諸君に日本新聞界の現状を提唱せんがために」著はされたもので、興味本位のものはなく、地味な著述ではあるが、如何にも新聞マンらしい新鮮さと要領のよさがあつて、インテリ及新聞界に志す青年諸君

著者は前侍醫頭、東大教授である。本書は數年間にわたり新聞、雑誌に發表されたる隨筆その他を一巻にまとめて上梓したものである。雲莊は著者の雅號である。

文筆を業とする所謂文士以外の人で、一道を究めたる人に隨筆を書かせる試みを流行せしめたのは文藝春秋社であるが、文士の振幅の狭い生活からでて来るものと異り、各人それなりの専門の領域を土臺とする隨筆はその味を異にする面白味があり、又流石に一道を究むること深い人には自からにして具はる物の見方の深さ、心構への良さがその行ににじみ出て、まことに優れた讀物が多い。

入澤博士は特に文筆に巧みであつて、いかにも伸々とした描寫である。主として醫學方面のもの、交友關係のもの、紀行が多いが、卷中の白眉は「明治十年以後の東大醫學部回顧談」であらう。

吉野作造著 閑談の閑談

法學博士 尾 佐 竹 猛

通のことなどがあり、「汽車の無いころの旅」と題する上越の旅、信州の旅のことなどがある。氣品あり、ユーモアあり好箇の讀物として大方の一讀を勧める。

(昭和八、四、一五 大畑書店 四六判三九九頁 二・〇〇)

この回顧談は明治十年より十二年に至る間のものであるが、當時の學訓、教授、學生々活、本郷風景等が科學者らしい克明さを以て描かれており、一脈のユーモアを以て貫かれまことに一讀卷をおくことが出来ない。二三を引いてみれば東京大學醫學部總理及教員及學生の表があげてあるが、教員は總理、總理心得以外は全部ドイツ人である。明治十年の學生には三等本科生として森林太郎、四等に青山胤通などの名がみえてゐる。

又當時醫學部豫科の學生は必ずしも醫學を志さず、中途他に轉するもの多く、教育家として有名な湯原元一、明治の作家廣津柳浪などが豫科の學生であった。東京大學が帝國大學と改まり、總理が總長となつたは明治十九年三月一日の事であり、角帽は明治十八年に大學を出た工學士和田義睦の考案である。又現在のローマ字會は明治十八年田中館愛橘、寺尾壽等により起され著者も之に參加してゐる。その他本郷を中心とする當時の學生の無邪氣な生活はまことに面白く書かれてゐる。

その外、「打診四十年」と題するものには醫者と患者の互の認識不足による苦情や不平のこと、醫者の所謂巧拙のことなどが面白い例をあげて書かれてゐる。人物傳として雲井龍雄のこと、リープクネヒトのこと、シヤミツソのこと、青山胤通のこと、

我が邦の思想界に巨大の足跡を印した故吉野作造博士の達意の文章は、深き文學的素養のあることを知るものは少いが、そは新井白石の『折り焚く柴の記』に負ふ處が多いとは、博士が自ら語らるゝところであつた。

博士の幾多の著書のうちで「主張と閑談」と題したもののが何篇かある。それは、自分は緊張した氣持で論する場合と伸びりした氣持で、肩の凝らぬ談をして見たいときもある、といふので、前者が所謂吉野民本時代の勞作であり後者が文學的部分で、主として明治文化に關するものである。

世には博士の所謂民本時代の華なる方面的のみを見て、その反面たる閑談の部分を知らないものがあり、よしやこれを知つてもその價値を知らず、甚だしきは、その爲め主張の部分の

研究を阻害したかの如く誤解するものもある。が、寧ろ博士の本領は、この方面にあると觀る方が適當でありその業績から見ても、決して民本時代に劣るものではない。

博士のこの方面的勞作を蒐め、博士の全貌を知らしむる好著に『閑談の閑談』がある。這是木村毅君が、數多き博士の著編の中から選み出し、裝幀は、その道に異彩を放てる齊藤昌三君が、博士の氣分に副ふやうに苦心したのである。博士も定めて地下に微笑まれて居るであらう。

内容は五部に分れ、第一部は文化篇で、主として明治文化に關するもの、第二部は文學篇で、明治文化の派生的研究で、文學氣分の濃厚なるもの、第三部は思想篇で、明治政治史に關するものを主としてある。第四部は回顧篇で、博士の少年時代から先輩知友に付ての追憶であり、第五部は隨筆篇で以上諸篇に關する閑談集である。これに依り、博士の生立から、その風景を知り、深き研究と博き學識とを遺るに豊なる文藻を以てせる名篇を味ひ、併せて、民本主義の片鱗をも知るに足るのである。幾多の雄篇大作を除きて、珠玉の片屑を集め、この著をなした木村君の苦心の一通りでなかつたことは想像に餘りある。

明治政治史、明治文化史の研究には缺くべからざる必讀の書なるのみならず、單なる隨筆集としても博士の所謂肩の凝

らぬ書として興味津々手巻を描くに忍びざるの好著である。この書と殆んど同時に博士の遺族から出版せられた書に『古川餘影』(古川とは博士の故郷の名から出た雅號である)がある。略ぼ同じ目的で編述せられて居る。併せて讀まば獲る所が多いが、惜しいかな、此書は非賣品である。

いづれ、博士の遺著若くは全集といふ風なものは幾多出ることゝ思はれるが、『閑談の閑談』は、その中の最も勝れたる編述として、これを江湖に推薦する。

(昭和八、六、二五 書物展望社 四六判四一二頁 三・〇〇)

弘堂講話集

林毅陸著

本書は主として公民教育又は青年教育の目的を以て書かれたもので、例へば「獨立と協力」「精神文明と物質文明」「社會聯帶」「福澤先生と教育」「青年の二つの進路」「兵役義務と勞力義務」等々は青年に對する訓話で、何れも輕佻浮薄を戒め、形式主義を排し、あくまで實質的に、剛健に現代青年の従くべき道を教ふるもので、そんなことは分り切つた事だと一笑に附しようとする讀者もあるかも知れぬが凡そ世の中は分り切つたことが分りきらぬのが一般で、云はれて初めて首肯け

る筋も少くはない。所謂反省と云ふ事は多くは分り切つた事柄に起るものである。その他「政治の見方」「國民政治の本義」「政治教育」「貴族院の大使命」「暗審制度の運用」等、外交問題を論じたもの、例へば「屈辱の平和偶然に非す(日露戰爭)」「巴里媾和會議と日本」「國際民主主義と國際協調」「聯盟脱退は世界脱退に非ず」等が含められてあるが、政治外交、社會を論じたものの中には明治三十年代の古いものも數個収録されてある。全卷は六十三篇、之に別集として七篇が附せられてある。内容は都會の青年にも、農村の青年にも向く一般的のものである。一讀を薦め度い。

(昭和八、五、二五 高原書院 四六判六二一頁 一・八〇)

師・友・書籍
小泉信三著

「小泉信三君は、専門學術上の論文發表には不斷の努力を惜まないが、専門以外の事になると、みだりに他を評しあのれを語ることを爲さず、悔を後日ににこさざらんことを期すものゝやうである。」とは、本書の卷頭にある水上瀧太郎氏の序の一節であるが本書は篤學な經濟學者小泉信三氏のめづらしい隨筆集である。

本書のなかに、「讀書と文章」と題し、「年少學生の爲めに」文章について語つた一文がある。そのなかに、「私の最も好むのは、簡素明晰の文章である。併し、簡素の一時は、實は最も苦心を必要とする。タレインアーヴィングであつたか忙しいから簡潔には話せないと聞いたことがある。誠に然りで、よく物を考へないで書いたりしやべつたりすると冗長になる。簡潔な文章を書く人は、少くも自説に確信を持つて書いてゐる人だと思つて間違ひない。之に反し論争文などでグラーグ長く、且つ餘計な相手の個人攻撃などする者があるが、あれは自分の意見に確信のない場合にするのである。馬鹿に見られたくない人間のする事でない。」といふ一節がある。この一節は、ことばそれ自身がわすれがたいおもしろみもつてゐるばかりでなく、よく著者小泉氏の文章と人となりとをあらはしてゐるとおもふのでひいてみたが、氏の文章は確實明晰といひたい文章である。簡素といふ語感よりか確實といひたい。それほどにがつちりと明晰な文章をかかる。氏の人となりや學者としての風格もそのやうにおもふ。

とくにこのやうな文章論がみられるほどに、氏は文章に注意を拂つてゐられることは本書をよんでもよくわかる。學術論文などにもそれを窺ふことができる。本書のなかに「我が愛讀書」といふ一章があつて、そのなかで、マルクス・露伴。

鷗外の著作について語つてゐるが、主として文章のうへから語つてゐるといふ風である。

みぎによつて知ることができるように、著者は一個の名家であるが、十いくつの題目でかかれた本書は、またとえがたい實のある隨筆集である。卷頭の「福澤諭吉傳」は本書の三分の一ちかくをしめてゐる唯一の長篇であつて、その他はみな短いものばかりで、そのうち目ばしいものをあげてみれば、「新聞紙と個人の名譽」、ショウのマルクス批評を紹介した「文學者と經濟學」、カツセル、福田徳三その他經濟學上著名の數人をあげて名著を紹介した「經濟學學習書」、著者のマルクシズム批評の概略を知らした「マルクシズム評論概要」といふやうな堅くるしいものや、「開戦當時の柏林日記」、「横濱」、「學校とスポーツ」といふやうな軽いものがある。

それらはいづれもためになるもの、おもしろいものであるが、とくに「福澤諭吉傳」についてひとことかきたい。いふまでもなく福澤翁は著者のつとめてゐる慶應義塾の創設者であり、明治文明の先覺者である。本書の傳記は傳記として決して長いものではないが、著者が丹念に研究したものを、いかにも整然とまとめたもので、著者の福澤觀がはつきりしてゐるし、福澤翁の眞骨頂といふやうなものにもふれてゐるやうにおもはれる。福澤傳としても最も短い、最も要をえたものにおもはれる。

のではないかとおもはれる。これだけでも一讀をすゝめたい氣がする。

(昭和八、六、二〇 岩波書店 四六判三一四頁 二・〇〇)

のんびりした話

森田草平著

作家森田草平氏の隨筆集である。「自序」によれば「私が大正から昭和にわたつて、その時々に書き捨てた感想、隨筆、評論（専門的評論と文藝時評とを除く）の中、あまり意に満たないやうなものを除いた大部分の文反古を集めたものである。」

従つて題目は種々雑多であるが廣く世態人情に關する隨筆と、文學に關する評論とに大體分けられる。

卷頭の「のんびりした話」以下「就職世相」、「六文人の横顔」、「師弟の情誼」等々、それぞれおもしろをかしく、味をもつて讀ませる。「師弟の情誼」は、故夏目漱石と門下生との間の、世にも珍らしい濃かな情誼を語るものであるが、美しいほど懐しい氣のするもので、ほんとうの教育關係といふものは、かういふものでなければならんやうにおもはれる。

それらに見る著者の筆は、軽くのびのびしてゐるのである。

人・世間・自然

相馬御風著

都塵を避け郷里糸魚川に退住すること十五年、然も良寛の詩境を探り、芭蕉、一茶を語り、愚人を傳し、筆硯愈々圓熟しつゝあるものは我が御風氏である。

本書は最近五年間著者の個人雑誌に掲載された感想隨筆集で、長短合して三十有餘篇に及んで居る。

各篇は夫々讀切りとなつてゐるので、そこに何等の連絡はない特に一言したくおもふのは、「瀕死の白鳥」と「鶯娘」についてであるが、これは舞踊家アンナ・バブロヴァの所演を見て、西洋の踊と日本の踊との比較を語つたものであるが、その觀察が如何にも緻密で、専門外のことについても、流石は藝術家の眼を働かしてゐるものと感心させられるのである。

總じて何れを讀んでも、著者の風格を見ることが出来、おもしろくて、實になる讀物として推奨することが出来る。

(昭和八、五、二〇 大畑書店 四六判四二二頁 一・八〇)

この他世相を論じたものに「釣る者と釣られる者」「自信な

き現代」「この世相!」等があり、追憶談としては「乃木さんのおもひで」「杜翁追憶」「峩山禪師の侧面」「お伽式の一生」「ここは御國を何百里の作者」等があり、何れも著者の面目を十分に表はして居る。

大要右の如く本書は單なる読み物と云ふよりは修養書として一般に推奨したい。

(昭和九、一、一五 厚生閣 四六列三六四頁 一・九〇)

百鬼園隨筆

内田百間著

内田百間氏は東大獨文科出身で陸海軍の諸學校其の他に教鞭をとつてゐるが、一方漱石門下として優れた文筆の士である。その創作、隨筆は所謂文壇の境外にあるので比較的一般に知られてゐないが、極めて優れたものであることは一部具眼の士により夙に認められてゐる。本書は氏が從來諸雑誌、新聞等に發表してきたものを一本に纏めて上梓したものであつて、三十六篇を收めてゐる。

全卷を貫いて流れるものはいかにも洒脱な雰囲氣である。これは所謂ユーモアとはすこし異つたもので、もすこし、根強い、底力のある、手堅いもので、著者がユーモアを語り出

さんとしたものでなく、著者の全身がそつくりにじみ出ているのであつて、すべての物の觀方、考へ方に常識的でない、美しい、良いものが張つてゐる。

而してこれを描くその筆力はいかにも正確な寫實で、たゞみこんで行く程の刻明で、丹念な描寫であつて、著者がいかに優れた筆を持つてゐるかは二三頁読みつゞけて行くと直ぐ讀者を貰の中へ惹きこんでしまひ、著者と一體になつて物を考へ、物をみてゐる感じを與へることである。

表題にはなかく奇妙な名がつけられてゐて例へば貧乏五色揚、七草雜炊、阿呆の鳥飼、無恒債者無恒心、間抜けの實在に關する文獻等があるが、必ずしも表題の如く内容も間抜けてゐる譯でない。しみんと人の心に沁みこむ美しさがある。その一篇々々がよく味つて讀まるべきものである。

(昭和八、一〇、二〇 三笠書房 四六列三五〇頁 二・五〇)

發行所一覽 (五十音順)

一誠社	岩波書店	大畑研究社	大村書店	小林書院	厚生省	高陽書院	高陽書院	光洋社	新光社	新知社	新華社	華章社
春秋文書社	斯文書院	改文立星醒	造文社	文館社	警共教金	光警金	光警金	新編會	新編會	新編會	新編會	新編會
神田區一ツ橋通三〇教育會館												
麹町區九段四ノ八	麹町區九段四ノ八	小石川區武島町一〇	小石川區武島町一〇	小石川區幸町一ノ六	芝區新橋七ノ一二	京橋區銀座四ノ二	京橋區銀座四ノ二	京橋區木挽町五ノ四	京橋區木挽町五ノ四	京橋區木挽町五ノ四	京橋區木挽町五ノ四	京橋區木挽町五ノ四
淀橋區百人町三ノ二八五												
神田區今川小路一ノ四												
淀橋區下六番町四八												
淀橋區木挽町一六												
神田區銀座西一ノ三												
牛込區新小川町一												
日本橋區吳服橋二ノ五												

書圖薦推會協館書圖本由



卷之三

農學博士 松村松年 謹題
平山修次郎著 好評噴々

本書は昆蟲學の泰斗松村博士の監修たる校讎の下に
昆蟲一千十七種につきて美麗なる色彩と形態をその
まゝ收録し、之に形狀・棲息・產地等を詳述せる外、和
名目・別索引も收められてゐるから、正に昆蟲界の縮
圖とも言ふべく、斯學研究家は勿論一般趣味家、畫家
にも得難き好資料である。

原色版一〇四頁
解說一九二頁
附錄一八頁
和名索引二三頁
目別索引二三頁
定價三圓 (送錢料)

色原蝶類圖	色原甲蟲圖譜二	色原貝類圖	色原鳥類圖譜二	色原菊花圖譜二	色原四季の草花
一圓五十錢・六錢料	安立綱光著 山川默著	增訂一圓七十錢・六錢料 山川默著	内田清之助著 下村兼二著 二圓三十錢・十錢料	丹羽鼎三著 二圓三十錢・十錢料	版訂增中路正義編著 二圓・十錢料
一圓五十錢・六錢料	八錢料	六錢料	六錢料	六錢料	十錢料

圖書目錄進呈

下座波阿區西市阪大 堂 省 三 一町保神區田神市京東
0031-8阪大替振 番五五五一三京東替振

麹町區有樂町一丁目
神田區駿河臺三ノ六
四谷區仲町三
神田區猿樂町二
京橋區寶町一ノ一
四谷區霞丘町一
神田區京橋三ノ四
神田區小川町三ノ八
通神保町三
駿河臺三丁目
淡路町一ノ一
日本橋區室町四ノ五
麻布區筭町一八〇
日本橋區通二丁目
淀橋區戶塚町一ノ四四九
神田區駿河臺三ノ一
神田區小川町小川町ビル
芝區田村町六ノ四
本郷區本郷五ノ三五
神田區宮本町七
京橋區銀座西二ノ一
淀橋區戸塚町一ノ五八

昭和九年三月二十五日印刷
昭和九年三月二十八日發行
良書百選第三輯
定價金二十錢
42
發行權者 社團 日本圖書館協會
代表者 松本喜一
印刷所 東京築地活版製造所
東京市鮑町區三年町一番地文部省内
發行所 社團 日本圖書館協會
振替東京二四一八一番

専門十大家共編	模範佛和大辭典	9.00 價送 .33
學書院 教授 山本直文編	新訂 增補 標音佛和大辭典	2.00 .5
佛蘭西文學會編	新佛和小辭典	2.80 .5
陸軍大學生 丸山順太郎編	白水社 和佛辭典	3.80 .31
大阪外語研究所 德尾俊彦編	新佛和熟語辭典	2.80 .15
大分高農教員 野口洪基編	佛蘭西語 不規則動詞逆引辭典	2.50 .15
ジェ・ルノンドオ編	改訂 佛和兵語辭典	2.80 .15
陸軍大學生 丸山順太郎著	和英 獨習フランス語捷徑	2.00 .15
陸軍大學生 丸山順太郎著	續 和英 獨習フランス語捷徑	2.00 .15
女學習院教授 井上源次郎著	井 上 フランス語 の基礎	1.80 .14
大阪外語研究所 德尾俊彦著	英語より佛語へ	1.80 .14
大阪外語研究所 目黒三郎著	佛語の發音	1.30 .04
目黒・德尾共著	改訂 佛蘭西廣文典	3.00 .21
陸軍大學生 丸山順太郎著	實用佛蘭西文法捷徑	2.50 .21
文化學院教授 木下牛治著	政治經濟佛蘭西讀書文法	2.00 .15
東京帝大教授 内藤灌著	改訂 實習佛蘭西文典	1.80 .14
大阪外語研究所 德尾俊彦著	佛文解釋法 短文篇	1.50 .06
目黒・德尾共著	佛文解釋法 熟語篇	1.50 .06
目黒・德尾共著	佛文解釋法 長文篇	2.20 .15
大阪外語研究所 德尾俊彦著	佛文解釋法 類語篇	2.50 .15

東京市神田區駿河臺下 白水社 振替東京一一九二二

最 新 刊

佐野徒然草新講

修官省圖書監文學士 佐野保太郎著

菊版六百三十頁 定價四圓 送料貳拾貳錢

研究者の最も注意すべき事は参考書の選擇である。若し之を誤るならば、十年の苦心も只水泡に歸してしまふ。世に徒然草の参考書程種類の多いものはないが、而も從來の註釋書は何れも只漫然と他人の説を無批判的に羅列したものに過ぎない。本書は古事記における古事記傳のやうなもので、本書出でて始めて徒然草は眞に理解されるに至つたのである。本書の内容は本文要旨口譯語釋参考より成るが、その精細正確且懇切なる點に於て本書が從來の總ての徒然草講義に勝るは勿論、本書の眞價は實に著者獨得の創見を發表した所にある。本書を見ずして徒然草を語るならば、それは時代後れたるを免れない。苟も徒然草を研究せんとするならば、何をおいても先づ本書を繙かねばならぬ。

解註 佐野保太郎著	萬葉集 全卷	徒然草講義 下上	國史と日本精神の顯現 行	兒童心理學
增補改訂 文學博士清原貞雄著	上卷下卷各四・五〇	定價三・五〇 送料・二二	定價五・〇〇 送料・三三	日本教育學
補訂 文學博士吉田章信著	送料・二二	送料・一〇	定價四・五〇 送料・三三	久保良英著
體力測定 文學博士清原貞雄著	定價一・五〇 送料・一〇	定價一・五〇 送料・一〇	定價五・五〇 送料・三三	檜崎淺太郎著
行 講話 文學博士西晋一郎著	送料・一〇	送料・一〇	送料・一〇	定價五・五〇 送料・三三

番三一三八七京東替振
番八六四四田神話電
店書井藤
區田神市京東
目丁三臺河駿

書良るざ能く欲に世處に養修

▲**祐輔著 増上絶上街の人の**
東西古今の政治家、宗教家、文藝家に對する鋭い批判!!
林田太郎著 日本政黨史 上下價二・八送二・三
政黨に對する再批判を要する時何人も一讀すべき大名著!
▲**大日本明治大帝** 定價五・〇
調談社編
昭和維新に直面せる國民の必讀すべき國寶の大名著!

記傳き難め禁歎感！々嘆評好

人間大石を斯くまでに描いたものはない、萬人必讀!!

▲ 柳太郎著 大限重信 定價〇・五
恩師を慕ふ熱情止み難く涙と共に描くその全生涯!!

▲ 祐輔著 英雄待望論 定價〇・五
工場に農村に海濱に無名の英雄の出現を待望せる名著!!

京東替振
○三九三 社談講會辯雄本日大 鄉本京東 所行發

慶應大學教授
大正大學教授

友松圓諦著・隨筆集

佛教の尊さはその教理々論に非
この書はその體驗修行の尊い記録
せるものといふべく、又「佛教概
き、面白く深い哲理と佛教の教

曩きに「現代人の佛教概論」を出
書界を感激させた、我が佛教界の麒麟
一本書は著者の身邊に起伏し、心頭
譯と輕妙の筆に收めて、知らぬ間に讀
も八丁手も八丁の此の著者にして初め
代の相違はあれど兼好の「徒然草」に
い。敢て一讀を薦む。

最新刊

全國書店にて發賣。品切のときは
ハガキで御註文次第代引にて送本

友松圓諦著 現代佛教概論
文部省推薦 国書評議會推薦

友松圓諦 聖詩教法句經

J.O.A.Kより聖典講義として放送せし法句經の定評ある名譯を今同全部改訂行。新装本として近日刊行。

東京物語三番四四二

第一書房

「國民百科」は貴下の莫大な書籍價を節約し高價な失敗を未然に防ぐ

「國民百科大辭典」は富山房が創業五十年記念出版として四十餘年來、
「大日本地名辭書、日本家庭大百科事典、大言海」等大小三十餘種の辭典出版による多年の經
驗と研究と學界、文界、藝術界の諸權威一千餘家の聰智により大成した我國百科辭典が嘗て企て及ばなかつた眞に新

創意、新機軸を盛る國民的大百科辭典——廣範な社會文化的一大明鏡である。

富山房 國民百科大辭典

全十一卷 第一卷出づ

僅か一圓づゝの貯蓄により貴下は最高の權威と無限の利便を藏する一大圖書館——

「國民百科」を永久に所有することができる。



富山房

特價各卷	5円
(全十二卷)	本文一段横組八百餘頁補闕百餘面
六十円	體積二段横組八百餘頁補闕百餘面 類々革装天金・計麗な装模 送算各卷函内・一二内地・四五版土・七五

一円の分拂あり 詳内容見本進呈

著二刊新筆隨の者學科

著郎次淺丘

士博學理

著郎二辻

士博學工

猿の群から共和國まで

西洋拜見

著者はこゝに叙ぶるまでもなく生物學の泰斗で本邦に於ける世界的漢學の一人である、と同時にその主角ある學者の氣韻をもち、啓蒙的にして滋味ある文明批評は識者の既に知悉するところである。その視野の多角的な、見地の飽くまで科學的な點に於て全く餘人の及ばぬ興趣を覺える。複雑多岐なる人間生活、社會様相に對して著者は進化論的立場より獨自の見解を持し、折に辛辣なる批判と冷靜なる解剖を與へ更に微笑ましき諷刺をも點綴し、然も説述する處は時代に即しつゝ時代を超越し、或は唯物的に或は人情の機微に觸れ、その觀察と論斷は正當にして屢々諷諭的である。著者の面目躍如たるものがある。

▼四六版三六四頁・三色版コロタイプ網版十數葉挿入端巻本・定價一圓八十錢・送料十四錢

讀者はこゝに人間本然の姿を見、團體生活の本質的なものを見、團體生活の本質的なものを把握し、限りなき思索の材と深遠なる示唆とを受けるであらう。

四二六二田 神話電
四七〇六四京東 替振
社 共 発 河 田 丁 三 目 田 京 東

明治文化研究會

幕末新聞叢書

最新刊

菊判 四九二頁
クロース製西入
口譜・折込圖五葉
定價五・〇〇 送料・三三

暗黒なる維新史の裏面を照す炬火！

「新聞叢書」とは、後に「西洋雑誌」や「中外新聞」を發行して我邦新聞事業の魁となした「會譯社」の教授及びその同好の洋學者として、外國新聞の翻譯をなすたはら、外國新聞の記事にならつて當時の内外の世情機務を集めた筆寫の回観雑誌である。慶應元年から三年に及び、長州征伐の記事を中心として建白書あり、巷説風聞あり、會議の記錄あり、出張地よりの書状あり、海外よりの通信あり、當時の幕府の内狀で今迄知られなかつた數多の事實が始めて白日下に曝された。原本は今東大圖書館に於ける最貴重書の一で披見すら容易に許されず、特別扱ひにされてる天下の秘籍である。史料として絶大な價值を持つのみならず、読みものとしても無類に面白い。この貴重な文獻が七十年の埋没の後に始めて世の光を見たことを我々は甚だ欣快とするものである。

東京ツ一
神橋通
岩波書店
○四二六
振替

小山書店

東京市石川区
諭訪五番地
電話小川七五七五
振替東京三九五番地
石川市小石川



圖書館協会
推薦

新俳文 高濱虚子著

本書の文章を見ると、この詩人の心象が餘と共に盡々漫みわたり、その冴えた技巧が愈々天衣無縫の妙に入つたことを思はしめる。芭蕉の文章は元録の名碑文であるが、虚子の寫生文に至つては、實に昭和の新しき名碑文として長く後世に残し、廣く文章の模範とする可きである。石井柏亭著 製本 定價二圓 送料十錢

書道と畫道 津田青楓著

長谷川知是閑氏の私信より、「書即畫、畫即書」といふ日本人でなければ、日本畫家でなければ、とても徹底的に理解し得ない藝術觀を頼る精緻な筆致で説いてゐる此の書自體が一つの「眞の藝術」になつてゐるではありませんか。四六判二三〇頁 三色版一、刷版五葉 定價二圓 送料八錢

思想遠近 谷川徹三著

豊富多面な古典的教義を骨董にして常に現代の生きた問題に關心し、現代の問題に疑えずその觸手を延ばしながら時流に足をさらはれないで、その中に普遍的に意義あるものを掘り出さうとするのがいつでも谷川氏の行方である。ここには「ゲーテに於けるスピノザ主義」のやうな學問的研究もあれば「現代の文學」のやうな今日の文學の包括的な展望もあり、さうかと思ふと藝術の批評があり、人物のスケッチがあり、書物の紹介があり、純然たる隨筆があり、さながらの寫真集である。定價二圓三十錢 送料十四錢

入學試験

お伴の記 野上彌生子著

定價一圓二十錢
送料十錢

ハムレット 本多顯彰譯

定價一圓五十錢
送料十錢

ロミオとジユリエット 本多顯彰譯

定價一圓五十錢
送料十錢

内部と外部 谷川徹三著

定價一圓五十錢
送料十四錢

柿の種 寺田寅彦著

定價二圓
送料十錢

雲草人 平塚明子著

定價二圓
送料十二錢

維納の殺人容疑者

佐藤春夫著

定價二圓三十錢
送料十四錢

文藝復興 林達夫著

定價二圓
送料十錢

ドイツ思索と隨想 山内義雄著

定價一圓七十錢
送料十二錢

スカンデイナギヤ ギリシャと

定價一圓三十錢
送料十二錢

黃金蟲 小宮豊隆著

定價二圓
送料十二錢

心理學概論 増田惟茂著

定價一圓八十錢
送料十二錢

明治文化研究會

幕末新聞叢書

最新刊

菊判四九二頁
クロース装函入
口繪・折込圖五葉
定價五・〇〇送料・三三

暗黒なる維新史の裏面を照す炬火！

「新聞叢書」とは、後に「西洋雑誌」や「中外新聞」を發行して我邦新聞事業の魁をなした「會譯社」の同人達が、それらの發行に先立つて彼等が「開成所」の教授及びその同好の洋學者として、外國新聞の翻譯をなすたはら、外國新聞の記事にならつて當時の内外の世情機務を集めた筆寫の回覧雑誌である。慶應元年から三年に及び、長州征伐の記事を中心として建白書あり、巷説風聞あり、會議の記録あり、出張地よりの書状あり、海外よりの通信あり、當時の幕府の内狀で今迄知られなかつた數多の事實が始まつて自日下に曝された。原本は今東大圖書館に於ける最貴重書の一で披見すら容易に許されず、特別扱ひにされてゐる天下の秘籍である。史料として絶大な價値を持つのみならず、読みものとしても無類に面白い。この貴重な文獻が七十年の埋沒の後に始めて世の光を見たことを我々は甚だ欣快とするものである。

京東一
神橋通
岩書店
二六四〇

小山書店

東京市小石川町九番五号
電話七五七五番
振替東京三九八番地
謹訪東京九五番地



入學試験 お伴の記	野上彌生子著	定價一圓二十錢 送料十 錢
ハムレット	本多顯彰譯	定價一圓五十錢 送料十 錢
ロミオと ジュリエット	本多顯彰譯	定價一圓五十錢 送料十 錢
内部と外部	谷川徹三著	定價一圓五十錢 送料十四 錢
柿の種	寺田寅彦著	定價二 錢
雲草・人	平塚明子著	定價二 錢

殺人容疑者	佐藤春夫著	定價一圓三十錢 送料十四 錢
文藝復興	林達夫著	定價二 圓
ドイツ思索と隨想	山他内義雄著	定價一圓七十錢 送料十四 錢
スカンデイナギヤ	安倍能成著	定價一圓三十錢 送料十二 錢
ギリシャと スカンデイナギヤ	佐藤春夫著	定價一圓七十錢 送料十二 錢
黃金蟲	小宮豊隆著	定價二 圓
心理學概論	増田惟茂著	定價一圓八十錢 送料十二 錢

圖書協会推薦

新俳文 高濱虚子著
書道と畫道 津田青楓著
思想遠近 谷川徹三著

本書の文章を見ると、この詩人の心像が餘と共に蘇々澄みわたり、その冴えた技巧が餘々天衣無縫の妙に入つたことを思はしめる。芭蕉の文章は元録の名棋文であるが、虚子の駒生文に至つては、實に開拓の新しき名棋文として長く種目に残し、廣く文部の模範とすべきである。石井和泉製額 定價二圓 送料十錢
長谷川初是同氏の私信より、「書即ち、要即ち」といふ日本人でなければ、日本作家でなければ、とても假底的に理解し得ない芭蕉觀を有する枯淡な筆致を説いてゐる此の苦自體が一つの「芭の藝術」になつてゐるではありますか。四六判二三〇頁 三色版一、刷版五葉 定價二圓 送料八錢
豊富多面な古風的敘述を背景にして常に現代の生きた問題に關心し、現代の問題に感えずその觸手を延ばしながら時流に足をさるはしないで、その中に普遍的に意義あるものを擷り出さうとするのがいつでも谷川氏の行方である。ここには「ダーテに居けるスピノザ主義」のやうな學問的研究もある。現代の文學のやうな今日の文學の包括的な風貌もあり、さうから思ふと美術の批評があり、人物のスケッチがあり、書物の紹介があり、純然たる圖譜があり、さながらの萬能鏡である。定價二圓三十錢 送料十四錢

319

478

終

